

---

# ベガへの祈り

山田 潤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ベガへの祈り

### 【Nコード】

N9035U

### 【作者名】

山田 潤

### 【あらすじ】

家庭を崩壊させて、尚、理想の恋愛を追い求める小野木淳一。そんなバツイチアラフォー男に六年もの間、恋心を寄せ続けた中尾紗江子には哀しく辛い過去があった。

成就したかのように見えた二人の恋を、気まぐれな運命が翻弄する。ささやかな幸福を手にするため、人は幾たび、涙を流さねばならないのだろう。

番外編含む全三十九話完結予定です。この作品はブログ記事に  
加筆・修正をして転載しました

『二度あることは三度ある』

末尾に小さなハートマークが二つ並んだ携帯メールの文面に目を疑った。紗江子か……どうゆう意味なんだ？

九年間、交際を続けた女性との別れをふっ切ろうと数回デートしたものの、結局交際までは発展せず、そんな俺の優柔不断さに「バカヤロー、三度目はないからな」と、泣いてイタリアンレストランの席を立った女性からの、約ひと月ぶりのメールだった。

え？ あるのか三度目が。期待と戸惑いが交錯する。

機械設計の会社に勤務する俺が、ほぼ毎日出入りする役所がある。中尾紗江子はそのに勤める二十六歳。色白でほっそりとした彼女は、いつも長い髪をきれいな装飾具でまとめていた。

多くの女性職員は年齢層も高めで、Aという若手女優に似た彼女に注目する輩も多かったらしい。、実際、上司らしい優男が、紗江子にしつこく言い寄っていたのを目にしたこともあったのだが、何故だか俺に白羽の矢が立つこととなる。

中肉中背、際立った外見でもないことを自覚する俺自身、意外ではあったが、自己アピールに終始する若者には興味が湧かず、父親の雰囲気を持った中年男が彼女の好みであった事を後に知る。

だからだと時間ばかりを消費する、お役所仕事を待つ間、別れた女性の面影を求め、携帯電話の受信フォルダに残したメールを読み返す。そんな女々しい俺だったのだが、その時の悲しげな顔と強面の外観との落差に声をかける勇気が生まれたと言う。

これだから、男と女の出逢いは分らない。

最初のデートで紗江子はこう言った。

「いつだったか掃除のおばさんにぶつかって転ばせちゃった人を怒鳴りながら、散らばったゴミを一緒に拾い集めてあげていたことがあったでしょう？その時から惹かれていたの」

そんなこともあったかな？ 俺に確たる記憶はなかった。

そして二度目のデートの時だ。やはり別れた彼女が忘れられないからと、あるテーマパークへ行く約束を反故にした俺に、冒頭の「バカヤロー」が浴びせられることとなる。

元カノとの別れ、妻との離婚のための話し合いにおいて『死んでしまえ』『この最低男』などと、女性から頻繁にいただく罵詈雑言ばりぞつごんに慣れていた時期の俺ではあったが「バカヤロー」はそれなりに新鮮だった。

言い忘れたが、当時、俺には十五年連れ添った妻と二人の娘がいた（離婚はその二十日後に成立する）。にも関わらず元カノとも、またそれ以外との女性とも重複して交際ができちゃう程、倫理観りんりかんの歪ゆがんだ男なのである。

独身歴、彼女いない歴の長い男性諸兄には誠に申し訳ない話だが、金と同じで女性も集まるところには集まるものなのだ。勿論、それには相応の努力も必要となる。そして、そんな不真面目な俺の評判は、偶然にも妻の友人が多く勤めていた紗江子の職場において推して知るべしなものとなっていた。

実際、「あの男だけはやめなさい」といった、俺にとって甚だ迷惑な忠告を紗江子は少なからず受け取っていたと言う。

それでも彼女が俺を選んだのは、やはり恋愛は理屈ではないからなのであろう。遺伝子が求め合うとかいうではないか。

とにかく、そのメールが届いた正月休暇中の俺は暇を持て余しており、節操せつそうもなく紗江子の電話番号をコールしてしまう。

母親は年末から叔母と旅行に出かけているので今年は帰省してないと、紗江子が電話口で告げてくる。

「予定がないのなら夕飯を付き合わないか」  
おそろおそろ訊ねる俺に彼女は同意したが

「あのイタリアンレストラン以外でよろしく」と注文がついた。

正月料理に飽き飽きしていた俺が最初に思い浮かべたの、実はその店だったのだが、先に述べた痴話喧嘩みたいな騒動からどれだけでも経つておらず、さすがに顔を出しにくくもあるなと考え直す。とにかくマンションまで迎えに行くから食べたいものがあれば考えておいてくれと言って電話を切った。

映画の趣味が合い、体の相性も九年かけて摺り合わせ、ほぼ阿吽あうんの呼吸こきゅうの域に達していた元カノをそう簡単に忘れられるほど俺は潔い男ではない。元旦の占いに書かれていた「諦めかけていた恋が復活するかも知れませんが」に縋すがるほどの惚れっぷりだったのだから、そのため、なんだ、こつちの方だったかと切り替えるには多少の努力を要したが、別れ際に宣言した「永遠に愛しています」は「永遠に君以外の女性とは交際しない」と同意語ではないと自分に言い聞かせ、車を走らせた。

幹線道路は正月で混雑しており、普段より、やや時間はかかったが十五分ほどで紗江子の住むマンションにたどり着く。築二年というだけあって煉瓦色れんがいろの外壁やドアの鮮やかなブルーも色褪せてはいない。独身女性が好みそうな清潔感が感じ取れた。

そこは最近増えてきた？女性専用？というもので、二親等以内の男性しか立ち入れないという。が、彼女以外の住人が旅行や帰省でほとんど留守にしており学生寮ほどの厳しい規律もない。さらには見た目父親で通りそうな外見の俺であったため「寒かったでしょ。コーヒーでも、いかが？」との招きに、ためらうことなくキ

レイに片付いた部屋に上がり込んだ。

悪癖あくへきなのか長所なのか、俺は初めての部屋でも全く臆おくすることなく寛くわんぐことができる。怖こわそうな父親でも居れば話は別だが。すすめられるままに今や懐かしくなった炬燵こたつに足をすべり込ませ、無遠慮にも独身女性の部屋を眺めまわしていた。一DKといったところか。本棚にはたくさんさんの小説がキッチンと並べられていた。友人らに「らしくない」と言われるが、実は俺も読書家を自負していた。見覚えのある作家名が並ぶ背帯せおびの列に、話題に困ることはないなと、ほくそ笑んでいた。

「お砂糖はいくつ？」

薄い壁の向こう、キッチンであろう辺りから紗江子が訊ねてくる。

「あ、ひとつで」

単に「いくつ？」という問い掛けなら「ヨ、ヨンジュウニサイデス」とボケてやるうかとの企みはその時点で失敗に終わる。しかし、女性の警戒心を解きほぐす術は多彩な俺である。焦りはなかった。

揃いのコーヒーカーップをトレイに乗せ紗江子がリビングに戻ってくる。向かいに座るのかと思った彼女だったが俺の左手側に入ってくる。良い兆候だ。

足をすべりこませる際に俺の足とぶつかる。「痛い。折れたらどうしてくれるんだ」とふざけながら、さするフリをして彼女に触れる。足を引く様子もない紗江子の男性経験はどれほどのものなのかを無言で推し量っていた。

「あ、おヒゲ伸ばしてるんだ。怖さ倍増ね」

この二週間、剃っていない俺の無精ヒゲを、今、気付いたかのように彼女がからかった。元カノにせよ、この紗江子にせよ、父親みたいな年齢の俺に話す口調は至って気やすい。よほど精神年齢が低く見られていたのだろうか。

「ヒゲと言えば……」部分的に白くなりかけたヒゲをマスカラで染め、そのままキスをして相手の口の周りを泥棒コントみたいにしてしまった失敗談を話す。彼女は大きな声で笑った。

「なんせ、バカヤローですから」

以前の紗江子の発言を持ちだし、彼女の反応を待つ。

「あの時はごめんなさい。ただ悲しかったの。そして帰ってからは次に逢うあなたにどんな顔をすればよいか分からなくて怖かったでも、すぐにメールをくれたわよね。翌日の職場でも、いつもと変わらず頭を掻きながら会釈してあたしの前を通り過ぎるあなたは、あたしの思った通りの大人だった」

神妙な面持ちで謝意を告げる。

「いや、あれは俺が全面的に悪い。頭からパスタをかけられても仕方ないところだったんだ。そうしなかった君に感謝してる」  
若い女性の褒め言葉に容易く感動してしまう俺は、一瞬言葉に詰まったが、慎重に選んで答えた。

「ところで……あたしにはしないでね」

笑顔に戻った紗江子が悪戯っぽく呟く。

「え？ キスをかい」

関係の順調な進捗状況を信じて疑わなかった俺は少し慌ててて訊き返す。

「そつちじゃないの」

今度は小声で囁く。そつちじゃない という事は…… どれだけでも飲んでないコーヒーをこぼさないよう注意してテーブルに置き、彼女の腕を掴んで引き寄せた。拒む様子は感じられない。そのまま唇を重ねる。積極的ではないがちやんと応えてくれているキスだった。二十六歳か…… まあ、当たり前前の反応だな。

こういつた俺の段取りを値踏みと思われるのは心外だ。言葉でもって男性経験を根掘り葉掘り聞くよりも、この方がよほどスマートではないか。そして女性へのアプローチは、その男性経験の度合いによって変えねばならない事も理解している。

油田にせよ温泉にせよ闇雲に掘って行きあたるものではない。どのような場合においても慎重な調査は必要なのだ

「ねえ、あなたの、お友達の水野さん、彼が呼ぶみたいにあな  
たを呼んでもいい？ ジュンって」

ステーキハウスを後にした車中で紗江子がそう言った。小野木淳一  
というのが俺の名前だ。不惑しじゆつになったばかりの、バツイチ男である。

「構わないけど、？おとうさん？ じゃなくっていいのか？」  
俺が茶化す。

「そう呼んで欲しい訳？」

やや不服そうな顔で彼女が訊き返してくる

「いや、ただ、ほら、君も俺も役所じゃ顔が売れてる。立場上、  
うまくないんじゃないかと思つてさ。なんせ俺の評判はああな  
んだし」

食事中も散々、彼女の勤務先における俺の悪評を聞かされた。酷ひど  
いものでは、俺が数人の女性を自殺に追い込んでいたとか、非嫡出ひちやくしゅつ  
子の数は両手の指をおつても足りない、などとも言われていたそう  
だ。おかしそつに話す紗江子ではあつたが聞いていた俺の顔はさぞ  
かし引き攣ひきつつたものとなつていたことだろう。

一方、悪いものには悪いと理不尽りふじんな担当者に敢然として立ち向か  
う姿勢や、言葉が通じず困つてゐる外国人に、拙つたないい英語で恥ずかし  
げもなく話しかける行為は、それ以外の職員に評価されているとい  
う。どうせなら万遍まんべんなく評価されたいものだと思つたが？女の敵？  
に対して一致団結した女性軍の評価は、その程度では覆らないもの  
だった。しかし、少なくとも紗江子を除く役所全員が敵ではなかつ  
たと聞けて安心した。

「プライベートでだけよ。職場では、そう呼ばないから安心して。  
それに、いいじゃない。人がなんて言つたつて。人は自分の信じた  
いものを信じるの。あたしのそれはあなた……ジュンなんだから」  
心もち顎あごを上げ、毅然きぜんとして言い放つ彼女は颯爽さつそうとしてて恰好かっこうよ

かった。

「九年間付き合った女性を裏切ったのも本当なんだぜ。信じてないみたいだけど」

「あんな悲しそうな顔してたんだもの、わかってるってば。あたしもそんなふうにあざされてみたいな。今は……いいえ、ずっと二番目でも構わない。地球最後の日になったら二番目に助けに来てね」

「地球最後の日には必ず助けに行く」そう、元カノに自分に誓った言葉はテemapパーク行きを断った時に伝えてあった。しかし、なんで二十六歳の小娘がこうも物分かりがよいのだ。母親が年老いた時には育ててもらった恩返しに自分が最期まで面倒をみる。だから結婚してくれともいわないし、するつもりもないと言葉を続ける。

「でも、あなたに似た男の子なら欲しいかも」

そう言つて、紗江子はペロリと舌を出した。

「都合がいい女？どころではない。父、義父、元カノ、息子（多分）、妻とたくさんの方が去つて行つた昨年のハードラックが一気に帳消しにされたようだ。ドッキリか？ 誰かが俺を騙だまそうとしているのではないのか。あるはずのないカメラを探すかのように信号待ちの車内を見回す。

「小さいけどちゃんとお風呂もあるのよ。今、マンションに残っている人は三階の角部屋のおばさんだけだし、上がつてく？」

マンションへと送った紗江子が車を降りずに、そう言った。何かを思いつめたような表情にも見えた。

今どき、風呂のないマンションもないだろう。心の中で呟やぶきながら助手席に回つてドアを開ける。精一杯の勇気を出して言ってくれたのだろう。彼女の細い肩が小刻こくみに震えていた。

「着替えも持ってきてないし、別れた妻の実家に年始の挨拶に行つた娘達をそろそろ迎えに行かないと。今夜はこれで失礼するよ。

また明日、職場で」

玄関先で肩を抱き寄せ、軽く唇に触れる程度のキスをしてすぐに体を離す。性的欲求がない訳ではなかった。元カノへの義理だてで

もなかったはずだ。ただ、なぜかその気になれなかったのだ。今夜は戻らないはずの娘たちを言い訳にして車に向かう。 今

「おやすみなさい」

「おやすみ」

背中に向けた声に振り向き、軽く手を振った。

おそらく、俺はまた誰かを傷つけるのが怖くなっていたのだろう。

#### 四

「それって、まるで嫌われることを目的としてたみたいじゃない」  
元カノに送ったメールの内容を伝えた時、紗江子はそんな疑問を口にした。

「そうだよ。なんせ九年もの間を一緒に過ごしたんだ。別れは受け入れられても思い出しには、いつまでも苦しめられる。彼女の生活空間に深く入り込んでいた俺の痕跡こんせきを消し去るには徹底的に憎んでもらうしか方法がなかった。それが？永遠？の前に果たすべき俺の責任だったんだよ。」

愛し合ったばかりの俺と紗江子がシートにくるまつたまま語り合う。息のかかる距離に彼女の顔があった。

「こんな話、つまんないだろ？次は君の事を聞かせろよ。」  
男性経験を追及した訳ではない。恋人の過去に嫉妬しつとするような若さや野暮やぼを俺は持ち合わせてはいない。

「ううん、つまんなくなんかない。そりゃあ他の女性の話が楽しい訳じゃないけど、ジュンがそれを話せるのはあだしだけなんですよ？ だったら、もつと聞かせて欲しい」

純愛ドラマなら人を傷つける怖さを知った俺と紗江子が結ばれるには多くの時間を必要としたはずだ。しかし倫理観を問い質される立場でもなくなっていた俺の矮小わいしょうな貞操観念ていそうかんねんなど、たった三日もあれば木っ端微塵ぼみじんに砕け散る。彼女の勇氣に比べられなかった夜から数えてちょうど三日後、俺達はあるホテルのベッドの上に居た。

「分かった。また聞いてほしくなったら話すよ。でも次は君の番だ。そうだな、例えば亡くなったお父さんのことでも聞かせろよ。病気だったのかい？」

彼女の父親が居ないことは知っていたが、その詳細までは聞かされていない。

「それよりさ、もしもあたしがジュンの前から居なくなったらナ

オコさんを想うように星に祈ってくれる？」

ペテルギウスとリゲルに挟まれた三連星を元カノに見立て、彼女の幸せと健康を祈っている話を持ちだしてくる。確か、この話もテーマパーク行きを断った時の紗江子に語ったものだ。そして、どうやら父親のことには触れられたくないように感じられた。無理に聞き出そうとして気まずくなる愚<sup>ぐ</sup>は犯すまい。家族の話は先にでも聞けるだろう。それよりも、彼女の問い掛けに含まれた穏やかでない部分に気をとられていた。

「居なくなるって移動でもあるのか？ 県の職員なんだから、そんな遠くじゃないよな」

「あはは。もしかしてビビってくれてる？ もしも の話しだつてば。移動の話しなんかはない。あつたつて断る。ジユンの瞳から悲しみが消えるまで離れないで傍に居てあげる」

手を叩いて笑う彼女に、実際にそうした訳ではないが胸をなでおろした。

「ふう、脅かすなよ。……そうだな、紗江子も三文字だから三つ並んだ星を見つけてやるよ。そして戻ってこーい戻ってこーいて毎晩呪つてやる」

「呪うのかよ」

彼女が口を尖<sup>とが</sup>らせた。

そんな表情や何気ない仕草の発見が楽しい。「やはり恋愛は毎日が初恋だな」 頭で考えた言葉がそのまま口をついて出る。

「なあに？ それ」

お互いが知り合つてゆく過程のときめきを表現した俺のオリジナルだ。口説き文句として用いてもいたが、三十代に入った辺りから前後が入れ替わる事もしばしばとなっていた。後半を除いて紗江子に伝える。

「素敵ね。じゃあ、ジユンがずっと、ときめき続けてくれるよう、あたしのは何も話さないでおくわ」

「それはずるい」

俺は抗議の声を上げた。

「ねえ、あたしにして欲しいことがあったら遠慮せず、言っ  
てね。胸だつて小さいし、どうすれば男の人が悦んでくれるのかも知ら  
ない。ジューンがあたしを嫌いになる前にちゃんと教えて欲しいの」  
愛し合つた後の俺には紗江子の男性経験が豊富でないことは分か  
つていた。

「焦るこたあないさ。俺は君がいきなり大人の女性になることを  
望んでる訳じゃない。愛が深まれば互いを思いやる気持ちも高まる  
そうやって自然に全てが上手くゆくようになるものさ。『愛の発  
達に少しだけ遅れて性欲がともなうくらいがちょうどいい』 二一  
チエもそう言つてる。それと俺は控えめな胸が好きなんだ」

彼女の言葉をいじらしく思いながらも、真つ直ぐにこちらを見つ  
めて返してくる視線に、汚れた魂の俺は面映おもはゆく感じる。少しクサ  
かつたか？

「分かつた。でも約束よ。こうして欲しいって思つたらちゃんと  
話してね」

得心のゆかない様子の紗江子に、こう付け加えた。

「いいかい、君は俺の奴隷じゃなく俺も君の僕しもじゃない。年齢が  
幾つ離れていようと、恋愛における、お互いの立場はイーブンであ  
るべきだ。俺がこうしろと言つたところで納得の行かないことはす  
る必要はない。上手く行かないことがあつたら二人でとことん話し  
合つて解決策を探す。そうやって、お互いがお互いが必要と感じら  
れるようになる。他の誰かでは代用のきかない二人になつてゆくん  
だ。」

真意ではあつたが、こんな齒の浮くようなセリフがスラスラ言え  
るのは中年男の図々しさ以外のなものでもない。しかし、若者に  
はない武器でもあつた。

「あつ、一つあつた」

クサイセリフの後はフォローも大切だ。

「なあに？」

「もつと食べて肉をつける。君は細すぎる。抱きしめたらポキリと折れちゃいそうでおっかない」

「頑張る。こうなれるように」

一介のサラリーマンとしては無駄としか思えない俺の厚い胸板に、紗江子が手を添えた。

## 五

「ズルイっすよ。ジュンさんは」

役所の窓口が開かれるまでの時間を休憩室きゅうけいしつで待つ俺に、溜まった鬱憤うつげんを吐き出すかのように齋藤が話しかけてくる。紙コップに入ったコーヒーが、その勢いに波立つ。外は粉雪の舞う一月の朝だった。

「何の話だ？」

いきなり責め立てられることになった俺に心当たりはない。同じく手にしたコーヒーを口に運びながら訊き返した。

「このあいだ中尾ちゃんとボウリングに行ってたそうじゃないっすか。この職員が見たっていつてましたよ。奥さんが居て、ながく付き合ってた彼女も居て今度は中尾ちゃんですか。そりゃあないっす、俺が狙ってたんすよ、あの子は」

中尾？ ああ、紗江子のことか。どうやらと彼女とのデートを誰かに見られたらしい。しかし、齋藤が狙ってたいななんて話は初耳だ。そもそも男女の関係は狙ったからといって手に入るようなものでもない。見当違いけんとうちがいな非難に少しだがムツとした。

齋藤は俺が毎日出向く役所で親しく話しかけてくるようになった二十八歳の青年だった。小太りの体に愛嬌あいけうのある笑顔で年配の女性職員に人気があると聞いている。オーストラリアに生息する小動物に似てなくもない。そういえば彼がここに通い始めて間もない頃、手続きの手順を俺に訊ねてきた時ひとわりも人懐っこい笑顔だったなど、思い出す。

設計がやりたくて入社した会社だったが、現場では歯車の図面を一枚書かせてもらったきりで、こういった役所回りや営業の真似ごとをさせられるようになっていた。俺がいつも不機嫌そうに見えるのはそのせいだ。

そして、群れを成すのが嫌いな俺は、同様の役回りを仰せつかった他社の連中により構築されるコミュニティには属さず 「景気は

「どうですか？ 新規受注はありますか？」 などといった彼らの問い掛けにも必要最小限の受け答えで一匹才力ミを貫いていた。だが、この斎藤と設計の学校で机を並べていた水野、そして俺の勤務先の系列会社にあたるに機械工作会社に所属する渡辺とだけは情報交換をする程度の付き合いがある。

「そもそも、いつ、どうやって口説いたんすか？ 元カノと別れたっていう去年なんか死神みたいな顔してたクセに」  
彼の追及は止まない。

「死神ファンなんだよ、紗江子は」

面倒くさくなつた俺は斎藤の言葉尻を捉えただけの返事がかえす。やれやれ、早くもばれてしまったか。そうは思いつつも、多くの人々が入りする役所で顔の売れた者同士の恋愛がいつまでも隠し通せるものでもなかっただろう。

「あつ、サエコつていうんだ。中尾ちゃん」

「おいおい、お前はファーストネームも知らずに狙っていたとかいうのかよ。呆れる半面、若者のこういった屈託のなさが羨ましくも思える。」

「女房とは十一月に離婚した。俺も紗江子も独身だ。自由恋愛に何の文句がある」

「それにしてもっす……」

依然続く斎藤の追及を業務開始のチャイムが遮る。「続きはまたな。始まるぞ」そう言つて席を立つた俺は自動扉を抜け、役所のオフィスに入る。朝礼を終えた職員が席に着き始めていた。

「話は終わつてないっすよ」

ガラスドアの向こうで斎藤が声を張り上げていた。

## 六

役所の入ったビルの東端に位置する窓口で閲覧の申請を済ませ、紗江子の居る隣のオフィスへと向かう。軽やかな足取りがスキップになりかけて足をとめた。彼女のことは言えない。

以前の紗江子は全くと言っていいほど笑顔を見せない女性だった。他の職員がくだらない（笑い声の品のなさにそう判断した）話題に声を上げてはしゃいでいても、彼女だけは周囲と切り離れた空間に居るかのようによろしくデスクに落としたまま、積み上げられた書類と格闘していた。

美人だが面白味に欠ける。こうなる以前の彼女にはそんな印象しかもってなかった。

それがこの数日「同僚や出入り業者らの下手なジョークもおかしく聞こえて微笑んでしまう。幸せだからかな？ ジュンのことを誰かに話したくて仕方がないの」と俺に許可を求めてきていた。

「独身の俺達なんだし、ことさら秘密主義を貫く必要はないだろうな。でも、好んで噂好きな連中の肴さかなになることもない。普段通りで居よう」

「そっか、そうよね」

そう諭した俺がまさかスキップを踏んで彼女の前に現れる訳には行かない。もう一度、両足が地についているのを確認する。

口の軽そうな斎藤やデートの目撃者であった職員がどれだけ俺達のことを吹聴ふいしやうしていたかは分からない。しかし新年の業務が始まってまだ幾日も経っていないこの時期だ。そうそう噂が広まっていることもないだろうと、高たかをくくっていた。

さりげなく紗江子の前を通り小声で「おはよう、昼にメールする」と囁ささやく。目だけで笑って軽く頷く彼女に、隣に座った女性職員が「ヒゲ王子様の登場ね」と囁くのが聞こえた。小声で紗江子が返す。「やめてっば」

(やめてっつてばー)俺も心の中でそう叫んだ。誰が、そんなこっ  
ぱずかしいネーミングを考えつくのだ。思わず赤面してしまいそう  
な気配を無理やり眉根を寄せて堪える。心なしか多くの職員が薄ら  
笑いをこちらに向けているようにも見えた。マズイ さっさとル  
ーティンを済ませてここを出よう。俺は足早に次の窓口へと向かっ  
た。

「こちらでよろしかったでしょうか」

女性職員の間違った日本語に曖昧に頷いてファイルを受け取る。

その時、斎藤が追いついてきてデカイ声を上げる。

「あ、ジュンさん。まだ、居たんすか。そつかあ、最愛の人と同  
じ空気を長く吸っていたいもんなあ。わかるわかる」

何にも分かつちやいねえよ、お前は。振り向いて睨みつける。い  
つも通りの手順で、いつも通りの時間しか費やしていないのに、ま  
だもクソもあるものか。

「あ、スルーするんすか。サエコちゃん、王子様ったら冷たい  
んだよー」

無言を貫く俺に斎藤のテンションは更に上がったようだ。既にど  
こからか？王子様？の呼称まで仕入れてきている。視線をずらした  
先の紗江子は、遠目にも耳を真つ赤に染めて俯いていた。ぶん殴つ  
てやるうかと思っただが、相手にしては、さらに時間を費やすこ  
とになり、去る機会すら失いかねない。ざっと目を通し、報告すべ  
き案件のないことを確認して、ファイルを返却した。

更新された書類を受け取った俺は「お疲れ、お先に」と言っ  
て斎藤の肉付きのよい背中に張り手をひとつくれてやった。

「いたいっすよ」

彼の苦情は背中では聞き流す。

外から眺めるガラス張りのオフィスでは、カウンターにもたれか  
かった斎藤が、俯いたままの紗江子に何か話しかけているのが見え  
る。彼女が顔を上げて何事か答えていた。

小柄な彼が体を預けるにはそのカウンターは少々、高く、片足が

宙ぶらりんになっている様は、腹を立てた先ほどを忘れさせるくらいに愛嬌のあるものだった。

（メールじゃあまどろっこしいな。今夜にでもまた紗江子と逢って善後策を考えよう）困惑していたはずの俺だったが、彼女を誘い出す口実が見つかり嬉しくもあつたのは間違いない。

『ごめんなさい。女子会の約束を忘れてました。明日は必ず』  
普段着に着替え、紗江子のマンションへ向かおうとした俺の携帯が  
震え、彼女からのメール着信を知らせる。

「なんだよ、こんな間際になつて」

短い文面に目を走らせ不満を口にするが勿論、彼女には届かない。  
耳の遠くなつた、おふくろが台所から見当違いな返事をしてくるこ  
とが苛立ちを増幅させた。

「女子会つていつでも交際相手や旦那さん。それに職場での不満  
や愚痴のこぼし合いね。新しく買った洋服やアクセサリーのお披露  
目会だつたりもするみたい。井戸端会議みたいなものよ。それに全  
てが女性目線の意見なんて実生活には役立たないことばかり。だ  
から、あたしは行かないの」

若い紗江子が口にする？井戸端会議？という単語に違和感を覚え、  
苦笑した記憶がある。彼女は、こう言つて職場の付き合いを避けて  
きたはずだ。年頭の一回ぐらい付き合うつもりになつたのか。だつ  
たら今夜の約束をする前に思ひだしておいて欲しいものだ。

独りきりの夕食となり落胆する俺だつたが、どうせ近くの居酒屋  
が会場だろう。出掛ける前なら拾つて乗せていつてやれば少しくら  
いは話もできるんじゃないかと、考えた。

今朝の出来事が思いだされる。斎藤のせいで予定通りに行かなく  
なつた、職場における対応の軌道修正の必要がある。ついでに今夜  
のドタキャンに一言文句を言つてやろう。そう考えて携帯電話のメ  
ール画面を切り替え、彼女の番号を呼び出す。

物分かりのよい大人だつたり、聞き分けのない子供だつたりが交  
互に顔をのぞかせる。若い女性が四十歳にもなる俺にタメ口なのは、  
そのせいなのかも知れない。

『お留守番サービスに接続します。合図の……』

無機質な電子音声が電話のつながらないことを伝えてくる。なんだよ、女子会程度で電源まで切っちゃうことないだろうに。ことごとく当てが外れた俺はどうしても一言文句を言わないと気が済まなくなり、まだ部屋に居るであろうと何の根拠もなく決めつけ、紗江子のマンションに向かって車を走らせた。

大人げないな、俺も。でも、ひよつとしたら女子会は口実で他の男と逢ってるのかも知れない。恋人の過去には拘くだわらないが、現在には拘くだわってもよいはず。こじつけとしか思えないような理由だった。が少年の思考となっていたその時の俺には十分な説得力があった。

幹線道路から県道に入った辺りでタバコを吸うために少し窓を開ける。車内に流れ込んだ冷気が俺を大人に引き戻した。

電話がつかないってことは、もう店に入ってテーブルに着いたのだらう。ああは言っても女性だけでのバカ騒ぎが楽しくなったのかも知れない。もしかすると俺に関する質問攻めにあつて『電話なさいよ』とか囁ささやかしたてられ、困こまって電源を切ったのかも知れない。うん、きつとそうだ。

そう思い直し、紗江子の住む建物が見える交差点で逆方向へと方向指示器をだした。目指すレストランはそこから数分の距離にある。未練みれんがましく目をやった紗江子の部屋の玄関に、帰宅する住人の車とのものと思いき人影をヘッドライトが映し出す。

なんだ、まだ居るんじゃないか。再び少年に戻ってしまった俺は、後続車のクラクションを無視して強引な車線変更で進路を変える。

ん？ 紗江子じゃないな。遠目だが明らかに彼女のシルエットではないことが確認できた。

普段であれば空いた駐車スペースに車を乗り入れるのだが、人影が若い男のものであるように思え、二十メートルほど手前で車を停めた。

浮気か？ 俺の瞳に悲しみを増やすつもりか？ 一言の文句では済みそうもないぞ。傲慢しうまんな少年のままショートしてしまった俺の思考回路は次々と自分勝手な理屈あひを溢あふれだす。しかし、様子を伺うかがう

ちに、その人影の行動の不審さが気になり平静を取り戻した。

チャームをゲーム機のボタンみたいに押し続ける。乱暴にドアを叩く。そしてその合間に、おそらく紗江子の名前であろう、滑舌かっせつが悪く聞き取りにくいのが、大声で呼んでいるのが車内から観察する俺の耳にかすかに届いた。

尋常じゆんじやうではない。そう考えた俺は、車を降り、足早に人影に歩み寄った。長髪をオレンジに染めた若者のようだ。だらしなく腰骨辺りこしほねあたまで下げられたブカブカのジーンズと、この時期には不釣り合いな薄手の、いわゆるスカジャンというものを羽織はった後姿にそう判断した。

「どうかなさいましたか」

俺の問い掛けに若者は跳ね上がるように振り向いた。ポーチライトに浮かぶ顔は青白い。大きく見開いたまん丸な目と小さな口はどこか魚を思わせる。服装は若造りだが二十代後半ぐらいだろうか。痩せていて背はさほど高くない。

「おっさんには関係ねーよ」

精一杯の虚勢を《きよせい》張ってみせるが、この類の若者は群れをなしていないと不安で仕方がないらしい。声が震えていた。

「いや、関係なくはないんですよ。私はここの管理をしている不動産会社のものでありますが、先ほど大きな声で騒いでる人が居て困っているいと連絡がありますね。中尾さんに御用なんですか？お留守みたいですよ」

スラスラと嘘が口をついて出る。本来の俺はこんな丁寧な若者を扱わない。

「居留守を使っただよ。俺は部屋に入るところを見てたんだから」  
「例え、そうであったとしてもお返事がないという事は、あなたに逢いたくないといった意志表示ではないでしょうか。お引き取り願えませんか。これ以上、騒がれるなら警察に通報せねばなりません」

使い慣れない丁寧語に語尾が大奥みたいになってしまったが興奮

状態の若者は気づかなかつたようだ。矢継ぎ早《》ばやに言葉を重ねて誤魔化す。

「ここは女性専用マンションでして、二親等までの男性しか入室出来ないんです。見た所、あなたはお父様にも見えませんし…もしかしてお兄様ですか？」

若者は何か言おうとして口を開きかけたが、思い直したのかそのまま口をつぐむ。そして、それを数回繰り返す。酸素を求める魚のような所作だった。海へ帰れ。心の中で呟く。

ようやく言葉を探し当てたのか乱暴な口調で魚男は言った。

「わあつたよ、帰ればいいんだろ帰れば」

「さえこー、またくるからな。家はわかつたんだ、逃げられねぞ」

ドア越しに、捨て台詞を吐き、無遠慮に駐車した蛍光ピンクのセダンに向かう。若者が乗ってきた車なのだろう。排気音も騒々《》そうぞう《》しい。窓は前面以外、全て真っ黒のフィルムが貼られているた。

そんなんで見えるのか？ 方向転換してて側溝に落ちたって助けてやんねえぞ。

暗い駐車場で何度もハンドルを切り返す悪趣味なカラーリングを施された車体に目を向けたまま胸の前で腕組みをする。

上手く不動産屋を演じきつたな、俺の演技力もなかなかのものだ。相手を崩す俺が、ようやく自分の身なりに気づく。革ジャンにツギの当たったジーンズ姿であった。しかも顔の三分の一をヒゲが覆う。そんな不動産屋は絶対…とは言わないが多くはあるまい。

若者の観察眼のなさに助けられたか。ホツとする半面、己が思慮の足りなさに溜息が漏れる。

タイヤのスキール音を響かせ走り去った車を見送る背後で、紗江子の部屋のドアが開いた。

「ジユン？」

「うん、俺。賑にぎやかな彼は帰ったみたいだよ」

若者が走り去った方向を指差して答える。

ドアチェーンを外し、三十センチ程度開けただけのドアから顔を覗のぞかせ、周囲を不安げに見回す。紗江子は、まだ役所の制服を着ただった。

若者の突然の来訪に驚き、成すすべもなく部屋に閉じこもっていたのだろう。

あの魚男が紗江子とどんな関係にあるのかは分からないが、俺が来なければまだ居座っていただろうし、根こん負けした彼女が部屋のドアを開けていたかも知れない。俺の中の少年もたまには役に立つものだ。

「女子会は？」

既に口実であることは分かっていたが訊ねてみる。

「ごめんなさい」

答えにはなっていない。

「食事はまだなんだろう？ 付き合えよ。待つてるから着替えておいで」

そう彼女に告げ、返事を待たずに車に向かう。

「……うん」夜の静けさの中でしか聞き取れないほどの小さな声が俺に届いた。

エンジンをかけ再び考えを巡めぐらす。一人っ子だと聞いていたから兄弟であるはずはないな。若者と紗江子との相似は色の白い点ぐらいしか見当たらなかった。

借金取りや悪徳商法なら一人では来ないだろうし、やはり元カレなんだろうか？ しかし、今は問とい質たすべきではない。彼女が話す気になるのを待とう。

大人の俺が戻っていた。

ほどなくして紗江子が駆け出してくる。夜目にも彼女の吐く息が白い。

ほぼ同時に開いた隣のドアから顔を出した女性が、紗江子に何やら声をかけた様子だったが、離れた場所にいる俺にその内容までは聞こえない。足を停めた彼女が振り返って一言一言かえし、体を二つに折る。謝っているように見えた。魚男が起こした騒動へのクレームだったのだろうか。

助手席に乗り込んだ早恵子はグレイのジャンパースカート姿で、革のジャケットを抱えていた。俺が着込んだ革ジャンとよく似ていた。

「ごめんなさい。でも、ありがとっ」

先ほどよりは、しつかりとした口調だが、それきりまた黙り込む。深刻にしない方がいいな。そう思って軽口を叩いてみる。

「いやあ、白馬の野郎はくばのやろう、ヘソを曲げやがってさあ。少し、王子様の到着が遅れちゃったぜ。だけど間に合ったみたいでなによりだ」

「ごめんなさい」

空振りだった。

レストランまでの短い道で多くの情報は引き出せまい。人目のある店内も同様だ。マンションに彼女を送った後も俺を部屋にあげようとはしないだろう。何より女性専用マンションなのだし、住人もほぼ戻ってきているようだった。

一言、文句をいうつもりだっただけの今夜が予期せぬ展開となり、俺の脳味噌は、その対応にフル回転を迫られていた。

食事中も努めて他の話題を探すこととなる。

「別れた女房の実家から戻った娘達が、ご馳走になったすき焼きの話をしててさ。それで牛鍋の美味かったここを思い出したんだ。帰省してない君にも食べさせてあげようと思って誘ってみた。どうだい？」

「うん、美味しいわ」

「今朝の斎藤は何を話していたのかな」

「あなたの年齢、奥さんがいたこと、九年間付き合った女性がいたこと。あのヒゲは鉛筆で書いてるんだとも言ってたわ」

ほんの少し、彼女が微笑む。

「あの野郎、今度逢ったらただじゃおかない。で、君はどう答えたい？」

「ご親切にありがとうございます。でも、ジュンのことならあなたの方がよく知ってますから。あの人、大きな口を開けて固まってる。吹き出しがついていたら？アングリ？って書かれていたでしょうね」

俺は大笑いした。隣のテーブルのカップルが迷惑そうな視線を向けてきたので睨み返す。紗江子が、目線で俺を窺<sup>たじな</sup>めた。

「で、どうする？ ずいぶん知れ渡っちゃってるみたいだけど。」

ジュンの奥さんの耳に入るのも時間の問題みたいよ」

「元だ、元奥さん。そうならそうなら仕方ないさ。おかしなもので別れてからの方が彼女との関係も上手くいってる。君が憎悪の標的になることもないだろうさ。そうさな……時に委<sup>ゆた</sup>ねよう」

「？」  
紗江子が首を傾げる。映画のセリフの引用<sup>しんよう</sup>が通用するのは元カノだった。しまった、と思ったが、咄<sup>はな</sup>嗟に「デイケンスの小説になかったつけ？ そのセリフ」と誤魔化す。「知らない」嘘なんだから知っているはずがない。

その後も、マンションでの騒動には触れないよう注意しながらの不自然な会話が進む。

「そのジャケット、俺の革ジャンとよく似てるな」

「似てるんじゃない全く同じものよ。S社でしょう？ いつかあなたがバイクに乗ってきた時に着ていたのを見て探したの。でも、あんなに高いとは思ってなかったわ。お陰で……」

「お陰で？」

「ううん、何でもない」

寝坊した時のことだな。朝一番でないと混みあう役所だった。そこで手間取ると、出社も遅れ、上司の嫌味を聞かされることになる。渋滞につかまっていたら間に合わないと思い、しばらく跨またがってなかったファットボーイ（ハーレー）を引きずりだした時のことか……二年ほど前の記憶だった。

積極的に話題を提供してくる訳ではないが、俺の語りかけにはちゃんと答えてくれる。歯切れの悪い部分も幾つかはあったが、あの騒ぎの後だ。百パーセント会話に集中できるはずもない。

それでも雰囲気悪くすまいと、無理に笑顔をつくらうとして何度となく唇の端を持ち上げようとする。そんな仕草しぐさが却かえって痛々しくも感じられた。

騒動の原因を俺に話すべきかどうかの逡巡しゆんじゆんも感じ取れたし、またあの魚男が来たらどうしようかと、不安にもなっていただろう。なんとかしてあげられないものかと思ひ悩む俺の頭に、妙案みょうあんがフワリと舞い降りる。

「そうだった！」

「どうしたの？」

「今夜は俺の家においで。娘達はスキーツアーに出掛けていて明日まで帰って来ないんだ。あの魚男がまた来ないとも限らないだろう？」

「魚男？」

俺が若者につけたニックネームの説明はまだだったので慌てて付け加える。「似てるかも」彼女はクスクスと笑った。

一瞬、紗江子の瞳に光が射さしたかのように見えたが、また目を伏せる。

「でも、ジュンにそんな迷惑はかけられないわ。嬉しいけど」

「迷惑なんかじゃないさ。君を独りにしておくより、どれだけ安心できるか。ただし泊めてあげられるのはハナレである俺の部屋だ。中年男の加齢臭かれいしゆうがたつぷり沁み付いたベッドだぞ」

俺の提案がその場しのぎのでないことを理解したのか、紗江子の

表情に明るさが戻った。

「ジユンの香りはとっても安心できるの。多分、一日か二日で問題は解決すると思う。甘えちゃっていいかな」

「当ホテルの料金システムを予め説明させていただきます。お代金はキスにてお支払いただくことになっておりますがよろしいでしょうか？」

「バカ」

間違いない、いつもの紗江子に戻ったようだ。

「そうときまればマンションに戻って支度しなきゃな。日用品は買い置きもあるし、俺んちから歩いて数分のところにコンビニもある。荷物は着替えと化粧道具ぐらいの最小限にしておくといい。あ、車は大丈夫か？ あいつに悪戯いたずらされてもいけない。乗ってきて、うちのガレージに入れるといい。女房のが置いてあったスペースは空いてるから」

早口でそう言って、勘定書きかんじょうがを掴む。

「まだ、食べてるんですけどー」

不服そうな言葉とは裏腹うらはら、紗江子の顔はとても晴れやかだった。

## 九

小旅行にでも使えそうなポストンバッグを抱え、紗江子が車に戻ってくる。

「じゃあ、これをお願い。ジュンの家は初めてだからゆっくり走ってね」

「善の歩みのスピードで」

「ガンジーね」

読書家同士の会話は第三者には分かりにくいこと、この上ないだろう。

彼女が運転する軽自動車のヘッドライトを意識しながら車を走らせる。はぐれないよう、信号の少ない道のりを選んだ。魚男から、或いは見知らぬ番号からの着信がなかったことを確認して携帯電話の電源を戻しておくように伝えておいた。

「電話までは知られてないみたいだな」

「うん、そうみたい。さっきは出られなくてごめんなさい」

特に問題もなく俺の家にとどり着く。娘達の居ない母屋は、当然のごとく灯りも点いておらず暗い。そこを挟んで俺の部屋と対峙する、おふくろが寝室にしているハナレも静まりかえっていた。今年八十一歳になる母は鶏のように早寝で早起きだ。

「部屋を先に案内しようか」

「そうね。荷物もとききたいし、お願いします。」

彼女の先に立ってハナレに案内する。電灯のスイッチを手探りで探し灯りを点け、カーテンで仕切った六畳間が縦に二つ並ぶ程の部屋に紗江子を招き入れた。

「元々、倉庫として使っていたところに手を加えただけだから、断熱はしっかりしてないんだ。オイルヒーターがタイマーで勝手に入切するから冷え切ってはいないけど、眠りに就くまではエアコンも使った方がいい。今のうちに部屋を暖めておこう。テレビのリモ

コンはそこ。冷蔵庫の中のもの好きに飲んでいいよ。ミネラルウォーターが入ってるから、お湯が欲しければこの電気ケトルを使って。使い方はわかるかい？」

「多分」

「持ってきた洋服はここに掛けるといい」

パイプハンガーにかかった洋服を両手で無造作に掴んでカーテンの向こうに放り投げる。居住スペースは手前の半分。カーテンの向こうは、タンスや夜具入れが林の如く立ち並んでいる。

「乱暴ね。皺になるわよ」

彼女が咎めるように言った。

「普段着ばかりだから構いやしないさ。ほら、ここも空けておくとよ、この籠はランドリーボックスに使えると思う」

スチール製のメッシュ棚に乗せられたニットやジーンズをまとめて抱え、同じくカーテンの向こうに放り投げた。

「男の人の部屋って感じがするなあ。あ、ギター弾けるの？」

部屋の隅に置かれたギターやアンプを指さす。弾けないものを置いておくはずはないのだが、弾けると答えると大抵の場合「弾いてみせて」と、せがまれる。ラブソングの弾き語りで女性は口説けないと知っていたし、今さらその必要もない。「ああ、それは調度品だよ。俺がここで暮らし始める前から置いてあったんだ」と、穴だらけの言い訳で言及を逃れる。

真新しい毛布とシーツを夜具入れから出してベッドに置く。さすがに、オヤジ臭漂うベッドには寝かせられない。

「上げ膳据え膳ね」

読書家の女性は語り口が年寄りくさい。

「ここに女性を招き入れること自体、初めてでね。別れた妻でさえ勝手に出入りはさせなかった。君が夜を過ごすのにどんな準備をすればいいのかわからないから、とりあえず思いつくままに、やっている」

「そうなんだ。光栄です」そう言って、紗江子は深々と頭を下げ

た。長い髪が揺れ、小さな風を巻き起こす。

「トイレはそこ。風呂は母屋にしかないから後で案内するよ。…ふう、温泉旅館の仲居さんか何かになった気分だな。お客様、他にご用はございませんか？」

「あるわ。チップよ」

そう言つて、紗江子が抱きついてきた。グレープフルーツにナイフを入れた瞬間のような香りが鼻腔をくすぐる。確かパシャとかいう香水だった。

「ねえ」

彼女が耳元で囁く。

「なんだい？」

「あたしが職場で見るジュンは、いつも大股で脇目も振らずに歩いていて、殆ど笑顔も見せないし、無駄口もきかない。他人を寄せ付けない雰囲気っていうのかしら。でもここにいるあなたは、あたしなんかのために甲斐甲斐しく動き回ってくれている。どっちが本当のあなたなの？」

笑わない、面白味がないは、お互い様だったのかと気づいて苦笑した。

ついでに言つておくと、俺は、女性が？あたしなんか？と言うのが嫌いだ。謙遜であることは理解しているのだが、その？なんか？を大切に思う俺の気持ちはどうなるのだ。そう、考えてしまうからだ。しかし、抱擁の最中にそんな御託を並べるのも興醒めなので、口にはしないでおく。

「どっちも俺には違いないけど、後学のために君の好みを聞いておこうか。どっちがいい？」

「どっちも好き」

じゃあ聞くなよ。俺は嘔き出した。

「何なら永久に住みついてもいいんだぜ。下宿代はキスで」

「一回のキスを幾らで計算してくれるの？唇が腫れちゃうわよ」

「いや」

そう簡単には腫れないと反論しようとしたが、その根拠が他の女性との記憶だったことを思い出し、続きを呑み込んだ。彼女の細い首筋に唇を這わせようとすると、紗江子が体を離す。

「お風呂に入ってからね」

汗をかくような季節でもないのに、こういうところに女性は神経質である。

「じゃあ母屋へ行こう。パジャマは持ってきたかい？ 娘のを貸してあげられるといいんだけど、年頃の彼女達のタンスを開きでもした日には一週間は口をきいてもらえなくなるからな」

「大変ね。大丈夫、ちゃんとここに」

ポストンバックを指差す。機嫌を損ねた娘達に困惑して狼狽する俺を想像したのか、紗江子の顔に同情は見られず、寧ろ楽しんであった。

「お先にいただきました。いいお湯だったわ」

風呂上がりの紗江子が、パジャマ代わりのスエット姿で、居間で寛ぐ俺の隣に座る。化粧を落とした彼女の素顔は、とても二十六歳とは思えないほど幼く見える。長い髪はまだ乾ききってない。しきりとタオルで挟んでは、ぱたぱたと叩くようにしている。

「ビールでも飲むかい？」

「あたし、お酒は一滴も飲めないの。父親がそうだったみたい。遺伝なのかな？ 母は浴びるって表現が相応しいほどの酒豪なんだけど……でも、何事も程々《ほどほど》がいいのよね。」

何かを思い浮かべるような表情で語る。彼女の重い口を開かせるため、酒の力でも借りようかとの企みは早くも頓挫する。まあ、いい。そのうち話してくれるだろう。あんな事があつた後だ、今夜は早く休ませてあげよう。

「部屋も暖まった頃だろう。ゆっくりお休み」「……うん」そう答えはしたものの、腰を上げる気配がない。こちらに眼を向けたかと思うと、次の瞬間には焦点の合わない視線を壁や照明におくる。

再び俺と目が合った時、紗江子は不意に言葉を発した。

「従兄なの」

「え？」

「魚男、加藤祐二さん。母の妹、叔母の息子なの。あたしの三つ上だから今は二十九歳になつてはるはずね」

「へえ、従兄だと分かつて逢つてあげなかつたのかい？」

紗江子は何か考え込むように膝においた自分の手に視線を落とす。そのままだった。そして顔を上げると、意を決したかのように俺の目を見据えて言った。

「今夜の事を説明するには、あたしの子供時代の話から始めないといけない。長くなるわ。大丈夫？」

翌日は土曜で、二人共、仕事は休みだった。時間の心配はなかったが、彼女の真剣なまなざしに、俺は少したじろぐ。

「あんな事があつた後だし、疲れてるんじゃないか？何も今夜で必要はないよ。それに君が話したくない事なら無理に話さないでいい。格好をつけるつもりはないけど、過去には拘らない。俺にとつて大切なのは今の君であり、未来の君なんだから」

「ううん、あなたが救いの手を差し伸べてくれたあたしが、どんな人間なのかを知つておいて欲しいから話すの。全部、聞いてくれた上で、そんな女はここにおいておけない、と言われるなら帰ります。家族のこと、あたしがどんな過去を送つてきたかも、あなたに知られないままで一緒に居られるといい。そんな虫のいいことを考えていたけど、今夜みたいなことがあつては無理ね。嫌われてもいい、全部話します」

思い詰めた様子で語る彼女ではあつたが、俺とて不幸に追い込まれた女性は自慢ではないが（心底、そう思っている）少なくとも、「あなたを傷つけるプロフェッショナルね」などという、有難くない言葉を頂戴したことだつてあるのだ。

不倫、墮胎、女性の悲劇にまつわる二大キーワードなら想定内だ。話して楽になるなら聞いてあげよう。だいたいに於いて「さあ、聞いて、私の悲劇を」的ストーリーは、聞かされる側にとつて「はい、なるほどね」「レベルのものが多く、眠気を誘う。話の途中で欠伸をしたり居眠りをしてしまうなどの失態を犯さぬよう、冷蔵庫の栄養ドリンクを一本飲み干してから、紗江子の隣に座り直した。

彼女の告白は、冷淡で鳴らす、この俺から、この先数年分ともいえるほどの怒りや悲しみの感情、そして憐憫までもを吸い尽くしてしまう。そんなことになるなどは、これっぽっちも考えていなかったのである。

「例え、君が時効を待つ殺人犯だつたとしても嫌いにはならない。だから、安心して話すといい」

紗江子に膝掛けを渡し、彼女の部屋で見かけた小説の一節を口に

した。

「あの小説ね」

「そう、あの小説だ」

彼女にとって重い過去なのであろう。少しでも負担を軽く話せるようしてあげたい。そんな俺の気休めを合図に紗江子の告白は始まった。



「一人のお客さんも来ない日が増えていった。母が、なまじキレイだったのもいけなかったのね。そもそも客商売なんかできる人じやなかったのよ。自分のお金で飲まない人たちは、母の気を惹ひこうとしてたくさんのお金を落としてゆくから大事にする。だけど、一本のボトルが空になるまでちまちま通う。これは母の言葉よ。そんな商店街のご主人さん方や会社勤めの人達を大切にしなかったツケが回ってきたのね。その頃からアパートのガスや電気もしよつちゆう止められていて、暗くなるのが早い季節には、お店で宿題をしたこともあるわ。その時にそんな話を聞いたの。人を雇う余裕なんか勿論ない。だから、あたしが店に行つてグラスやお皿を洗つたりもしてた。でも、中学生の娘が店に居るのを良く思わないお客さんも居たみたい。或る時、母はあたしにもう来てはいけないうて言ったの」

「それで君は、どうしたんだい？」

「近くのコインランドリーに行ったわ。寒かったけど灯りはあったから。でも、学校で見知った顔に逢うこともあった。そんな時は誰のだか分からない洗濯物が回る機械の前に立って、それが終わるのを待つ間に勉強いせんをしている。そんなフリをしてた」

俺の涙腺なみせんの防波堤ぼうはていが決壊けっかいしそうな雰囲気となっていた。

「中二になつた時、母があたしにこう言ったの。『あんたも中学生になつたんだから家にお金を入れなさい』って。実の母が言うの？ あたしは耳を疑つたわ。お客さんに分からないようにしてお店を手伝うのじゃだめ？ って訊いた。そしたら母は『客も来ない店で手伝うことなんかあるもんか』って、凄げんまくい剣幕けんまくであたしを叱つたの。でも、十三や十四のあたしにお金を稼ぐ方法なんか分からない。あんな田舎なのよ。当時はファミレスもファストフードの店もなかったし、あたしは途方に暮れるしかなかった。母の傍そばに居るのが怖こわかつたから、部屋を出て、父とよく遊んだ公園に歩いていったの。」

淡々と話す紗江子だったが、既に俺の涙腺は決壊し大洪水を起こ

していた。大袈裟おおげさに語られる大人の悲劇は聞き慣れてもいたが、少女のそれはだめだ。鼻をかむふりをして涙を拭い続けたティシューでごみ箱は溢れかえっていた。

「幼い頃、父の膝の上で揺られたブランコに座って暗くなりかけた街をボンヤリと眺めてたの。その時、小さなバイクで新聞配達をするおじさんが目に入った。あれならあたしにも出来るかも知れない。そう思って、おじさんに声をかけたわ。夢中だった。夕刊はとってる家庭も少ないから無理だけど、朝刊なら最近止めてしまった配達員がいて困っている。新聞店を教えてあげるから聞いてみなさい。と、親切に連れていってくれた。自転車も借りられる。毎朝四時に来られるなら明日からでも来なさいって言われて、喜んで母に報告に帰った。既に、お店に出掛けてた母の居ないアパートは真っ暗だった」

「例えば集合住宅ならこう、一戸建てが立ち並ぶ場所ならこうと、配達の要領が身につき始めていたあたしは、六時少し前には帰ってこられるようになっていた。そんなあたしに、母がスナックのお客さんから、もう一つ新聞店の配達を請け負ったからと、押しつけてきた。断れるはずがない。できないなんて言ったら、また叱られる。学校から帰って宿題を済ませ、深夜に戻ってくる母と自分の食事を作って毎晩九時には布団に入る。そして三時に起きて二社の新聞配達を済ませて学校に行く。その頃には、もうパンも置かれていなかった。そんな生活が雨の日も雪の日も続くの。同級生の話すテレビドラマの話題や流行はやっている歌も全然分からなかった。とうてい高校進学なんか考えられない毎日だったわ。そして、中三になっていた元旦の朝だった。初詣はつもつでかえ帰りの叔母に、配達中の姿を見られてしまったの。欲しいものがあって、やっているんだ。そう答えたあたしの嘘を見抜いて、叔母は母にかけ合ってくれた。あたしを引き取って高校に行けるよう、手配してくれたの。その三年間も新聞配達は続けて母にお金を送るって条件で」

そこまで話し終えた紗江子の指は震えていた。

「叔母が嫁いでいた先は代々、市議員を務める。いわゆる名家だった。母に渡すお金も貸してあげるから新聞配達なんか止めなさい。働くようになったら、少しずつ返してくれればいいから。叔母にはそう言われたけど、あたしは止めなかった。母に対しての意地もあったわ。あの街の冬は氷点下になることもしょっちゅうで、手袋をしていても自転車で風を切る手は真っ赤になる。雪が積もった日は、籠も荷台も新聞でいっぱいになった自転車を押して歩くのよ。泣いたら負けだ、絶対に泣くもんかって思うほどに涙が溢れて止まらなかつたわ」

情けない話だが俺の涙も止まらなくなっていた。

「見て」そういつて、紗江子が右足を差し出す。小指の先に僅かな欠損があることを、以前愛し合った時、俺は気づいていた。しかし、そんなものは彼女の美貌や人間性を問うべき瑕疵にすらなり得ない。少し特徴がある歩き方はこれに起因していたのかと理解したが、それを会話に持ち出さない程度のデリカシーは俺にだってある。「凍傷よ。夏でもサンダルは履けない。あの時に気づいていたでしょう？ 何も言わないあなたの気遣いは嬉しかったけど、そういう理由があったの」

凝視した訳ではないが、紗江子がそつと足を引いて膝掛けを戻した。

「そして、高三の夏。少なくとも勉強のためにコインランドリーに行かなくてもよくなっていたあたしは、全ての教科に四・五以上がついていたの。その成績を知った叔母が、短大ぐらい出ておきなさい。あんたが家事を手伝ってくれて随分助かったのだから、それぐらいはさせてちょうだい。そう言ってくれた。一時は高校進学すら諦めていたあたしによ？ でも、そんなお金なんてある訳ない。曖昧に頷くだけのあたしに、叔母はこうも言ってくれたの。あんたが家事を手伝った時間をノートにつけていて、今日は何時間だからこれだけ。今日はこれだけ、とあたし名義の預金通帳を作って積立をしている。今はこんなになってるのよ。と優しく笑ってそれを手渡してくれた。私立は無理でも公立の短大だったら入学金と一年分の授業料ぐらいになりそうなほどの金額が記されていたわ。あたしがよろこんだかって？ ううん、茫然としてたわ。現実味なんか全然感じられなかった。想像すら及ばなかったその状況に、何が起きてるのか自分自身、理解出来てなかったんだもの。ミステリーが好きでよく読んでいたあたしは、叔母が本当の母親じゃないのかって思った。でも、悲しい事にあたしと母はそっくりなの」

紗江子の美貌は母親譲りだったのか。儂げな薄い唇は好みがかかるだろうが、切れ長の瞳と形の整った鼻は百人が見れば九十九人が美人だと答えるであろう容姿だった。

魚男の登場はまだだったが、彼女の辛い日々シリーズが終わりそうな気配に俺は安堵した。延々《えんえん》と続く彼女の不幸物語に俺の体内水分が枯渇しかけていたからだ。少しでも余裕の戻った俺は涙声にならないよう注意して、紗江子に訊ねる。

「魚男はその叔母さんちの息子なのかい？」

「ええ。いずれは父親の跡を継いで市会議員になる予定だったんでしようね。当時は東京の大学に通っていたそうよ。父が居た頃に何度か一緒に遊んだ記憶もあったわ。でも、自分の思い通りにならないとすぐに癪癪を起す彼が、あたしは苦手だった」

帝王学というものは庶民の生活を学ぶところからスタートさせるべきだと俺は信じている。一般サラリーマンとは比べ物にならない額の報酬を受け取るセンセイの方が、大事な後継者に惨めな生活はさせたくはないのであるが、そういった間違いが繰り返されることによつて、修復のきかないほど、この国の行政は歪んでしまっている。しかし、俺の見た魚男の風体と市会議員に抱くイメージには大きな隔たりがあった。先の読めない物語の展開は、彼の挫折ストーリーへ続くのだろうか。

「そつか、苦労したんだな。でも、良かったじゃないか。偶然とはいえ叔母さんに逢えた元旦が君の転機になつたんだろう？」

佳境も過ぎ、地元へ戻ってきた魚男が紗江子に惚れる話にでも繋がるのだろうか。俺は早計にも、まとめにかかつてしまった。少なくとも車も持つており、デートでは毎回違つた品の良さそうな洋服を身に着けていた彼女なのだ。貧困による悲劇は去つた。足の指は可哀想だが、俺はそんなもの気にもしない。たいした告白でもなかったな。散々、涙を垂れ流した俺は、照れ隠しに、そう自分に嘔いてみせる。今の懸念は、魚男だけなのだろうと早合点してしまつた俺を誰が責められよう。

顔を上げた彼女の眼の周りがみるみる赤く染まつて行く。

「まだ、終わつてない」

It's not finished.

いつか見た悲しい映画のセリフを思い出した。

「あれは八月も幾日か残すだけの夜だったわ。山間の街だったから夏でも夜は涼しくて、あたしはアラームが鳴るまでいつもぐっすりと眠れた。父が去った時のことや母の怒りの表情を夢見ることもなくね。でも、その日は何だか息苦しくって、目覚めたの……いいえ、まだ完全には目覚めてなかったのかも知れない。」

俺は嫌な予感がした。

「胸が圧迫されているような気がした。夢なのかなってボンヤリと思っていたけど、少しづつ、はつきりしてゆく意識の中で、妙な感触に気づいたの。市議員のあの人……加藤高祐、叔母の御主人よ。その人があたしにのしかかっていた。パジャマは殆ど脱がされていて裸同然だったわ。そして、あの人の指や唇があたしの体の上を這いまわっていたの」

こういった場合、嫌な予感は大抵、当たってしまう。俺は頭を抱えなくなった。

「勿論、抵抗したわ。いや、やめてくださいって。でも、あの人は『いいから』って言って、止めようとはしなかった。何が起きてるのか、ようやく理解出来た。食べてゆくだけに必死でボーイフレンドを作る時間すらなかったあたしだけど、保健の授業や友人との会話でセックスの事は知っていたもの」

紗江子の声に嗚咽が混じりだす。

「大声を出せば叔母に気づいてもらえたかも知れないけど、できなかった。怯えていたからだと思いたい。でも、違うの。騒ぎになれば母の元に帰される。短大進学之梦も消えてしまう。打算だったのよ。あたしを高校に行かせてくれた優しい叔母を傷つけることにもなると思っただわ。あたしは力を抜いた。少しだけ我慢すればいいんだ。もう、どうにでもなれと思った。そして……奪われたの」

嗚咽が慟哭に変わる。

「もういい、話さなくっていい」

俺は強くなりすぎないように彼女を抱きしめた。紗江子の瞳からこぼれ落ちる大粒の涙が、みるみるうちに俺の袖に染みを作った。  
く。

「お願い、続けさせて」

そう言う紗江子だったが、泣きじゃくるばかりで、なかなか声にはならない。落ち着くまでこうしているから。抱きしめた手で彼女の背中を撫でる。告白が再開された。

「あの人が部屋を出てつてからも、お腹の中に何か重い塊が入つてる気がして暫くは動けなかった。やっと体を起してパジャマを着た時に涙が溢れ出したの。キスすら知らなかったあたしの初体験が、なんでこんな惨めでなければいけないんだらう。そう思うと、悔しくて悲しくて涙が止まらなかった」

俺はレイプというものに異常ほどの嫌悪感を抱く。セックスは本来、愛情の交換であるべきだと信じ標榜していたからだ。演説や公約に耳ざわりがいいだけの言葉しか用いることのない奴らの正体はこれか。政治家？ いや、それを稼業にしている時点で奴等は政治屋でしかない。怒りが殺意に変わってゆくのを感じていた。

「あの人は三日おきにあたしの部屋に忍んできたわ。キスもされた。ナメクジみたいな舌の感触と、あの人のかけていた眼鏡のフレームが冷たく触れるのがすごく気持ち悪かった。目を閉じて早く終われ、早く終われって、祈り続けた。夜が怖くって眠れない日が続いた。叔母にも話せないんだから誰も頼る人なんて居ない。学校の授業も耳に入らない。食欲もおきない。それでも新聞配達は続けた。当然のように、あたしは倒れた。体育祭の日だった。運ばれた医務室で若い保険医さんに、あれこれ聞かれた。何か悩みがあるんじゃないのか。ちゃんと食事はとっているのかつて。本当のことなんて言える訳ない。隣の生徒が妊娠して胎児を遺棄した事件が新聞に載っていた時期だったし、それを心配していたのかも知れないわね。だから、生理のせいだって嘘をついたの。それでやっと解放しても

らえた」

そこでいったん大きく息を吐いて、彼女は再び話しだす。

「その後も、保険医さんは昼休みとか放課後に何度もあたしの様子を見に来てくれた。体の心配だけじゃなく、色んな話をしてくれた。この小説が面白いとか、自分の家族の話しとかをね。あたしも、この人なら分かってくれるかも知れない。助けてもらえるかも知れないと思うようになっていた。だから、相談してみたの。そうしたら……」

「そうしたら？」

俺は言葉を引き継ぐ。

「保険医さんは母に話したのよ」

俺は心の中で「あっちゃー」と叫んでいた。若い情熱は空回りしがちで、時に悲劇さえ引き起こす。誰かを助けられる、力になってあげられると思うのは殆どの場合、勘違いでしかないのだ。

「母がとつた行動は……想像つくわよね？ 叔母の家におしかけたの。『市議員でもあろう人間が姪をレイプするとは何事だ。訴える』って。叔母の家の広間で、あたしと母、叔母とあの人が向かい合つて座っていた。母から話を聞かされた叔母は最初、茫然としてたけど、正気を取り戻すと、あたしに何度も謝ってくれた。ごめんね、ごめんねって。母は『訴えられたくなければ慰謝料を払え。何度、頭を下げたって娘は元には戻らない』って言ったわ。

あたしは不思議に思っていた。訴えるって話はどこへ消えたのだろう。確かに、謝ってもらっても訴えても、あたしの体が元に戻る訳じゃない。でも、何でお金の話になつてしまうんだろうって。居たたまれない雰囲気、ひよつとしたら悪いことをしたのはあたしなのかなって、何故だか思ったりもした。母と叔母が話してる間、あの人はただ座ってるだけ。一言も話さず、無表情に雪見障子ゆきみしょうじ越しに庭を眺めていた。叔母の、弁護士を行かせるからって言葉に母はやつと納得して帰っていった。あたしをそこに残したままで」

そんな表現がこの場に相応しいかどうかは分からないが、この時

の俺は正に啞然<sup>あぜん</sup>としていた。実の母親の振る舞いが信じられなかったのだ。

「二日後よ。あの人はその広間の鴨居で首を吊って自殺した」  
俺が抱いた殺意は、この時点で宙ぶらりんとなる。

「叔母から幾らかのお金はせしめてたんでしょね。あの人も死んじやつたし、母は訴えなかった。あんたの将来のためだつて言つてた。でも、口の軽い母は酔つた拍子<sup>ひょうし</sup>にスナックのお客さんに喋つてしまったの。小さな街よ。市議員の自殺の原因が女子高生との関係にあつたなんて醜聞<sup>しゆうぶん</sup>は、あつという前に街中に広がる。学校に、叔母の家に、母の店にとマスコミが押し寄せたわ。そして担任や友人があたしを腫<sup>は</sup>れものに触るかのように扱うようになった。もう、この街には居られない。そう思った。あの人が叔母にどう話したのかは分からない。でも叔母は、悪いけど、もうここにはおいてあげられないつていった。保険医さんは、あの人が自殺してすぐに街を出ていた。母の元には絶対に戻りたくなかつたわ。あの人が進学なんかさせてくれるはずない。でも、それを諦めたくないから、あんな目にあつても我慢したのよ。散々《さんざん》、迷つた末に、あたしは保険医さんから渡されていた電話番号にかけたの」

俺はマスコミも嫌いだ。彼等は報道の自由とか知る権利とかを振りかざして、被害者やその家族を思い遣<sup>おも</sup>り遣<sup>や</sup>る気持ちなど欠片<sup>かけら</sup>も持ち合わせていない。彼等の正義感は、あくまで火の及ばない彼岸<sup>ひがん</sup>でのみ成立しているのだ。

「どこだつたんだい？ それは」

「児童相談所」

「え？」

「児童相談所よ。母の事から叔母の家であつた出来事まで全て話したわ。父も探してくれた。郷里<sup>きょうり</sup>に戻つて新しい家庭を築<sup>きず</sup>いていた父は、あたしの引き取りを拒否したそうだけどね。だから、卒業までそこで過ごしたの。新聞配達はできなくなつたけど、母は文句を言わなかつた。叔母は一体、幾ら渡したのかしらね」

紗江子は他人事のように言った。

「職員の人達はみんな優しくかった。でもね、普通の家庭に育った人達に、あたしの気持ち理解できるはずがないのよ。あたしが、ひねくれていたせいかも知れないけど、その親切も仕事だからだと思えて仕方なかった。だから、どうしても短大に進んで養護教諭になりたかった。あたしみたいな思いを、もう他に誰にもさせたくなかったの」

顔を上げた彼女が強い口調で言い放つ。この状況で抱く感情としては不適切なのかも知れないが、こうやって決意を語る時の彼女はいつも格好よくって見惚れてしまう。

「それでも、もう夜に怯える必要もない。三時に起きなくなつていいから、夜更かしして読みたい本もたくさん読める。誰にも邪魔されずに勉強だってできた。こんな場所があるんだと分かつてたら初めからここにこればよかった。そう思ったわ。同じ部屋になつた中学生の由美子ちゃんって子が居たの。一人っ子だつたあたしに妹ができたみたいですごく嬉しかった。それまで誰にも……親にも愛されたことのないあたしを慕<sup>した</sup>ってくれる彼女が可愛くて仕方なかった。」

誰にも愛されない。そんなふうに自分を悲劇の主人公におきたがる人々が多いが彼女の告白を聞いてなお、それを口に出来ただろうか。そう思えるほどの魂<sup>たましい</sup>の叫びだった。

「卒業を待つて、すぐにこの街に出てきたの。奨学生の資格もとれたからアルバイト漬<sup>つ</sup>けになることもなく、養護教諭の資格もとれた。でも、募集はなかった。県の職員になつておけば、そんな仕事に就くチャンスがあるかも知れないって言われてそうしたの。以来、ずっと今の職場よ。でも、そこで出逢つたあなたを見ていて気づいたの。どこに居たつて誰かの力になることはできるんだつて」

そこで彼女はいったん言葉を切る。時計は午前一時を回っていた。彼女の告白は二時間にも及んだことになる。女性の悲劇における二大キーワードの不倫も墮胎も登場せぬままに、それでもその告白は

俺の安易な想像を凌駕する壮絶なものだった。

「これがあたしの告白です。信じてくれなくてもいいけど、あたしが抱かれないって思って抱かれた人はジユン、あなただけよ。こんな汚れた女は嫌いになった？ 別れたいならそういつてね。悲しくなくはないけど、あたしは自殺なんかしないから」

？あたしは？つてのは、なんだよ、人聞きの悪い。俺は内心で抗議する。

「おめでとう。君は今、恋人と同時に父親とボディガードをゲットしました」

「え……それって」

顔を上げ、開きかけた紗江子の唇を俺の唇が塞ぐ。細くしなやかな腕で彼女は俺にしがみついていた

俺にだきすくめられたままで、紗江子の告白はエピソードに移ってゆく。生まれた街を後にした彼女の新しい生活についてのそれは、先ほどまでの悲壮感漂うものではなくなっており、時折ではあったが、笑顔も見せてくれるようになっていた。

「車？ ああ、あれね。あなたのことをヒゲ王子って呼んだ子がいたでしょう？ 彼女から一万円で譲ってもらったの」

「え？ そんなに安かったのか」

「でなきゃ、あたしが車なんか持てる訳ないじゃない。さっきのレストランで革ジャンの話題になった時のことを覚えてる？ あたし、ちゃんと返事できなかったでしょう。あれはね、あなたと揃いのジャケットがどうしても欲しくって八万円も使っちゃった。それで一年間、本をかうのを我慢した。そう言おうとしたの。貧乏も母の事も、何もかもあなたには隠しておきたかった。今年、最初に電話くれた時の話も嘘よ。？ 今年は何？ どころか、高校を卒業して以来、N市には一度も帰ってない。叔母には逢いたいと思うんだけど、魚君がね……」

ようやく、登場することになる今夜の、いや既に日付は変わっていたが、その主人公は魚男から魚君に昇格していた。

「そうそう、彼は君にどんな用があつて来たんだ？」

「あの人……、彼のお父様が自殺したのは、あたしがレ……あの事を学校で言いふらしたからだと思ってるみたい。謝罪文を書けて言われたわ。でも、何を書いたらいいの？ 確かに母の行った動は非常識だと思う。だけど、あたしだって被害者なのよ」

彼女の主張はもつともである。

「逆恨みも甚だしいな」

「でも、彼の気持も少しだけ分かる気がする。あんなことがなければ、きっと彼も議員秘書を経て、どうか 数年後にはセンセ

イと呼ばれる立場になれていたのかも知れないんだから」

「魚類をセンセイと呼ぶ連中は既に自らを餌だと認識している」

「誰の言葉？」

「俺が今、考えた」

「おつかしい」

紗江子がクスクスと笑った。彼女の長い髪もすっかり乾いており、艶やかな輝きに、目を奪われる。

「髪を伸ばし始めたのもこの三丁四年よ。シャンプーやトリートメントを買うお金が勿体なかった。だから短大を卒業するまではずっとショートカットだったの。節約と奨学生制度のおかげで、アルバイトして貯めたお金は随分残すことができたわね」

「俺もトリートメントは使わない」

「そんな短い髪じゃあ、要らないでしょうに」

「俺の自慢の猫っ毛ねこけをバカにするのか」

彼女は俺の抗議に取り合わず、話を続けた。

「洋服だってそうよ。今でも何万円って値札を見るとお金持ちの人が着るためもので、あたしなんか買うものじゃないって思ってる」

「でも、高そうなのを着てるじゃないか」

毎回のデートで彼女が身につける洋服には品があった。俺の言ったことが理解出来なかったのか、一瞬キョトンとした表情になったが、すぐに、にっこりして、こう答えた。

「福袋って知ってる？ 人気があるお店のものは開店前の明け方ぐらいから並ばないと買えないの。アラームさえかけておけば何時だろうと起きられるのが特技だったあたしは、同級生や……今は同僚ね。彼女達の代わりに並んであげるの。たいていは買うことができたわ。でも、福袋って中身が分からないじゃない。彼女達の気に入るものが入っているとは限らないの。既に持つてるものと同じのが入っていたりもするみたい。そういうのを並んでくれたお礼になって、くれるの。あたしのワードローブなんてそんなものばかりよ」

彼女は自嘲気味に笑ったが、そのもらい物ですら品が良く見えて

しまつのは、紗江子の恵まれた容姿のおかげに違いない。

「結婚しないで、お母さんの面倒を見るっていった話も嘘なのか？」

一度、視線を逸らし、暫く考えた様子だったが向き直って、こう言った。

「あれは本当。でも、恩返しじゃないの。言うなれば復讐ね。一片の愛情も注がなかった娘に老後の面倒をみてもらうってのはどんな気分なのかしら？ あたしはそこまでひねくれているの。告白ついでにもう一つ。掃除のおばさんや外国人来庁者に親切にするジュンの行為も、最初は偽善だと思っていた。誰かに対してのアピールなのではないのかとね。高価なアクセサリーや高級レストランの食事をちらつかせて、あたしを誘ってくる男の人も、多くはないけど居たわ。きつと世間知らずな小娘に見えたんでしょうね」

告白を聞く前の俺もそう思っていたのだから耳が痛い。

「それと同じだと思っていたの。でも、優しさの対象が限られ見え透いてもいた、あたしへの誘いと、あなたの行為は明らかに違っていた。それに気づいたときにはもう……あなたに惹かれていたわ」  
「買い被<sup>かぶ</sup>ってもらっちゃ困る。俺のあれは気まぐれにしか過ぎない。目に映る全ての困ってる人を助けていたら、俺自身の生活さえ失ってしまうのだから。そんな反論を、紗江子はバツサリと切って落<sup>お</sup>す。」

「多くの人は、その気まぐれさえ見せないものよ。さつきも言ったけど、福祉の仕事に就いてなくなつたつて人助けはできるんだつてことを、あたしは、あなたを見ていて知つたの」

ほんの最近、気づいたことがある。紗江子が語つた俺のお節介は、気まぐれでもなければ優しさでもない。傷つけてきた人々への罪悪感で押し潰<sup>つぶ</sup>されそうになつた俺の強迫観念<sup>きょうはくかんねん</sup>がさせているのだけなのだ。ずるい俺は、それを彼女に告げる勇氣もない。効きすぎた暖房と長時間の告白に喉も渴<sup>かわ</sup>いただろうと、冷蔵庫から冷たいお茶を運んで紗江子に渡し、風呂に入ると言つて、その場を逃げ出した。

「もう、こんな時間だ。それを飲んだらグラスはそのままでもいいから休みなさい」

「ありがとうございます、おやすみなさい」

台所（古い日本家屋である我が家のそれはキッチンと呼べるような代物ではない）から聞こえてくる笑い声で俺は目覚めた。時刻は八時少し前だった。母屋お母屋で眠るのが、ほぼ一年ぶりだった俺は、一瞬、自分がどこに居るのか分からなかったが、徐々《じょじょ》に記憶を取り戻していった。

昨夜、俺が風呂から出た時、既に紗江子はハナレに行った後だった。まだ眠っているんだろうか、だとしたら、あの声は誰なんだ？ 疑問は次々に湧きおこるが、寝起きで冴さえない頭がその答えを導みちびき出せるはずもない。回答を求めなるべく台所へ向かう扉いっしょを開いた。

「あら、起きたのね。おはようございます」

爽さわやかな笑顔と、透き通った声が俺に向けられる。紗江子は着替えを済ませていて、昨夜のスエット姿ではなかった。真っ白なタンクトップにオレンジのブラウスを羽織った彼女は、うっすらとだが化粧もしている。長い髪は見覚えのある装飾具で束ねられていた。

「おはよう、よく眠れたかい」

工夫くふうのみられない挨拶は、疑問が増えたせいだった。笑いながら話していた相手はどうやら俺のおふくろだったようなのだが、どうしたらそんな状況になるのがサツパリ分らない。昨日まで居なかった、若い娘が突然現れたのだ。驚いて俺を質問攻めにするとかなら分かるが、その娘と親おやしげに笑い合い、語り合っている様子が理解できない。どんな経緯いきさつがあったのだろうか？ ひよっとして俺が眠っている間に数日が過ぎていたのだろうか。首をかしげながら、とりあえず寝起きの一服のために裏庭へと出た。愛用のジツポーでタバコに火を点けると、紗江子が追いかけてきて小声で告げる。

「コンビニへ食材を買いにいった帰りに、庭のお花に水やりをしていらしたお母様と逢ったの」

そりゃあ、同じ敷地内で寝泊りしているのだから顔を合わすこと

もあるだろう。だが、どうしたらそんな短時間で旧知の仲みたいに振る舞えるんだ。

「で？」ひと文字で説明の続きを求める。

「あたしはあなたの会社の部下。新年会で酔いつぶれたところを介抱してもらい、ハナレで寝かせてもらったって伝えておいたわ。

お母様、何の疑いも持ってらっしゃらないみたいよ」

そう言うつと悪戯いたずらっぽく笑う。やはり、俺や娘が居ない時は電話に出るなと言っべきだな。そんなおふくろでは振込詐欺のいいカモになっってしまうことだろう。

台所からおふくろが紗江子を呼ぶ声が聞こえる。

「はい、今行きまーす」

じゃあ、そうゆうことで。彼女が踵を返す。そうゆうこともなにもおふくろに逢ってから今までの経緯けいゐの説明にはなってないぞ。しかし、トラブルになっているよりはマシか。俺は、そう考えることにした。こうゆうところは至って割り切りのよいのが俺の特徴でもある。

妻が去って以来、コンビニで買う調理パンとコーヒーだけで済ませていた俺の朝食だった。テーブルいっぱい料理の盛られた皿が所狭ところせましと並んでいる様は圧巻あつかんだった。耳が遠く、エピソード記憶に障害の出始めたおふくろは、俺や孫である娘達との会話も日毎ひごとに減っており、一緒のテーブルに着くことは少なくなっただが、今はにこにこしながら座っている。

「いい子ね。結婚するつもりかい」

紗江子が席を立った時、おふくろが小声で囁いた。危うく口に入れたものを嘔き出しそうになる。

「そんな訳ねえだろ。まだ、悦子（別れた妻の名前）と別れて二カ月にもなんねえんだぞ。それに、あの子は祥子（長女の名前）と幾つもかわらない。彼女がそんな話でもしたのか」

「そうじゃないけど、あの子なら私は賛成だよ」

気の早い思い込みには閉口へいこうしたが、久しぶりにおしゃべりの相手

を見つけたのが嬉しくてたまらない様子だ。俺の否定なんぞ聞いてはいない。悦子と結婚する前、おふくろにうまく取り入って、なしくずしに同居を決めこんだ女性が居たことを思い出した。あれには手を焼いた。以来、俺は家に女性を連れてくることを避けていたので、若い女性の来訪は十何年かぶりになるはずである。食事中も、俺に話すよりおふくろにかける言葉の方が多し紗江子に、おふくろが、はしゃいでしまうのも当然かも知れない。

「口に合わない？ 箸が進んでないみたいだけど」

席に戻った紗江子が言った。

「いや、美味しいよ。ただ、朝はあまりたくさん食べない習慣になっていたので胃が戸惑ってるんだ、きつと。それより、これ全部君が作ったのかい？」

ベーコンやチーズを挟んだオムレツやハッシュドポテト、グリーンサラダにヨーグルトにクワツサンと、ホテルの朝食並みの品揃えに圧倒されてもいた。

「よそ様の冷蔵庫を勝手に開ける訳には行かないでしょ？ コンビニで買ってきたのもあるけど、他はお母さまと一緒に作ったの。そうですよね？」

紗栄子は、おふくろに同意を求める。

「一緒についていても、あたしは冷蔵庫から玉子を出したりフライパンの場所を教えたりしただけですからね。紗江子さんは、それは手際も良くて、悦子さんとは大違いだね」

おふくろは別れた妻と折り合いがよくなった。

朝食が済み、片付けが終わってもおふくろは紗江子を解放しようとしなない。問い掛けに面倒くさそうに返事するだけの俺や娘達と違い、愛想がよく、笑顔で積極的に語りかけてくれる彼女は、ようやく砂漠でみつけたオアシスみたいに思えたのであろう。言葉は悪いが紗江子はおふくろの恰好の餌食となっていた。

彼女が答えづらい家族や故郷の話題に話が及ぶ前に連れ出してやらないと。そう思い、送るから、と紗江子に支度を促すポーズをと

る。紗栄子は俺の意図を敏感にくみ取り、お世話になりました、楽しかったです。と、まだ話し足りない様子のおふくろに頭を下げた。「厄介やっかいなおふくろでごめん」

すぐにマンションに送るつもりはなかった。それどころか、彼女の同意が得られるなら今夜も泊めるつもりだった。なにしろ、昨夜は愛し合って（肉体的に）いなかったのだから。逃げ出しておいて勝手な話だが、風呂上がり、空っぽになっていた居間に俺は大いに落胆していたのだ。

小さなバッグだけを持って紗江子が車に乗り込んできた。彼女もそのなのだなと、思い込んでいたのだが、隣に停められた軽自動車の後部座席にあったポストンバッグを目にして、俺は肩を落とす。

「いいえ、とても楽しかったわ。ジユンの奥さんになったみたいで」

楽しげに笑う。妻との離婚を思い出した。女性にとって妻の座は勝ち取ったものなのである。しかし、それを必死で守ろうとする言動を見聞きするに至り、男は途端に結婚を後悔し始める。

どこで何をしているかは分からずとも永遠を誓った女性も居る。

俺は紗江子を傷つけることなく結婚を肯定しない言葉を探していた。黙り込んだ俺の肩を彼女が軽く叩いて笑う。

「お嫁さんにしてって言った訳じゃないのよ。あたしは結婚しないって言ったでしょ？ だから、そんな顔しないで」

そんなか……どんな顔になっていたんだろう。ルームミラーに映る中年男の顔は両の眉尻が下がり、口はへの字に固く結ばれている。紗江子の失笑うしろ笑いを買うには十分な情けなさだった。

おふくろの詮索せんさくから逃れるために家を出ただけで、特に行く当てがあつた訳ではない。毎朝の習慣となつた墓参りを済ませ（昨年、逝つた父と、この世界に迎え入れてあげることの出来なかつた命への供養である）、映画にでも行くかと漫然まんぜんと考えながら車を走らせる。紗江子に行きたいところはないかと訊たずねた。

「あのね、一度行つてみたかつたところがあるの」

例のテーマパークだろうか。冬の朝で、動き出しも遅かつたため、二百キロ離れたそこへ今から向かうのは気が重い。水を被かぶるようなアトラクションもあつたはずだ。あそこなら、もう少し暖かくなつてからにしよう。そんな答えを用意してから彼女のリクエストを確かめる。

「どこなんだい？」

「バッテリーセンター」。短大時代に何度か通りかかったことがあつて、キーンって音で弾はじき返されるボールが、とつても気持ちよさそうに見えたの。友達の少ないあたしじゃあ誘える人もいながつたし、さすがに一人で行く勇氣は……」

気恥かしそうに語尾を濁す。テーマパークを予想していた俺は、やや拍子抜けではあつたが快諾かいだくする。六年越しの希望を叶えてあげよう。

「いいよ、連れてつてあげよう。但しただ、その靴じゃだめだ」

七、八センチ程度で、さほど高くもないヒールだったが、彼女の履はいたパンプスを指差ゆびさして言った。

「気温が上がらないと、手も痛い。スニーカーとバッテリーググローブを買いに行こう」

スポーツ用品店の入っていた近くのショッピングモールへのルートを脳裏に描く。

「そんな、本格的じゃなくつていいのよ。あたしにもあんな音が

出せばストレスの解消になるんじゃないかって思っただけなんだし。それに、お金だつてたくさん持つてきてないわ」

「バッティング未体験の君だぞ。そのか細い腕で振るバットがボールに当たる可能性は極めて低い。ストレス解消のはずが、その逆になつてしまう場合だつてある。いいから、任せておけつて。新しい父親からの遅めのお年玉だよ。でも、俺の指導は厳しいぞ」

納得した訳ではなさそうだった。俺の強引な申し出に、ささやかな抵抗を見せる。

「分かつた。お言葉に甘えます。でも、あたしの方が上手かつたりしてね」

バカを言つてもらつちや困る。実業団で名二塁手として鳴らした父に、一時期、プロ野球選手を目指して、スポ根漫画よろしく鍛え上げられた俺だ。前に述べた？一介のサラリーマンとしては無駄でしかない厚い板？は、その名残なごりなのである。肩おとろの衰えた今でこそ、助っ人を頼まれる機会もなくなったが、友人の草野球チームでは常にクリーンアップを張り続けた実績だつてある。俺は娘のような年齢の紗江子にムキになつて反論した。

「はいはい、それではお手並み拝見とゆきましよう」

俺のヒートアップぶりを、彼女は軽やかに受け流した。

機能やデザインより、とにかく価格の安いものを選びたがる紗江子の意見を無視してN社製のトレッキングシューズとR社製のバッティンググローブを仕入れ、俺達はバッティングセンターに向かつた。

「ま先ずは、お手本をお見せしましょう」

ケージに入った俺は、備え付けのバットで数回、素振りをくれたから、ネットの向こうに居る紗江子に、おどけて言った。

「頑張つて、負けないようにね」

隣で快音を響かせるユニフォーム姿の中学生を目で指し示し、軽く曲げた両手の拳を握りしめて俺を鼓舞する。

スカッ

気分爽快きぶんそうかいの擬音ぎおんではない。見事な空振りであった。生来せいらいの負けん気と紗江子の挑発おどくちに大口おおくちを叩いてはみたものの、およそ十年ぶりのバツティングセンターである。ブランクは大きい。

「あれえ？」

彼女が囁ささやす。

昔むかしとつた杵柄きねづかだ、なんとかなるだろうとの目論見めくひみだったのだが、最初の十球ほどを費やして杵きねの在処あじかを探す羽目はめとなった。まぐれ当たりのドン詰まりは、広いスイートスポットを持つ金属バットをしても俺の手を痺しびれさす。短いインターバルで肩や膝の使い方を思い出しながら微調整を繰り返した。

快音と共にライナー性の打球を弾き返せたのは、十五球目ぐらいだっただろうか。ようやく本来のスイングを取り戻した俺は、その後もヒット性の当たりを続け、なんとか面目めんもくを保たもってケージを出た。「すごい。最後のなんか、あそのホームランってところに当たりそうだったわよね」

ピッチングマシンの後方、二十メートルぐらいの高さに掲げられたホームランゾーンを紗江子が指差す。

「あはは、井ノ口市のSと呼んでくれたまえ」

胸を張ひしきって轟頂球団ひしきぎやうだんの長距離打者の名前を挙げたが、野球に興味のない彼女は「誰？ それ。イチローさんより強いのか？」と、トンチンカンな言葉を返してくる。

君の番だ。そう言いって、グリップとスイングの基本だけを教おしえて送りだす。しかし、いわゆる着払いひはく。ボールが後ろのラバーシートに届く頃にスイングを始める彼女のバットに、まぐれでもボールが当たるはずはない。場所を変えて観察すると、バットを振りだす瞬間に目を閉しじてしままってすらいる。

「きゃー」「いやーん」「ちよつと待まちってえ」場所が違ちがえば、艶なまめ

かしくも聞きこえそうな彼女の悲鳴ひなめいが苦笑を誘いった。

「当たらない。手が痛いたくなっちゃった」

「コーチしょうか？」ケージを出た彼女に、最初の一ラウンドを

何も言わずに見守った俺が言う。

「うん、このままじゃ引き下がれない。ジュンに打てて、あたしに打てないはずがないわ」

野球経験者の俺に、ど素人の自分が張り合おうというのだがら身の程知らずにも程がある。

「俺を信じるかい？」

「当たるようにしてくれるなら」

意地になっているようにも見えた。

「じゃあ、これを三分間でできるだけたくさん読んでみて」

読みかけて車に放り込んであった小説を渡す。いつだったかテレビでみたメソッドで、速読そくどくで集中力と動体視力どうたいしりょくを高める方法だ。こんなことで打てるようになるの？ 不審そうに眉根を寄せる彼女

に、騙されたと思つてやつてみるよと、時計の文字盤を指先で叩く。

本当に騙されたりしてね。憎まれ口をききながらも、俺の合図に紗江子はページをめくり始めた。

「よし、そこまで。もう一度やってみて。顎あごを引いて、バットはもうちょい上に、そうそう、そんな感じ。振ってみて」

さつきよりは、随分マシになっている。キン 一球目で当たった。

「当たった！当たったわ」

こちらを振り返り、目を輝かせて叫ぶ。

「次が来るぞ。前を見てろ」

ファウル性の打球だったり、力のないゴロであったりはしたが半分以上がバットに触れるようになっていた。ケージを出た紗江子が、興奮を隠せない様子で言った

「信じられない。何で？ ねえ、何で本を読んだだけで当たるようになるの？ もう一回お願い。次は前に飛ばせそうなのがする」

「その細腕あしづよくじゃあ、なかなかそうは行かないよ。次のステップだ。休憩して握力を回復させながら、俺のを見ててごらん」

コイン一枚を犠牲にして膝の使い方とバットの振り方を教えた。

紗江子は真剣な面持ちで俺の一挙一投足を見つめている。そして彼女を打席に立たせると、俺は背後に回った。

「膝をこう送るつもりで、左の腰を中心にして体全体を回すんだ。バットはそれに釣られて出てくる感じ、腕を振る必要はない。上半身の力を抜いて　そうそう、その調子」

ゴルフのレッスンプロよろしく紗江子の肩へ足へと、両手を添えて熱心に指導する中年男が痴漢と間違えられなければ良いのだが。

そして、また速読をさせてからケージに送りだす。七々八球、先ほどのようなファウルチップを続けた後、見事に芯を食った打球が飛んだ。

「見た？　ねえ、今の見たわよね。ビューンって真っ直ぐに飛んでいったわ」

紗江子も飛び跳ねていた。少女のような無邪気さだ。今の感じを忘れずに続けてみる。俺のアドバイスにコクリと頷いてバットを構え直す。最終的に十球ほどだったが、乾いた金属音を伴うライナー性の打球を弾き返していた。

上気した顔に満足気な笑みを浮かべ、ケージを出るなり、俺にこう言った。

「プロ野球選手にはなれなくても、教えるのは天才的ね」  
テレビで見たメソッドについては黙っておこう。

「見て、まだこんなに手が震えてる」

紗江子が白く細い手首を俺に差し出してみせる。

「だろうな。楽しんでる最中は気づかないけど、バッテリーは意外と体力を消耗するんだよ。あれ以上、続けてたら明後日からの業務に支障がでたかも知れない。ペンを持つ手が震えていたら仕事にならないだろ」

「そうなんだ。でも、気持良かったわ」

たっぷりのクレマが表面を覆う、美味しいコーヒーを飲ませてくれる喫茶店のテーブルで俺達は向かい合っていた。オーナーは俺の幼馴染である大山という男だ。学生時代に二人。彼の奥さんとなった女性とも一度きりだが関係のあった俺なので、都合三人の女性をこいつに略奪（長身で甘いマスクの大山に女性達が勝手になびいただけなのだが）されている。

早い時期に結婚し、女遊びに終止符をうっていた彼に、若い恋人ができる毎に見せびらかしに連れてくるようにしていた。さすがに妻が居たころは、そんな真似もできなかったが、独身となった今など堂々としたものだ。俺はそのぐらい心の狭い男なのである。

「コーヒーのお代わりはどうか。あつ、きれいな娘じゃないか。紹介しろよ」

ガラス製のポットを手にして大山が厨房から出てくる。

「近寄るんじゃない。純粹な紗江子が汚れるだろうが」

魂の汚れ具合では五十歩百歩である俺の苦情を無視して、大山が紗江子に話しかける。

「サエコさんか。こいつの友人の大山です。今後ともよろしく。

当店のコーヒーはどうか？」

「とつても美味しいです。中尾紗江子といいます。お噂はジューンからかねがね」

軽く頭を下げて微笑む。

「こいつの言うことは信用しちゃいけないよ。僕を悪くしかいわないんだから」

誰が？僕？なんだよ、気取りやがって。俺は大山の顔にタバコの煙を吐きかけた。

しかし、ヤツはそんな俺の抗議行動を気に停める様子もなく、慣れ慣れしくも握手を求めようとに紗江子に右手を伸ばしてきた。

「そんなことないですよ。大山さんの淹れるコーヒ―は日本で二番目に美味しいからって、連れてきてもらったんです。それに、手を触れただけで女性を妊娠させる特技の持ち主だとも聞いています。だから、握手は遠慮させて下さい」

ここに来る途中話したジョークをそのまま口にする彼女に、俺は大笑いした。

「手厳しいな」

差し出した手の行き場を失い、そのまま頬を搔いていた大山だったが、新たに入ってきた客の注文に応えるために厨房に戻って行く。

「まさか、あのままを口にするとはね。ヤツの面喰らった顔ったら、なかつたな」

笑いの収まった俺は、紗江子のジョークを称賛する。

「単に爪の長い男性が苦手なだけよ。あの人こそうだったの。トラウマね。大山さん、気分を悪くされてないかしら」

一瞬、過去に思いを馳せるような目をしたが、すぐ心配そうな顔で厨房の大山を見やる。

「あの程度で傷つくようなタマじゃない。ヤツの心臓には俺のヒゲと同じぐらいの毛が生えてるんだ。心配いらないさ」

「だったら、いいんだけど」

それでもまだ不安げに厨房に視線を向けたままの紗江子と大山の目が合ったようだ。サイフォンを掻きまわす木製の棒を持ったまま、にこやかに手を振ってくる。

「な？ ああいう奴なんだよ」

「良かった」

ようやく俺に向き直り、安堵の笑みを浮かべる。大山の注いでいたお代わりのコーヒを飲みながら。俺たちは他愛たあいのない話に戻っていった。

突然、窓の外を眺めていた紗江子が声を上げる。

「あ、公衆電話があるのね。携帯の充電が切れそうなの。少し電話してきていいかしら？」

店の向かいにあるNTTの建物の隣には、今や珍しくなった電話ボックスがある。

「俺のを使えば？ 外は寒いぜ」

「ううん、大丈夫」

何が、どう大丈夫なのだ。上手い言い訳がみつからない時の彼女の口癖だった。電話料金を気にしたのでもないはずだ。俺は別の可能性を考えていた。

客の注文をこなし終えた大山が戻り、紗江子が座っていたソファに腰を下ろす。

「若い女性の温もりが伝わってくる」

「いけしゃあしゃあと言う」

「ところで相談がある。いや、相談じゃなく仕事の依頼だ。あっちの方のな」

ここに来た本来の目的であった。厨房の奥にある隣室への扉を指差して告げる。

大山の両親は興信所を経営していた。そこそこ固定客もついでいて、父親が亡くなった後もそのまま廃業してしまうには惜しいだろうということ、調査員を一人だけ残り引き継いでいたのだ。喫茶店の隣の小部屋をそのままオフィスにしてある。よく見ると店の看板の隣に小さく？大山興信所？と書かれていた。

俺が入社もない頃の話だ。あるメーカーから請け負った部品の設計図面が他社の知るところとなった。つまり、機密の漏洩ろうえいがあった訳だ。俺の居た部署の管理の杜撰たけんさを非難され、意地になって、

まだ健在だった大山の父にその調査を頼んだことがある。機密漏洩の原因となった組織の欠点をも指摘する確かなアドバイスと、簡潔且つ明瞭な報告書は、当時組織の全容を把握していなかった俺にも一目瞭然の素晴らしい出来だったと記憶していた。依頼から犯人の確定まで、たった五日間。その手際の良さも見事だった。

そして、その一件が当時の常務の知るところとなり「今後は機密保持も必要だな」と、遊軍のような部署が設立される。調査の依頼以外、何の働きもしていない俺だったが、常務が褒めていたとの噂に、人が書いた図面の手直しに明け暮れていたポジションからの脱却を期待したものだ。しかし、その新設された部署に配属されることとなってしまふのだから、人生とは皮肉なものである。

紗江子が戻る前にと、早口で依頼内容を伝える。

「カジさんが戻ったら伝えておこう。いつものように細かい打ち合わせはセキユアのかかったパソコンメールでやりとりしてくれ。

しかし九年前の事件か、取材できる人間がどれだけ残っているのが問題だな。期限は？」

以前の調査を頼んだ時に、カジさんと呼ばれる調査員とは面識があった。名刺を持たない彼が？ 梶？ なのか？ 加地？ なのかも分からなかったし、それすら本名であるのかどうかも疑問だった。俺や大山と同じぐらいの年齢だろう。中肉中背で、目立つ特徴のない男だった。報告書を受け取った時、そんな印象を抱いた俺に「何の特徴もない私だと思われましたか？ あちこちに顔を出して調査する仕事には、なるべく人目に留まりことのない、こんな風体の方がよいのです」と抑揚を全く感じさせない声で伝えてきた。思考を読み取ったかのような彼のその言葉に、俺は、洞察力の鋭さを感じさせられたものだった。

「早ければ早いほどいい」

「当時の出納責任者でも見つければいいんだがな。頼んでみよう。俺が依頼した調査はN市の汚職事件に関するものだった。役所ぐるみとはいえ、あれだけの逮捕者と免職者を出し、数億円が動いた

といわれる事件にしては、市長や県議などのビッグネームが一つもでてこなかったのが気になっていた。例の市会議員の自殺の時期とも重なる。少女をレイプするような男　本音と建前の使い分けに長けた政治屋だったヤツが、妻に責められたぐらいで自殺などするものだろうか？　そんな疑問もあった。また、そこになんらかの繋がりでも見えてれば、まだ決着していない魚男問題の解決の糸口になるのではないかと考えたからだ

紗江子が戻った時には一時間が経過していた。大山には大まかな調査の依頼をすれば話は終わる。客への対応に数回席を立ったが、彼と語る共通の友人の近況や昔話が、それを長く感じさせることはなかった。

「ごめんなさい。一年ぶりに話す叔母だったから、つい長引いてしまつて。祐ちゃん……魚君は帰ってないみたい。今夜も泊めてもらつていいかしら？　明日の朝早くにN市に行つてこようと思つた」

勿論　今夜こそ愛し合おう、肉体的にも精神的にも。俺は心の中  
中で歓声をあげた。

途中で何度も暖房の温度を調整し直さねばならないほどの激しさだった。

「死んじゃうかと思ったわ」

紗江子が大きな息を吐く。

「何度も求めてきたのは君じゃないか」

「だって、なんだか始めての感覚で……」

口ごもり、頬を赤らめる。男はこういった状況に、自分が雄であるといった自信を深める。俺達は前日の分までたっぷりと愛し合った。

そして翌朝、俺が目覚めるより早く紗江子はN市に発っていた。

『解決したら知らせます』と、携帯電話のメールに書き置きを残して。

大山の店に顔を出すと、既にカジさんは調査に向かったと告げられる。浮気調査や失踪人探しばかりに辟易へきえきしていたらしい彼は、過去の事件とはいえ大がかりな贈賄の真相に迫ることができそうなこの調査に、張り切って出掛けて行ったという。

夜の八時を過ぎても紗江子からは何の連絡もない。悶々《もんもん》としながらも、簡単に決着するような問題でもないのだろう。魚男が居ないなら、数年ぶりに再開を果たした叔母と昔話に盛り上がっているのかも知れないな。明日にはまたすました顔でオフィスに座っているさ、そう自分に言い聞かせ、パソコンのメールチェックにかかった。

『ビンゴです。小野木さんの推測通り、例の市議は詰め腹はらを切らされたようです。当時の市長。自殺した市議の伯父おじにあたる県議の居た議会。その上にもかなりの金が流れていたと思われます。逮捕者と免職者は僅かばかりの金を握らされてトカゲの尻尾しっぽ切りにあつたのでしょう。出納課長だった永田は簡単にみつかりました。金に

も困っていたようです。僅かな謝礼で積年の恨みを晴らすかのよう  
にペラペラと喋ってくれました。報告書は明日までにまとめます』  
『  
嚴重なセキュリティがかかった受信トレイにカジさんからのメールが  
届いていた。』

素早いな。予想通りの調査報告に俺はにんまりとする。

美貌の女性議員の活躍で国民の話題をさらった事業仕分けですら、  
出来レースだったのだ。保守派が幅を利かし、監査機関らしきもの  
もない地方の議会が、談合と慣れ合いに首までどっぷり浸かっ  
ることなど、俺にも容易に想像がつく。因習というヤツだ。報酬の  
上乘せがある議長や役職は持ち回り、議案は密室で根回しされ摺り  
合わされて成立する。そこに、本来討論集団であるべき議会の姿な  
どはない。

翌朝、いつもの手順で受付を済ませ、向かったオフィスに紗江子  
の姿はなかった。

「紗枝……中尾さんは？」 いつか俺をヒゲ王子と呼んだ女子職  
員に訊ねる。

「登庁してすぐに参事に呼ばれて応接室に入っていたきりなん  
です。後から男の人が二人入っていったけど、もう一時間になるわ  
何かあったのかしら？」

「どんな連中だったか覚えてないかな？」

「一人はよく見かける県会議員さん、もう一人は若い人だったと  
思います。あんな髪をしてたし……」

あんな髪？ 俺の脳裏にオレンジに髪を染めた魚男が浮かんだ。  
考えるより先に彼女が指差した応接室へと向かう通用口を抜け、今  
まさにお茶を持って入ろうとドアに手を掛けていた別の女性職員か  
らトレイを奪ってドアを開けた。彼女は「困ります」と、小さな声  
を出したが、緊急事態の警報が鳴り響く俺の頭には届かない。

「お茶をお持ちしました」俺の野太い声が応接室に響く。

「だっ、誰なんだ、君は。会議中だぞ」

何気なくこちらに顔を向けた六十年配、小太りの男がギョツとして声を上げる。女性職員を予想していたところにヒゲ面の俺が現れたのだから驚くのも当然だ。オフィスの奥でふんぞり返ってる姿をよく見る男だった。おそらく、これが参事なのだろう。

そのまま部屋を見回し、素早く状況を探る。六人掛け程度のソファの左側に紗江子が、向かい合って奥から、魚、県議（多分）、そして、一番手前に参事が座っていた。

「誰なんだと、聞いているんだ」

視覚からの情報を整理しながら適当な言葉を探す俺に、落ち着きを取り戻した参事がぞんざいな口調で繰り返す。答える前に魚男が声を発した。

「あ、こいつだよ、おじさん。俺が紗江子のマンションに行った時、管理会社の人間だつて言つて俺を追い返したヤツだ。犯罪だぞ、あれは」

「その節はどうも。身分詐称みぶんさしょうはお詫びしましょう。しかし、経済的不利益を与えた訳ではないので犯罪としては成立しません」

お前に、こいつと呼ばれる筋合いはないが、今は許してやる。しかし、紗江子を傷つけるような真似だけは許さねえぞ。ついでにゆくと、そいつはおじさんじゃなく、大おじだ。お前は大学で何を学んできたのだ。後半は言葉にせず、にこりとして会釈をした。身分詐称がどういった場合、犯罪になるのかは最近読んだ小説に書いてあった。どうでもいいようなことに思えても、ひょんなところで、こうして役に立つことがある。本は読んでおくものだ。

なるほど、これが例の県議か。顔ぶれが揃った訳だな。しかし、役所の連中つては、なんでこうも権力に弱いのだ。紗江子の業務を中断させてまで奴らの要望に応えなきゃいけないのか。納税者たる俺の怒りが湧き起こる。

「出て行きたまえ、君を公務執行妨害で警察に引き渡すことでもきるんだぞ」

頭頂部の薄くなった参事が居丈高いたけだかに声を上げた。紗江子は不安げ

に俺と参事のやりとりを見守っている。

「私は中尾紗江子の保護者です。会議中なら失礼をお詫びします。しかし、そちらにおられる方々の顔ぶれから察しますに、業務に関する会議でもないようにお見受けするのですが、違いますか？ 中尾紗江子のプライベートに関することでしたら保護者たる私にも同席する権利があると思うのですが」

「中尾紗江子と、その従兄殿、そしてその大おじであられる県議さん……ですよね。この集まりが公務なのですか？」

参事に口を挟む隙を与えないで、事情を理解している旨を告げる。俺は権力に立ち向かえるのが嬉しくて仕方がないのだ。青臭いと笑いたければ笑え。

こういった状況を楽しんでいる様子の俺に紗江子は安心したのだろう。ドアを開けた時には蒼白だった彼女の顔に赤みが射ってきていた。県議と参事はなにごとかひそひそと話し合っていたが、ややあつて県議が口を開いた。

「しかし、君は保護者などと言っておるが、血縁はないのだろう。こちらの母親の承諾はとっておるのかね。我々はその許可を得て、ここにいるのだ。中尾さんが祐二君の話を聞こうとしないから、やむを得ず中島君に頼んでこうしているのだよ。」

紗江子を顎で指して言った。はなもちならない傲慢さが滲み出ている。

参事は中島というのか。おしきせの教育でお決まりのコースを歩み、大した実績もなくその地位に就いたのであるう。ストレスは頭頂部に押し寄せたのだな。俺は県議の顔と参事の頭を交互に見やる。

「お、か、ね」

声を発することなく紗江子の唇が動いたのがわかった。また、金か。とことん腐った母親だな。そして、そんな手段で彼女を拘束しようとするこいつらにも、うんざりする。

「保護者がダメなら任意後見人ということにしましょう。成人である彼女が認めれば成立しますよね。とにかく、大の男が三人が

かりで女性一人を責める行為がフェアとは思えない。まずは私と彼女に話し合う時間を下さい」

「責めてなんぞおらんよ。私も中島君もあくまでもオプザーバーの立場だ。祐二君と中尾さんの話し合いを見守っているだけだ。君こそ、彼女を連れだして何か口裏くちらを合わせようとしてるのではないかね」

偉そうな口ぶりは変わらないが、耳慣れない単語を並べたてる俺を、そこいらの若造ではないかと判断したようで、注意深く言葉を選びながら話してくる。

「おかしなことをおっしゃいますね。ここは法廷ではないのですよう？ 例えそうだとしても、弁護人と被告の打ち合わせは認められるはずです。被告でもない彼女と相談することに何の問題がありませんしゅ？」

少し、噛んだ。

何か反論しようとして開きかけた口を思い直したようにつくむ。

そして 再び、額を寄せてひそひそ始める。

「いいだろう。五分だ。五分で戻ってきなさい。私も暇な人間ではないんだ」

暇な人間ではないヤツが、なぜ公務をほったらかしてまで出来の悪い身内のために、ここにいるのだ。あの事件で、より真相の近くにいたはずのこの県議は、事件をあくまでも市議と紗江子の間だけのことにしておきたいに違いない。議員バツジに与えられた権力で小娘の一人ぐらい簡単に丸めこめる。そう高をくくっていたのだから。しかし、嬉々として権力との対峙に挑む俺の登場は予想外だったろう。

カジさんからの報告を受け取っていた俺に切り札はあったのだが、そのカードの使い途を考えていた。参事と県議が知り合いならば、迂闊うかつな言動が、紗江子を職場に居辛くすることにもなりかねない。状況を把握した上で、まずはこの三人の分断から始めよう。慎重に進めるべきだな。そう考えながら、紗江子の背中を押して部屋を出

た。

## 十九

「連絡しなくって、ごめんなさい。頭の整理をしたかったの。今夜にでも話すつもりだったんだけど、こんなことになっちゃって……」

紗江子が口を開く。俺達は職員の休憩室に居た。意外に冷静だった彼女に、俺はホツとした。

「叔母はね、あたしが、あの人を誘惑したんだって、祐ちゃんにそう説明していたらしいの。尊敬する父親が義理の姪をレイプして自殺したなんて言えないでしょう？ お金も払ったし、あんたを高校にも行かせてあげたんだから、そのくらいは許してちょうだいって、言われたわ。あたし、愕然としちゃった」

そう聞いた俺も愕然としちゃった。母親が子供を可愛がるのは分らないでもないが、盲目的な愛情は子供をロクなものにはしない。そして、その叔母さえもが事件の真相は知らされていないようだった。何も語らず全てを墓へ持っていったのなら、あの市議もそれなりに潔いと言わざるを得ない。

「叔母は祐ちゃんが、あんな行動に出るとは思ってたかったっていつてた。彼ね、色んな仕事に就いてはみたらいいんだけど、どこも長続きしなかったみたい。あの事件のせいなのかな。何をしたらって死んだ人は帰らないんだって必死になって止めたそうだけど、彼は父さんの名誉を回復するんだって聞かなかつたらいいの。それで大おじ様、さっきの県会議員さんね。あの人のところへ行つて……」

そこでいったん言葉を切り、紗江子が申し訳なさそうな顔で言った。

「こうなっちゃったの」

魚男も犠牲者だったのだ。しかし、虎の威を借るような真似には腹が立つ。

九年前の事件は既に時効が成立している。俺が手にした切り札を

あの県議がどの程度の脅威と判断するかは分からなかった。詳しい報告書を読んでいない俺にとって、それが両刃の剣となる可能性もある。しかし迷っている時間はない。素早く考えを巡らせ、紗江子に言った。

「君は何を話したんだい？」

「謝るようなことは何もありませんって。それ以外、あたしに何が言えるの？」

「よし、分かった。俺に全て任せろ。君は、ただ座っていればいい」

限られた時間では事件の概要すら説明してられない。

「こんな迷惑ばかりかけているあたしを見捨てないの？」

「いや、権力に立ち向かう機会を与えてくれて感謝してるさ。それに、あの河童ハゲも偉そうで嫌いだったしな」

「 かつぱって」

紗江子は少しだけ笑った。

勤め先に電話をして半日の休暇を申し出る。電話にでた女子社員は上司の不機嫌そうな様子を伝えてきたが、そんなことを気にしている場合ではない。あの上司は例の機密漏洩事件以来、社長（当時の常務）の覚えのよい俺に、なにかと難癖をつけたがるのだ。

約束の五分が過ぎようとしていた。

「大丈夫？」 「任せとけて」 不安そうな紗江子に片目をつむって答え、応接室のドアに手を掛けた。ゴルフの話でもしていたのか、十二番ホールがどうのこうのという声が聞こえた。部屋に戻った俺達に気づいた県議が大儀そうに言う。

「おや？ もう五分経ったのか。もう少し時間をあげてもよかったですかも知れないな。打ち合わせは上手くいったのかね」

余裕に満ち、人を見下したかのような物言いだった。お前のような若造が、どう智恵を絞ろうと飛び跳ねようと、所詮は自分の掌上だ。孫悟空の釈迦如来にでもなったつもりか。奴等は作戦会議など必要ないと思っていたのだろう。参事はむすつとした顔で俺を見

上げていたが、魚男は窓際に立ち外を眺めていたようだ。

「見てろ。その傲慢な笑いを厚顔な顔から消し去ってやる。あ、上手く韻を踏んだなと思いつつ、俺は県議の正面にどつかと腰を下ろす。」

「お待ちせしました。さて、加藤先生。そちらの祐二さんのお父様、高祐先生と懇意にいらした当時のN市の出納課長、永田さんはご存知ですよね」

いきなり切り札を出す。そして、役職だけでなく名字をしつかりと呼ぶことが、追及の対象と責任の所在を明らかにするには有効である。と、これまた何かの本で読んだ戦術を試してみる。

「何の話だね。私もたいていの職員は覚えているつもりだが、地方の課長クラスだと移動も多い。全ての顔と名前は一致しないかもしれないな。永田か……ピンとこないな。それが祐二君の要求する謝罪文と何か関係があるのかね？」

県議は一瞬、虚を突かれたような顔をしたが、すぐに平静を装う。さすがは海千山千の狸である。しかし、俺は僅かな狼狽を見逃さなかった。隣に座った紗江子は、この人は一体何を言い出すのだろう、といった顔で俺を見つめている。この表情も美しい。しかし、今はうつとりしている場合ではない。加藤に向き直って膝を詰める。

「あるんですよ、それが。面白い話を永田さんから伺ったんです。高祐先生が亡くなられた時期、ほら、あちらで色々あったじゃないですか。叔父にあたられる加藤先生も、何かご相談を受けていらしたのではないですか？ 当時の市長さんは、どこに居られるのですよね」

ブラフは言い淀んだりすると、それとばれ、効果を失う。俺は一世一代の勝負に出た。県議は不愉快さと警戒心が、ないまぜになつたような顔で俺を見返してくる。

「君が何を言いたいのか分からんが、あれはもう九年も前のことだ。それに私が高祐から相談を受けたのはあくまでもレイプだけ」

「はい？ 何とおっしゃいましたか」

呆気なかった。罪悪感もあったのだろう。権力にものをいわせ、父親を死なせてしまうことになった祐二のためにひと肌脱いでやるか。そんな軽い気持ちで望んだ会合が思いもよらぬ方向へと話が転じ、つい焦ってしまったのかも知れない。加藤は言ってはならない言葉を口走っていた。

俺がそれを追及しようとするより早く、加藤は席を立つ。「ちょっと、失礼」そう言って、かかってくるでもない携帯電話を内ポケットから取り出して壁際に歩み寄り、小声で話すふりをした。ヤツの動揺を確信した俺の目には、自身を落ち着かせるための行為にか映らない。携帯をポケットに戻し、振り返ると「秘書からの電話だった。視察に行かねばならないところがあつたことを忘れていた」と、いきなり辞去の弁を告げてきた。

「もつと早く話がつくものだと思っていたからね。予定を入れてしまっていたんだ。後は頼むよ、中島君。すまんな祐二君」

チラリと俺の方を見やり、足早に応接室を後にする。迎えに出た秘書に何事か毒づいたようだがドアが閉まり、その声も聞こえなくなった。

勝った。時効が成立しようといまいと、人、一人を自殺に追い込んだ事件との繋がりが発覚すればヤツの政治家生命も危うい。それに、隠蔽に成功したはずの事件をほじくり返すことに、図らずも手を貸してしまったとなれば、上からの叱責にもあうだろう。県議の一人ぐらい、権力はあっさり切り捨ててしまうものだ。

俺の鼻孔はきつと広がっていたはずだ。心の中で小さくガッツポーズを繰り返し、どんなもんだい、と快心の笑みを紗江子に向ける。しかし、詳しい事情を知らされていない彼女は、事のなりゆきが掴めず、怪訝そうに俺を見つめ返すだけだった。もつと、うつとりしろよ、俺は、ちよっぴり落胆した。

残された魚男と参事は呆気にとられたような顔で、俺を見ている。「ごあいさつが遅れました。私は富士ノベルテックの小野木と申

します。こちらの事務所では、いつもお世話になっております」  
次の作業にとりかかる。

「あ、うん。そうか　そうだったな」

事のなりゆきがつかめないでいるのは中島も同様だった。ここは  
一気呵成いっきかせいにゆくべきだな。紗江子を呼びつけた理由すら理解出来て  
いない様子の参事には、ブラフも更に有効であろう。

「ところで中島参事。このお役所の規模ですと退職金はさぞかし  
莫大なのでしょうね。うん百万、いや、ゼロがもうひとつ増えるの  
かな。しかし、あの県議さんと懇意こんいになさってでは、その保証は  
ありませんよ」

俺は完全に調子に乗っていた。

「どっ、どうゆう意味だね」

相変わらずぞんざいな口調ではあったが、警戒心も混じっている。  
尻はに帆をかけて逃げ出していった県議の様子に、彼の中の警報が鳴  
り出したのだろう。こういった連中は他人の痛みには鈍いが、自身  
自身に危害が及ぶような気配には非常に敏感だ。

「そのままの意味です。おそらく、この問題に加藤先生が再び首  
を突っ込んでこられることはないと思われれます。また、私が日参にっさん  
する、こちらに足をお運びになる機会も少なくなるのではないかと思  
います。どうでしょう。中尾さんは業務に戻して、参事さんもオフ  
イスにお戻りになられませんか。十五分ほどこのお部屋をお借りで  
きれば、こちらにも納得のゆくご説明をして帰っていただけると思  
うのですが」

俺は魚男を掌てのひらで指し示す。

「そ、そうだな。事情の分からない私が居ても何の役にも立てな  
いだろうし、そうさせてもらおうか」

俺の提案は渡りに船だったようだ。中島は、ほうほうの体ていで応接  
室を逃げ出した。

釈然しやくぜんとしない様子の紗江子にも、いいから俺に任せて仕事に戻り  
なさいといって部屋を出す。

さてと、残すはこいつか。二人を見送って振り返った俺に、魚男が得体の知らないものを見るような目を向けてきた。

「あんた、一体何者なんだ」

「さつき、いったる？ ただのサラリーマンだよ」

「でも、おじさんや」

「いいから、黙って俺の話の話を聞け。お前が信じたくない話もしなければいけないが、世の中の真実つてのは、たいていは醜いもんだ」  
鋭い語気に気圧されたように魚男は口をつぐむ。これが俺本来の若者への接し方だ。俺は自分が既に失くしてしまった若さを持つ彼らが嫉ましくて仕方がないのだ。

「紗江子をレイプしたお前の親父さんを許す訳じゃないが、彼だつて犠牲者だつたのかも知れない。自殺に追い込まれるほどのプレッシャーに自分を見失つてたんだろつな」

魚男、いや、今後は祐二と呼んでやろう。彼は涙を流しながら俺の話の終わりまで聞いた。報告書を読んでいなかった俺のそれに多少の脚色があつたのは、この際、許してもらおう。

「おじさんが父さんを自殺に追い込んだのか」  
祐二が独り言のように呟く。

「身内をそんな目に合わすヤツは居ないだろう。もっと悪い奴らがどこかに居る。ひよつとしたら自殺ですらないのかも知れない」

目を剥いた祐二に、俺は両の掌を拡げて、なだめるように言った。  
「推測だよ、証拠はない。ただ、あの事件がおふくるさんから聞いた通りの単純なものではないつてのは確かだな。権力つてのはそれほど傲慢で冷酷だつてことだ。しかし、俺もこれ以上、追及するつもりはない。命は惜しいからな。本当に悪い奴等は、何をしようと決して捕まらないところで……」

えつと、なんだっけかな？ この続きは。思いつかなかつたので適当に続ける。

「鼻クソをほじくつてやがるんだ」

多分、違うと思う。

「一体、どうやってそんなことを調べたんですか？ 小野木さんはただのサラリーマンなんでしょう」

お前が？ただの？って言うな。そうは思ったが、顔をしかめるだけに留める。祐二は俺に敬語で話すようになっていた。

「興信所だよ。私立探偵つてヤツだ。腕のいい人が居てな。時効が成立してた事件だから取材した人々の口も軽かったらしい。運にも恵まれた訳だ」

「俺、もつと知りたい。父さんが何で死ななきゃいけなかったのか」

「知ることが出来る真実にも限界はある。時効の成立してしまつた事件に司法は動かないぞ。追及が深まれば、またどこかでトカゲの尻尾切りが行われるかも知れない。さっきの先生まで死なせたくないだろう？ 全てを知るにはエシユロンにでもアクセスするしかないだろうな」

「エシユロン？ あれは、本当にあるんですか」

「真面目に受け取るな。冗談だよ」

俺は笑つた。釣られて祐二も笑う。

「あのお……」

「なんだ？」

「俺、その興信所で雇ってもらえないでしょうか？」

「まだ諦めきれないのか？」

「そうじゃなくつて、物事の真実を見られる目が持ちたいんです。母やおじさんのいうことを何の疑いも持たずに鵜呑みにしていた。そんな自分が如何に世間知らずだったかを思い知らされました。こんな時代だし、大学を中退して遊んでいた俺に、まともな働き口なんかありません。地元では、どこに行つたつて『あの市議の息子だ』つて、言われるんです。紗江子にも謝らないといけない。こんな俺じゃあ許してもらえないだろうけど……先ずは、ちゃんと仕事に就いて、襟えりを正したいんです」

「ほお、襟を正すなんて言葉を知ってるのか。俺は、少しだけ感心した。」

「彼女は怒ってないと思うぞ。君の気持ちもわかるっていったしな」

「そうなんですか？」

「ああ。興信所も紹介ぐらいはしてやろう。但し、必ず雇ってもらえるって保証はない。それと、まともな働き口云々はタブーだ。そんなことを言ったら、雇ってもらえるものも雇ってもらえなくなる」

「あ、そうですよね」

「それと……」

悪趣味に塗装されたセダンを思い出した。

「なんですか？」

「あの車の趣味は悪い。その髪も調査員向きじゃないな」

「ああ、あれは連れのです。ああゆう車の方が脅しになるかと思っ  
つて」

「そうか　でも、もう分かったろう。目に見えるものだけで物を判断してちゃ、大切なものは見えてこないんだってことが。見かけはどうだっ  
ていいんだよ」

見てくれに自信のない自分を、ついでに正当化させておく。

「はい」

素直に頷いたのは、そんな俺の思惑に気づいていないからだろう。綱渡りだった。永田が見つかるのが遅ければ　カジさんのメールを見ることがなければ、事態は全く別の展開になっていたはずだ。やはり、今年の俺はついている。ついでに宝くじでも当たってくれないものか。離婚の慰謝料に貯金の大半を女房に持って行かれた俺の懐は、十五年乗り続けた自家用車さえ買い換えられないほど寂しかった。

応接室を出た俺と祐二は、紗江子のデスクに立ち寄る。

「片付いたよ。こいつが何か話があるそうだ」

「紗江ちゃん、色々ごめん。俺、なにも分かってなかった。父さんの分まで謝るよ」

殊勝な面持ちで祐二が頭を下げる。

「もう、いいの。忘れましよう、お互いにとっていい思い出ではないし。あたしも口の軽い母のことをお詫びします。でも、なんで……」

事態の急変に納得の行かない彼女が、俺に視線を転じて疑問を投げかける。

「説明は後だ。俺も会社に戻らなきゃいけないし」

俺はニンマリとして、こう続けた。

「でも、ただじゃ教えてやれねえな。そうさな、料金は……」

続きは彼女の頭の中で引き継がれたようだ。

「腫れちゃうってば」

そう返す紗江子を祐二はキョトンとした顔で眺めている。お前に理解されてたまるか。

参事が歩み寄ってきた。業務の妨げになるとも言いたいのだろうか。しかし、今、帰りますからと、言った俺に、彼は卑屈な笑いを浮かべて、こう言う。

「そうじゃないんだよ。さっきの説明をしようと思ってね。いやあ、お世話になってる先生だから、つい断り切れなくて、ああなってしまったんだ。中尾君にも悪いことをしたと思ってる。どうだろう？ この件は水に流そうじゃないか。その方が今後のお互いのためでもあると思わないかね」

祐二に説明している間に、どこからか事件の情報収集をしたようだな。保身に必死ながら、恫喝も忘れず交えて話す姿に、中島という人間の薄っぺらさが伺える。

「私に異存はございません。今後ともお世話になります」

同意を表す俺に参事は満足したようで、席へと戻っていった。

紗江子の隣に居た女子職員が囁く。

「なんだか分かんないけど、ヒゲ王子すげー」

だから、それはやめてっばー！ 俺の中で二度目の叫びが放たれる。

こうして魚男事件は大団円を迎える。理由も告げず半日の休暇をとった俺に、上司がねちねちと嫌味をいつてくる様子が想起され、俺は憂鬱ゆううつになった。次はヤツの弱みでも探ってもらうか。祐二、早く一人前になれよ。そんな意味を込め、頼んだぞと祐二の肩に手を置く。彼の表情はキョトンの二乗となっていた。

「へえ、そんなことがあったんだ。でも、凄いのね、そのカジさんって人。一日で調べちゃったんでしょ」

紗江子が目を丸くして言った。

「ああ、だからさつきもいった通り、運にも恵まれたんだよ。言っとくけど、俺のブレンだからな大山もカジさんも」

俺は、紗江子お勧めの中華料理店で事件の詳細を語っていた。

窮地を救ったヒーローへの感謝より、カジさんへの賞賛の方が大きく感じられ、調査が俺の依頼であった旨を強調する。こつゆうところは至って狭量な俺である。

「わかってますって。あたし、ジュンのおうちに足を向けて寝られません」

即座に俺の思惑を察知すると、心地よい言葉で返してくる。きっと小説の行間を読むのにも長けているのだろう。

「えっと、君んちのベッドは……はなっから、足は反対方向じゃないか」

ある考えが浮かび、俺はどうでもいい抗議を口にした。

「ものの例えでしょう。細かいことをいう男は嫌われるのよ」

「嫌いになるのか？自殺しちゃうぞ」

俺は、いつかの告白で聞いた台詞をアレンジし、何度となく口にするようになっていた。勿論、自殺どころか殺されても死ぬつもりはなかったが、その意図を理解した紗江子の瞳が光る。

「うん、嫌い」

サツと周囲を見回してから、俺にキスをしてくれる。こつゆう流れになっていたからだ。途端に俺の目尻がだらしなくなれた下がる。どこに行っても、対座しない理由はこれにあった。もっとも、その都度、店員には不思議そうな顔をされたのだが。

「ねえ、調査って、ただじゃないんでしょ？ あたしが払うわ。」

何から何まであなたのお世話になつてばかりじゃいられないもの」

「大山には色々、貸しもあるからな。友人割引で交通費程度の請求になるんじゃないかな。気にすることは無い。それより、君の過去と、市議の自殺がカジさんの中で繋がった可能性もある。だとしたら謝らないといけない。ただ、カジさんは調査員の見本みたいな人だ。口にしていいことと悪いことは、よく心得ている。きつと大山にすら明かさないと思う」

報告書と共に届いた雑費込み九万六千円也の請求は、次女の進学を控えた俺にとって痛かったが、頼んだ甲斐は充分過ぎるほどにあつた。

「九年も前の話よ、もういいの。だから、あなたもそんなこと気にしないで」

「うん、そう言つてもらつと気が休まる」

「祐ちゃんは雇つてもらえそうなの？」

「当座は使いつ走りだろつけどね」

「そつかあ、良かったわ」

祐二の件も、そして、おそらくもやもやしたものが残つていたら、九年前の一件に決着がついた紗江子が明るい表情を見せる。？<sup>くたく</sup> 屈託のない？とは、こんな様をいうのだろう。

「君のお気に入りの中華だろ？ 食べてないじゃないか」  
取り分けた皿の料理が減つていない。

「うん、一時はどうなることかと思つた今朝の一件があんなふう  
に片付いちやつ……いいえ、ジュンが片付けてくれたのよね。それが食欲に反映されちやつたみたい。ランチを食べすぎちやつたのよ。  
それに今……」

「ん？」

「きちやつたみたい。ごめんね。今夜はナシ」

紗江子はペロリと舌を出して洗面所に立つた。

ちえつ、窮地を救つたヒーローへの熱烈なお礼を期待していた俺は舌うちをする。

『ハザード三回が愛してるのサイン』誰だかの歌をもじって、俺達はストップランプ三回を、愛してるのサインにしていた。

紗江子の軽自動車のランプが赤く三回光って発進する。俺はルーミミラー越しの彼女にパールホワイトの車体が見えなくなるまで手を振り続けた。

「どうだい？」

「うん、美味しい。あたし、あまり味が濃いのは苦手なんだけど、これは、しつこくなくてコクがあるわ。ここがジユンのラーメンランキング一位のお店なのね」

「そうだな。関西にもう一軒あったけど、味が落ちちゃったりメニューが変わったりしたから、ずっと同じここが一番だ」

俺と紗江子は、お互いの美味いものランキングを食べ歩こうと決め、デートの毎に、あちこちの食べ物屋巡りをしていた。この日は俺の奨めるラーメン屋に来ている。

「もう、随分、回ったわよね。お寿司でしょ、パスタでしょ、うどん屋さんも行ったっけ。あ、あたしお奨めの中華はどうだった？」

「美味かったよ。でも、麻婆豆腐に限っていうなら、他にも美味しい店が二軒あったんだ。片方は潰れて片方は味が落ちちゃったけどね」

「同じ味を保つだけでも大変だったことね。継続は力なりか」

紗江子が無言を思いついたような顔になる。

「ねえ、大山さんのお店のコーヒーは日本で二番に美味しいって言ったでしょう。一番はどこなの？」

ああ、やっぱり聞くか。大山の店へ連れて行った時に、そう言ってしまったことを後悔した。

「そんなこと言ったっけ？」

とぼけて時間稼ぎをする。上手い言い訳よ、俺の頭に舞い降りる。「言っただよ。あたしちゃんと覚えてるもの」

「ひよつとして、あそこのことを言ったのかも知れないな。遠いんだよ、そこは。それに教えれば、連れてゆけっつていうだろ？」

「そりゃあ、言うわよ。どこ？ 関西？ テーマパークに行くときなら寄れそうね」

紗江子は引き下がらない。上手い言い訳は舞い降りず、これといった閃きもないままに俺の説明は回りくどくなつてゆく。

「あのさ、紗江子は誰かとの思い出で、これだけは誰にも教ええず、残しておきたいってことはないのかな？」

「食べ物で？　ないわよ」

「食べ物じゃなくつてもいいんだよ。例えば誰かとの思い出の場所とか、プレゼントされたものとか」

話せば話すほどに、俺の意図とは逆の方向へ向かつてゆく気がした。

「ないなあ、あたしはジュンに秘密なんかないんだもの」

「秘密って訳じゃないんだ。なんて言ったらいいのかなあ……」

上手く伝えられない歯痒<sup>はがゆ</sup>さと、危険水域に流されてゆきそうな気配に、俺は気が気ではない。

「ナオコさんの思い出なの？」

え？　なんでわかるんだ。図星を指された俺はドキッとしたが、関西を否定しなかった時点で、紗江子なりの結論に辿りついていたようだった。

「え？　うん、まあ……」仕方がない。話すとするか。

「永遠を誓ったともなれば、それなりに譲<sup>ゆず</sup>れないものとか守って行かなきゃなんないものが、あるんだよ。それが、そのコーヒーなんだ。でも、いいじゃないか。これから俺達のナンバーワンコーヒーを探そうよ。そこ以外ならどこへでも連れてゆくし、何でも食べさせてあげるから」

九年も付き合っていれば、どこへ行くこうと何を食べようと、どんな映画を観ようと尚子との思い出はフラッシュバックされる。紗江子には言えなかったが、その記憶は愛し合ってる最中ですら現れるのだ。

或るホテルで、或る条件を満たした宿泊でしか味わうことが出来ない、そんなコーヒーなら、元カノ用にとっておけると思っていたのだ。

「じゃあ、ナオコさんが結婚なさったとしてもジュンの誓いは終わらない訳？」

「なんで、そうなるんだよ　話の飛躍に、俺しうんざりとするが、苛立ちを気付かれないよう注意して答える。」

「どこで何をしているか分からない彼女が、結婚しようが、どうしようが俺に知る術はないよ」

「手紙は？　お家だつて知ってるんでしょ？」

「定期的に『結婚なさいましたか？』って、手紙でも送れつつのか？　『俺の影さえ感じたくない』って言われてるんだぞ。風の便りでも期待するしかないじゃないか」

「影さえ感じたくない人のブログは読まないわ」

あの件か　俺の日記みたいなブログを読んだ尚子からクレームがついた件を、紗江子に話したことがあった。己の軽率さを後悔した。

エキサイトしかけた彼女に調子を合わせるのは得策ではないと考え、解き聞かすように話した。

「あのさ、永遠に期限なんかないだろう。だとすれば、今はまだその途中なんだ。俺は誰かとの最期の約束だけは守ると決めている。死んだ親父にはこう言われた。『嘘をつくならつき通せ。それが出来なきゃ、嘘を本当にしろ』そして彼女には『永遠に愛してます』って誓ったんだ。お陰で女房と貯金通帳は消え、責任を果たすべき尚子は去りの、このありさまだ。いいじゃないか、今は君とこうなれているんだし」

「何だか、面白くない」

紗江子が口を尖らせる。面白いも面白くないも、君が話をおかしな方向にねじ曲げたんだ。『永久に二番目がいい』そうも言ったろ？　そんな文句の一つも言ってやりたかったが、生理のせいなのだろう。夕方待ち合わせた時から、彼女はあまり機嫌が良くない。こいつった場合は、触らぬ神に祟りなしの対応で臨むべきである。俺は長年の経験から、そう理解していた。

ラーメン屋のカウンター席です話ではない。そういつて話しを切り上げにかかる。紗江子の隣に座った五十年配のおっさんが、好奇心の虜（こころ）になったように聞き耳を立ててもいたし、彼女の追及に息苦しさを感じていたのだ。

「この大雪だ、今夜はもう解散にしよう。送るよ」  
紗江子は何も言わないで席を立った。

「めんどくせえ女だな」  
俺は小声で呟く。車のルームランプに照らし出された紗江子の瞳が濡れているようにも見えたが、知らぬ顔を決め込んだ。

ラーメン屋での一件以来、役所で交わす挨拶のみで、紗江子とはなんの連絡もとりにあつてなかった。

『この前は、ごめんなさい。お話ししたいことがあります。今夜、二十時、大山さんのお店で逢えませんか』

依然、設計の現場に戻る見込みはなく、総務課のデスクで髀肉ひにく之嘆のたんをかこう俺にそんなメールが届いたのは、それから四日ぶりのことだった。行く旨だけの短いメールを返し、残業はできないからと女子社員に伝える。

「あ、係長つたらデートなんだ」

彼女は大笑に手を叩く。俺のデートで、なんで君がそんな嬉しそうな顔をするんだ。それに、その日本語も変だぞ。そう思ったが口にはせず、曖昧に手を振ってみせる。仲直り出来てないままのデートは、幾らか気も重い。

俺が大山の店に着いたのは約束の時間より十分ほど早かったはずだ。店のドアに手を掛けて、ふと思ひ出し、興信所のオフィスを覗く。晴れて採用なった加藤祐二がカジさんと机を挟んで座っていた。広げられたファイルを見入っている様子は研修中といったところか。髪は黒く戻している。軽くドアを叩き、こちらに気づいた二人に手を上げる。カジさんが会釈を寄越し、祐二は満面の笑みを向けてくる。苦悩から解き放たれた人間の表情は明るい。

紗江子は既に店内に居た。いつもの席でコーヒークップを弄もてあそびながら大山と何か話している。正面に座っていた大山が俺のために席を空けるが、隣のテーブルに移動しただけで「すまんな、助かるよ」と俺に告げる。何のことだ？

「食事は済ませたのかい？」

疑問を振り払い、早恵子に訊ねる。長女がバイト先から持ち帰ったトンカツの誘惑に負け、二切れほど頬張ほおほってきた俺に空腹感はない

い。

「ええ、食べてきたわ。ここでの用件が済んだら場所を変えたいの。あなたにとつて不愉快なお話になるかも知れないから」

意味深だな。何を話すつもりなんだ？ 表情から彼女の真意は掴めない。

「じゃあ、俺もコーヒーを」「あいよ」

俺達の微妙な雰囲気を感じ取ったのか、大山に普段の軽薄さはない。大股で厨房に戻って行った。

「先ず、これを収めて下さい」

紗江子が白い封筒をバッグから取り出して俺の前に置く。

「なんだい、これは」

「十万円入っています。調査費用よ」

さっきの礼はこのことだったのか。「おい」俺は、大山に向かって声を荒げる。調査の内容も費用も依頼主以外には明かさないのがルールだろう。コーヒーを運んできたウエイトレスが俺の怒気に驚いてトレイを揺らす。

「どうしたんだ？」

慌てて大山が厨房から出てきた。

「大山さんは悪くないわ。あたしが、後でジュンが支払いにくる。そう言つて金額を確かめたの。そうですよね？」

「うん、まあ……いけなかったのか？」

事情が呑み込めない大山を責める筋合いあじすではなかった。

「とにかく、これは受け取れない。俺が勝手にやったことなんだし、父親でボディガードなら当然だろう」

「あたしが話したいのはそのことなの。出ましょ」

紗江子の前に押し戻した封筒を手にすることなく、そのままに席を立つ。俺はコーヒーに口もつけていなかった。

「俺のせいか？」

紗江子の後を追う俺に、大山が心配そうに声を掛けてくる。

「いや、アレだろう。来週には治ってるさ」

女性特有の不機嫌を匂わせ。店のドアを抜けた。

「君の車は？」

「この雪よ。タクシーで来たわ」

紗栄子は俺を見ずに、そう答える。

「場所を変えるっていつても、どこがいい？」

「静かなところなら、どこでも お任せします」

十分ほど車を走らせ川べりある公園の駐車場に車を停める。最近よく見かけるドッグランが併設された広い公園だ。今朝まで降り続いた雪が積もる駐車場に、車影しやえいはない。俺の乗ったクロカン4WDでもなければ身動きがとれなくなってしまうほどの積雪だった。余程の物好きでもない限り、こんな所に車を乗り入れることもないだろう。？静かなところ？その条件は充分満たしている。

？贈り物？調査費用がそれにあたるかどうかは分からないが、それを突き返してくるような場合はたいい別れ話になる。しかし、何が気に入らないんだ？ 春先になると幾度となく別れを申し出てきた元カノを思い出した。だが、今はまだ冬だ。悪い病気（浮気）も出てない。俺は紗江子の不機嫌に全く思い当たる節がなかった。

「あなたにとって、あたしはなんなの？」

フロントガラス越しに川面を見つめたまま紗江子が言う。声が尖っていた。

「言つたる？ 俺は、君の恋人であり父親でありボディガードだつて。何が気に入らないんだ？ 言ってくれなきゃ、分かんないじゃないか」

釣られて俺も少々喧嘩腰になる。

「そう、あなたはいつも助けてくれるし、護ってくれる。職場での一件もそうよね。普通、あんな状況になれば、誰もだつて、あたしを見捨てるわ。そうしないあなたに誰よりも大切にしてもらえてるって感じられる」

それのどこが悪いんだ？ 俺が反論を口にする前に紗江子の言葉

が続く。

「でも、あたしは、あなたに何ひとつしてあげられない。分かってる？ あなたの瞳から哀しみの色が消えていないことを。恋愛はイーブンでなきゃいけない。そう言ったのはあなたでしょう。ジユンの目はあたしを見つめていても、その視線は、いつもどこか遠くを見ているの。それがナオコさんなのか悦子さんなのか、それとも他の誰かなのかは分からない。いいえ、そんなことはどうでもいいの。どんなに、にこやかに笑っていても、あなたの瞳には哀しみがある。それをどうにもしてあげられないことが、あたしにはもどかしくて仕方がないの」

紗江子の口調は激しかったが、予期した別れ話ではなかった。俺は安堵しながらも当惑する。そこまで言われる俺は、一体どんな目をしているんだろう？ 疑問をそのまま口にしてみた。

「哀しみの色とか言われても俺に心当たりはないよ。ただ、俺にだって悩みぐらいはある。思いつくことと言えば、それぐらいなんだけど……」

「どれよ？」

いや、どれって物じゃないんだから

「これは誰にも話したことがない。と、いうよりも尚子と別れて初めて気づいたことなんだ。俺が誰かにする親切は君が想像するようなもんじゃない。分かりにくいかも知れないけど、バタフライエフェクトを期待しているんだ」

「小さな要素の組み合わせでも未来に大きな影響を与えるってアレ？ それがあなたの行動とどう関係があるの？」

カオス理論まで知っていたか さすが読書家だ。

「願いを叶えてあげられなかった尚子に、夫としての務めを果たせなかった悦子に、この世に迎え入れてあげられなかった命に、謝罪したくてもどこに居るのか分からない、人生の回り道をさせてしまったたくさんの人達に、俺のお節介が形を変えて届けばいい。そう思っている。罪悪感だよ。君の言う哀しみってのは、それなのか

も知れない」

「全ての困っている人を助けてたら、自分の生活を失ってしまっ  
つて言ったのはあなたじゃない。そんなことが出来ると思ってるの  
なら傲慢よ」

「傲慢か、とりようによれば、そうなるんだろうな。ただ、俺の  
場合は違う。気が小さいだけだ。俺のせいで誰かが不幸になってい  
るかも知れないって考えると罪悪感に<sup>おしつぶ</sup>圧潰されそうになる。その強  
迫観念が、ああさせてるんだよ」

そう話す俺を見つめていた紗江子が、視線を逸らせて考え込むよ  
うに黙り込んだ。単なるジェラシーだったのか、それとも今の告白  
に、俺という人間の底が見えてがっかりしたのか、盗み見る表情だ  
けでは、判断できない。

「バカね」

暫くして、ふつと笑うように発した言葉から、刺々《とげとげ》  
しさは消えていた。折<sup>お</sup>りからの月明かりに映し出された表情も和<sup>やわ</sup>  
いでいるように見える。

「うん、よく言われる。嫌いになったか？ 自殺しちゃうぞ」

調子に乗る俺に、彼女は小さく笑ったが、キスはしてくれなかつ  
た。

「分かったわ、気長に待ちましょう。でも、あなたの瞳から哀し  
みを消し去るのはあたしの役目。それは忘れないでね」

「浮気はしない」

「そんなこと言っていないじゃない。するつもりなの？ そう言え  
ば、さっきのウェイトレスさんを見る目が怪しかったわ」

「おいおい、言いがかりだよ」

「冗談よ」

ホツとさせては、また慌てさせる。女性はこういった駆け引きが  
非常に巧みである。

「じゃあ、これは収めてくれるね」

封筒を差し出す。紗江子はそれを手にしかけて止めた。

「条件があるわ」

「条件？」まだ、俺を振り回すつもりか

「セックスしましょう」

へ？ その昔流行ったトレンドイドラマのような台詞に多少面食らったが、俺に異存などあるはずはない。しかし、封筒をヒラヒラさせながら、ふざけて訊いてみる。

「俺は、これで君を買うのか？」

「バカね、そんなんじゃないわよ。あたしが誘ったんだから、ホテル代はここから出すの。それが条件よ。正直に言います。あたし、ずっとセックスが苦手だったの」

初体験が、あれだったのだから無理もない。俺は黙って顎を引き、次の言葉を待った。

「でも、この前いったでしょ？ 死んじゃうかと思っただって。これが本当に愛し合えてるってことなんだ。恋人同士なら、こんな感覚を共有することができると思えた。とても幸せだったわ」  
紗江子の瞳にはある期待を感じ取れた。

「頑張るよ」

「あれ以上、頑張られたら本当に死んじゃうわよ。普通でいいの。ねえ、あなた本当に四十歳なの？」

言葉面は非難めいていても、これは賛辞である。俺に尻尾があれば間違いなくブルンブルンと振っていたはずだ。

しかし、である。

元カノとの別れを嘆き悲しんでいた昨年ならともかく、今の俺の瞳に哀しみなんて、あるはずはない。少なくともルームミラーに映る俺の目は、次なる出来事を期待して能天気な灯りを宿すのみ。まりもっこりという栄養ドリンクに描かれたキャラクターみたいな目になっていた。分かりやすくいえば細めの下弦の月が二つ並んだようなものだ。

紗江子の巧みな誘導で、思わぬ告白までさせられてしまったが、自分の不機嫌から険悪になった仲をなんとかしよう。そんな彼女の

小芝居こしばいにのせられてまったような気がしてならなかった。実は俺はこんな手に何度もひっかかっている。

ホテルに向かう車の中で紗江せあ子が言った。

「お節介せつかいで思いましたことがあるわ。ジュンが一番初めにあたしに言った言葉覚えてる？」

「朝の挨拶以外でかい？ 覚えてないなあ 苦情かな？」

前に述べた通り、特に意識をしていなかった彼女にどんな言葉をかけたかは記憶がない。

「ううん、あたしはハッキリ覚えてる。『余計なお世話かも知れないが言っておく。君はきれいなんだから、もつと胸を張って歩くべきだ。見ていて姿勢の悪さが気になった』 あなたは、そう言ったのよ」

「あー、言ったかも知れないな。ごめん、その時は足のことを知らなくて」

俺は自分の短慮たんりょを恥じる。

「違うの、きれいだなんて言われたことのなかったあたしは、驚いたのもあるけど、それを怒ったように話すあなたが、とてもおかしかったの」

「君はきれいだよ。それは俺だけじゃなく誰もが思っているはずだ。軽薄だと思われたりするのが嫌で、それを口にしないだけさ。照れもあるだろう。俺は言いたいと思ったら、我慢出来ずに口に出してしまう。良かれと思っただけの言葉が、誰かを傷つけていることもあるだろう。注意するよ」

「うん、他の人には、きれいって、いつちやだめ」

そっちかいっ！

「努力する」

自信はなかった。

満天の星空を仰ぎ見て 春の桜並木を眺めて、誰もが躊躇ためらうことなく『きれいだ』と口にする。人はもつと素直に感情を表現しても良いのではないだろうか。俺はそんなことを考えていた。



「もう、だめ。手にも足にも力が入らない。あんな感覚、初めてだったわ。体がふわーっと浮き上がる感じがして無重力みたいに落ちて行くの。あたし、どうなっちゃったのかしら」

弛緩しかんした体を横たえたまま、紗江子の白い背中は大大きく波打っていた。

「ああ。落ちる、落ちるって叫んでたね。隣の部屋まで聞こえそうでひやひやしたよ」

「え、そんなだった？」

「冗談だよ。でも、職場じゃあ聞けないポリウムとトーンだったな」

俺はニヤニヤして耳を塞ぐふりをする。

「ばかあ」

振り上げる手にも勢いが無い。前回は確証がなかったが、この夜、彼女は間違いなく大人の女性になった。

「ねえ」

「なんだい？」

「あたし、ジュンが居なくなったらすごく困るわ。今みたいに雪の多い季節だと部屋に閉じこもって本ばかり読んでいたのに、今はどこへでも連れていってもらえる。バイクにも乗せて欲しい。美術館にも行ってみたい。パソコンも教わりたい。勿論、こうして、もっと愛されたい。ラーメン屋さんで尚子さんのことをしつこく聞いたのも、そのせいなの。今の幸せが、あなたと一緒に消えちゃいそうに思えて」

困る。か……もう少し気の利いた表現を思いつかないものか。

「尚子にとつて、俺は過去の亡霊に過ぎない。君が心配するようなことは起きないさ。もし俺が彼女に逢う日が来るとすれば、それは約束した地球最後の日だ。その時は、君も一緒に連れてゆく」

「本当？」

「ああ、だから心配するなって。ただ、もう少し情熱的な言い方はないものかな。あなたが居ないと生きて行けないだとかさ」

俺は先ほど感じた不満を口にする。

「だって、本当にそう思ったんだもの。あなたが居なくなったらどうしよう、すごく困るって。いけない？ 言い直した方がいい？」

「いや、その必要はない。俺も同じ気持だよ。俺を必要としてくれる誰かが居ないと困る。それが君であることが嬉しいと思ってる」

「不思議ね。ほんの数年前までは生きてゆくだけで必死だったあたしの人生が、とても豊かになったように感じられるわ。全てが新鮮で、やりたいことも行きたいところもいっぱい増えた。あたしね、短い期間だったけど、交際した人が居たの。でも、こんな気持にはならなかった。もう、ジョンから離れられないかも」

恋愛の魔力に魅<sup>み</sup>せられると、誰もがこうなる。人生に於いて、俺が求め続けていたものは地位でも名誉でもない。ただ、理想の恋愛だった。

「離れなきゃいいさ。おふくろは君を気に入ってるし、娘達だっていつかは嫁に行く。結婚しなくなつて、一緒に居られる方法は、きつとある。お母さんの世話なら、こつちですればいい。あ、会社の後輩で、両親の果樹園を継ぐために実家のN市に帰った奴がいるんだ。Kって町を知ってるかい？」

しかし、こんな場面ですら結婚を肯定<sup>うづめ</sup>する言葉は、俺の口から出てこない。

「あたしの生家から二十分ぐらいのところだわ。そこがどうかした？」

「ご両親が手を広げすぎて面倒が見切れない。山を安く譲るからやらないかって言われたことがあるんだ。俺には肉体労働の方が向いているのかも知れない」

右手を曲げて力コブを誇<sup>こぶ</sup>示<sup>こ</sup>する。

「肉体労働って言えば ジョンってスポーツジムでも通っていい

るの?」

「どうして?」

「あたしの職場の四十代で、あなたみたいな人は居ないんですもの。お腹がぼっこり出ているか、線の細い神経質な感じの人ばかり。庁舎の雪掻きをしてた時だって、五分もしたら息を切らしていらしたわ。君の方が若いんだからって、女子職員まで駆り出されたのよ。でも、ジューンはこんなに逞しい」

「君の要求は厳しいからな。俺は、ちゃんと応えられてたかい?」  
この時の俺の顔は見たくない。エロオヤジ、きつと、そんな表現がぴったりだったろう。

「知らないっ」

何度か体を重ね合った二人だったが、今でも紗江子は耳を赤くして恥ずかしがる。愛おしさがこみ上げる瞬間だ。

「仕事も不規則だし、ジムに通う時間はないよ。畳一畳あれば出来る筋トレを日課にしているだけさ。今更、何をする訳でもないからな。体形の維持と、恥ずかしながら四十肩の予防ってところかな」

「あ、ごめんなさい。今夜はお仕事大丈夫だったの?」

紗栄子は急な呼び出しを気にしたようだ。

「君の招集は拒めない。なんせ俺はランプの精なんだから」

最近、読んだ本の一節だった。そのフレーズをいつか使ってやろうと思っただけで、その機会が到来したので嬉しくなる。なんて単純な男なのだろう、俺ってヤツは。

「恋人で、父親でボディガードでランプの精か 忙しいわね。」

でも、筋トレだけで誰もがこんなふうになるものなの?」

「どうかな。骨格の形成は、ほぼ成人までに終わってしまうっていうからね。脂肪ならいくらでもつくだろうけど、筋肉となると、骨格の要求する以上は無理かも知れないな。学業を頑張った連中には学ぶための基礎が出来るだろう。勉強の苦手な俺は、こつちを鍛えるしかなかったんだよ」

「そうかなあ、あなたは英語も話すし、何だか複雑な計算式が書

かれた書類でお仕事しているじゃない。あたしから見れば何でも知  
っているように思えるわ」

「あれか」

英会話スクールに通った経験はない。テレビの英会話入門と、映  
画の英語字幕から学んだ俺の英語は、かなり怪しい。だから、それ  
を褒められると気恥ずかしくなってしまう。

「あれが通じる俺が不思議に思ってるよ。一度、傍で聞いてみて  
みる。それはひどいブロークンなんだから。会話するのは、伝えよう  
とする意志が、それを成立させるんだ。君も勇気を出して話しかけ  
てみるといい。そんなふうに、生きてゆく上で必要な知恵は誰だっ  
て知らないうちに身につけてゆくものさ。俺のそれが君より、えっ  
と」

俺は引き算をしていた。

「十四年分多いだけだ」

「暗算は苦手みたいね」

紗江子が嘖き出した。違いない。関数電卓かんすうでんたくに頼り過ぎた俺の暗算  
能力は小学生以下になっていたことだろう。

「土曜日は、美術館に行こう。三尾公三展みつおみつねをやっているって聞い  
たんだ。少し仕事が溜たまっているから、ランプの精は週末までお休  
みだ。面倒を起こしてくれるなよ」

「はあい、気をつけまーす」

おどけて拳手きょしゅをする紗江子だった。脱力感だつりょくかんは去ったようだ。

「ねえ、もう帰らないといけない？ 祥子しょうこさん達が心配？」

「いや、彼女達は俺が居ない方がのびのびとしているらしい。下手  
すると、もう戸締りかじりされちゃったかもな。どうして、そんなことを  
訊きくんない？」

饒舌じょうぜつだった紗江子が急に口ごもる。

「週末まで逢えないんでしょう。だったら……」  
「だったら、なんざましょ？」

意図を理解した俺は、ニンマリとして聞き返す。

「いじわるっ」

彼女が抱きついてきた。そして、それまでの会話が、俺に元気を取り戻していてくれた。脳内に第三ラウンドのゴングが鳴り響く。

## 番外編

紗江子は美しい。そして自分ではひねくれてると言うが、今時、こんな純粹な魂を持った二十六歳も稀有である。 「外人さんの顔は区別出来ない」との笑える理由で、洋画が苦手である旨を訴える彼女であったため、一緒にシアターに行けないのは残念だったが、小説の話題では盛り上げられるので特にそれが不満とはなっていない。

しかし、親しくなり過ぎると踏み込んではいけないラインをズケズケと乗り越えてくるようになる。これが妻ともなれば……男女の間には適切な距離感が必要ではないかと思う。俺が結婚というシステムを毛嫌いするのはこれが理由だ。何も紗江子を愛してない訳ではない。ただ、愛してるイコール結婚に結びつかないだけだ。

断っておくが、これは自己正当化のための言い訳ではない。この社会における俺の倫理観りんりがんというものが著しく歪ゆがんでいるのは充分に理解している。多くの女性 いや、マイホームパパを自認される男性諸氏におかれても、俺の考えに異いを唱となえる方々は少なくないであろう。

それを承知の上で、俺の結婚観を語る。

結婚した男女は、木々よりもがれた果実である。収穫されて暫しばしくは瑞々《みずみず》しくもあり、美味びみでもある。しかし、その後は、しなびて傷いたむのを待つのみ。そんな果実に手を伸ばし口に運ぼうとする物好きが多かるうはずはない。セックスストレスの夫婦が四十パーセントを越え、今尚、増加傾向ぞうかけいこうにあることが、それを顕著けんちやくに物語っている。

女性にとって妻の座は勝ち取ったものなのであるが、それに胡あ坐ひくをかかされると、途端にスカートは履かなくなるし、ショーツの面積と体重は増えてゆく。そんな姿に、男は結婚を悔やみ始めるのだ。

考えてみるといい、深く愛した女性が、目の前でそれ以外のものに  
変貌へんぼうを遂とげて行くのだ。悲劇以外のなにものでもない。

また、その座を必死に守ろうとする言動を見聞きするに至り、男  
は同様の反応を示す。では、どうすれば良いのか？ 生活や子育て  
に追われる毎日で、そんな事に気を回していられるはずなどないで  
はないか、といった反論が聞こえてくる。

おっしゃる通りだ。しかし、そんな正当な主張すら通じない。男  
とは 小野木淳一は、そんな生き物なのである。

結婚について、こんな発言された女性が居た。

「年度更新性ねんごうしんせいにすればいいのよ。契約制にしておけば、お互いの  
情熱が冷めたところで、泥仕合どろあひあひになることなくスッキリと別れられ  
るでしょ？」

妙案みょうあんであると思う。しかし、当の御本人は、ご自身の放言ほうげんなど、  
すっかりお忘れになっておられたようで「あたしの理想はうちの両  
親のたま（平和な結婚生活を三十数年お続けになっておられる）よ」と、  
曰いわっておられた。

しかし、別れた女性の全てに負い目を感じている俺では、それを  
非難できる由もなく「左様でございますか、御高説賜りました」と、  
頷うなづくしかかったのは言うに及ばないだろう。

脱線した。

この社会の存在理由が、子供を守り育ててゆくことであるうこと  
には異論いろんはない。しかし、そうやって保護される遺伝子も、後に強  
姦うかんま魔まとなったり殺人鬼となったりする劣性れっせいなるものは、法の名にお  
いて抹殺まっさつされる。やはり法律など、国家の都合であり道具に過ぎな  
いのだろう。『道德とは便宜の異名である』かの、芥川龍之介先生  
もこうおっしゃっておられた。

多くの貧困を生みださないために、一夫一婦制いつぶいつぶせいが重要な役割を果

たしていたことに疑いはないが、それにも限界がきているのだ。

変化は必要なのである。『安定志向が人も組織も腐らせる』と、かのニーチェ殿も語っておられる。

都合よく解釈がなされる憲法も不可侵ではなくなってきた今、婚姻関係にのみ子孫の繁栄を依存するシステムが唯一無二であつてはいけないのではないか？ しかし、そのためには女性の経済的自立が必要となる。男女同権が謳われて久しいが、未だ社会における男女差別は未だ、なくなつてはいない。

そんな中での俺の提案は「何も分かつてない」と、お叱りを受けそう。しかし、苦勞して勝ち得たものにはそれに見合つた見返りもある。少なくとも夫からの肉体的・精神的暴力に耐え忍ぶ必要もなくなるだろうし、離婚後の養育費がきちんと振り込まれるかどうかにはビクビクすることもなくなるだろう。

男性の側に余程の金銭的余裕がある場合を除き、大抵は養育費の支払いなどグズグズになつてしまうものだ。別れ際に、筆り取れるだけ筆り取っておくことが肝要である。

新成人の意識調査で、こんな結果が出たと新聞にあつた。(2011年調べ)

【恋人はいない77%】

【結婚はしたい81%】

しかしながら、束縛されたくないから、恋愛に積極的にはなれない。TVゲームに費やす時間だけは確保しておきたいとでも言うのだろうか。

この年頃の俺と友人達は、こっちがダメならあっち、あっちに飽きたらそっちと、蜜蜂のごとく花々(女性達)の間を飛び回つたものである。そして、彼女達の気を惹くための洋服や車への飽くことなき欲望もあつた。恋人を積極的に求めず、特に欲しい物さえない若者の興味はどこに向いているのだろうか。社会の存在意義すら薄れ

つつあるように思える。

年老いて、死にゆく時に家族に看取って欲しい。

結婚の理由に、これを挙げられる方々も少なくないと聞く。しかし、死はいつでも我々の背後にあり、隙あらば襲いかかるうとしている。全ての人が自宅や病院のベッドで最期を《さいご》迎えられる保証はないのだ。それなのに不確かな未来に期待して夢を抱くのか？  
今を犠牲にしてまで。

しかし、俺は結婚をすべきではないと言ってるのではない。寧ろ、結婚なさい。そして後悔なさい。より多くの人々に俺と同じ苦しみを味わっていただきたいものだ。小野木淳一が言っていたことは、これだったのかと気付いていただけ、いくばくかの同士が居られれば幸いである。

「結婚しよう」

墮ろせなくなるまで妊娠を知らされずにいて結婚せざるをえなくなった元妻と、ごによごによ（口にするのも憚られる）だった元力ノを除き、俺は女性にその言葉を口にしたことはない。

「あたしは結婚したいとは思わない」

そんなことを言っておきながら、自身の賞味期限に気づかれると急に言葉を翻す女性を俺は多く見てきている。紗江子がそうならない事を祈るばかりである。

ところが……正に？ところが？な事件が起きてしまう。

「見たことあるわ、この絵」

一時期、写真週刊誌の表紙に使われていたのを、記憶に留めていたのだろう。紗江子が小声で囁く。

「エアブラシにアクリル画材を使うのが彼の特徴だね。確か版画もあつたはずだ。並べたキャンバスのサイズを変えたり折りたたんだりして3Dっぽく見せる技法は、描かれて何十年か経つた今でも新鮮だな」

「へえ、ジュンって絵画にも詳しいのね。やっぱり、知らないことがないみたいだわ」

彼女は感心したように俺の横顔を見つめている。

「蘇える刻？　そう書かれた作品の前で俺は腕組みをしている。」

実のところ、俺は絵画にはさっぱり興味がない。紗江子が行きたいと言った美術館の催しが、たまたま俺の知っている画家のものだったので誘ってみたにすぎない。解説は、昔、交際していた美大生の受け売りだった。お茶の一杯も供されないとこころに八百円の入館料を払って来ているのだ。その程度の役得は許されてもいいだろう。

ドガがどうのルノールがどうのと、さっぱり俺の頭に入っていない講釈を垂れる美大生について歩く絵画展は退屈の上なかつた。絵の前に立ち止まり、じつと眺めてる人々が何を考えているのかがさっぱり理解出来ない。俺にとつての絵画は、女性が描かれていれば「ああ女性だな。少し太っていないか？　俺の好みではない」そして風景が描かれていれば「ああ風車だな」と、その程度の感想しかもたらさない。

絵画に酔いしれているのではない。美大生の部屋にあつたルネ・マグリットの画集に落書きをして大喧嘩となり、それが原因で別れてしまったことをボンヤリと思っていた。その時は、なんて心の狭い女性だと思つたものだが、今、冷静になつて考えてみると、

九十五対五ぐらいで俺が悪かったような気がする。

これ以上、居るとボロが出る。そう判断した俺は、敷地内にあつたカフェに紗江子を誘う。三十分に満たない滞在に抗議が起きるかとも思ったが彼女は素直に従った。画にとりたてて興味があつた訳でもなかつたようだ。美術館という場所でアカデミックなデートを楽しみたかつただけかも知れない。

「凄いなあ、ジュンは。あたしなんかゴッホとかピカソぐらいしか知らないんだもの。それだって絵だけ見て分かる訳じゃないわ。」  
美術館の中庭にはオブジェやベンチが並ぶ。窓際のテーブルでそれを見下ろしながら、俺達は話していた。

イルカが印象的な絵がカフェの壁にかけられていた。俺は、それを指差して言う。

「ラッセンは知ってるだろ？ モチーフの特徴的な彼の作品なら、絵だけ見てたつて分かるはずさ」

これも、別の元カノに教わつた知識だ。かくも俺とゆう人間は姑息<sup>そく</sup>だ。そこに重厚感をもたせようとするのだから余計な苦勞する。

「ねえ、科学博物館もあるみたいよ。あたし、プラネタリウムに行つてみたい。小学校以来だわ」

「いいね、行こうか」

上映を待つ間の雑談が思わぬ方向に向かう。

「そういえば、あたしの星は見つけてくれたの？」

忘れていた。一時、インターネットで調べたのだが、うまく三つ並んだ星がなく、紗江子が去らないのだから、いいやと、ほったらかしにしていたのだ。

「居なくならないんだろ？ 君を直接、<sup>おが</sup> 拝むよ」

隣に肩を並べる紗江子に、俺は何を拝むつもりだったのだろう。

「そうじゃないの。尚子さんの星があつて、あたしがないなんて悔しいじゃない」

変なところで対抗意識を燃やす娘だ。上映中に彼女の希望を聞い

て、適当なのを選ぶとしよう。

席は、ほぼ埋ま<sup>う</sup>まっている。小学生のツアーが入っていたらしく暗闇のあちこちで黄色い声上がる。

「え？ 冬しか見えない星座があるんだ」

「当たり前じゃない。知らなかったの？ 地球は回ってるのよ」  
地球が回ってるのは知っていたが、季節によって見える星座が異なるなどという話は、ついぞ聞いたことがない。若しくは、聞いてはいても右から左の耳へと通り抜ける程度の興味しかなかったのだろう。美術館で上げたはずの俺の株は大暴落を起こしていた。

俺は急に忙しくなった。紗江子の星は勿論のこと、元カノ用の春と夏の星を見つけねばならない。星が瞬く天井へと目を凝らした。

「うまく、三つ並んでるのがないな。あ、六つでどうだ、ナカオサエコ」

「なんか、適当に選ばれてるみたいで、ムカつくんですけど」  
不機嫌そうな物言いだっただが、その通りかどうかは暗くて表情がよく分からない。

「そんなことないって あ、君の誕生日は？」

「七月七日。七夕よ」

ちょうど、夏の星座が映し出されていた。

「いいのが見つかった。織姫おりひめさんのベガだ。七夕生まれの紗江子にぴったりじゃないか。夏の大三角にも入ってるし、あれなら忘れない」

「忘れる？ 忘れるってなによ」

負い目を感じている時の俺は、あまり喋らない方がいいようだ。

「何が食べたい？ ここのところ、麺類めんるいが多かったから、ポリュームのあるもの shouldn't かな。焼肉はどうか」

美術館の地下駐車場で俺はそんな提案をした。焼肉が下品だとはいわないが、アカデミックな場所で話題にするのは少々気が引けてここに降りてくるまで、その単語を口にするのを我慢していたのだ。

「でも、あたし、あまり食べられないかもしれない。もともと小食だったせいかな、最近、たくさん食べると胃が痛くなっちゃうの」

「風邪でも引いたんじゃないのか？」

彼女の額ひたいに手を当てようとして思い直し、額を合わせる。紗栄子は少し驚いたような顔をしたが、そのまま唇を重ねても拒むことはない。

「熱はないでしょう？ 咳せきや喉のどの痛みもないの。きっと、ジューンと美味しいものばかり食べ歩いていたら胃がびっくりしちゃったのね」

にっこりして言葉を続ける。プラネタリウムでの不機嫌は直っていたようだ。

「風邪だったら、今のキスでうつっちゃったかも知れないわね」

「跳はね返かえしてやるさ」

まだ、元カノとのやりとりのクセが抜けない。こんな状況で必ずと言っていいほど口にした言葉が。つい出てしまう。

「あたし、こう見えて案外、丈夫じょうぶなのよ。ここ数年、風邪もひいてないし、毎年の健康診断でも何の異常も見つかってないわ」

紗栄子は、か細い腕を曲げてみせる。彼女の職場に定期的に列をなして停まっている検診バスが思いだされ、気になったことを訊いてみる。

「健康診断ってさあ、どこまで脱ぐのかな」

「？」

俺の問い掛けの意味が分からず、小首こくびを傾かしげた彼女だったが、気づいた途端、大きな声で笑う。

「バカね、お医者さんに妬やいてどうするのよ。女子職員は女医さんが診てくれるし、下着まではとらないわ」

さつきは、何でも知っているみたいだと言い、今度はバカという俺は一体、どう思われているのだろう。

「ねえ、妊娠ごんごんだったらどうする」

意味ありげな笑みと共に、安心した俺を再び緊張させるような台

詞を投げかける。この手法は女性全般が得意としているものなのか。え？ 一年で二人の女性を妊娠させちゃいましたか。勿論、これは声に出せない。しかし、芽生えた命を摘むような過ちは二度と犯さないと俺は決めていた。

「結婚すればいいさ」

「え？」

「君がお母さんの面倒をみなきゃなんないのは、まだ先の話しろ？ 子育ても、その頃には終わってるさ。だから、それを障害だと考えているとしたら、その必要はない」

母親の面倒をみるために結婚は出来ないと語っていた彼女の主張は穴だらけで、俺はいつかそれに気づいていた。

「どうしちゃったの？ あんなに結婚を嫌がっていたあなたが

」

「毎朝、あんな豪華な朝食が並ぶのも悪くないと思ってるね」

「あたしは家政婦代わり？」

口を尖らす紗江子だったが、機嫌を損ねた顔には見えない。

「明日は死んだ親父の一周忌なんだ。ほんの内輪だけの集まりにして、口うるさい親類は呼んでない。来ないか？ 姉貴や娘達に逢わせるよ」

悦子との離婚後、この先、二度と口にすることはないだろうと思っていたプロポーズの言葉が、俺から飛び出した。

紗江子も驚いたろうが、一番、驚いていたのは俺自身だった。彼女を守ってゆけるのは俺しか居ない。何の準備もなく突然飛び出したプロポーズだったが、後悔はなかった。

「付き合い始めて二ヶ月で、こんなこと言われたらびっくりするだろうな。男の俺に婚待期間はないけど、ゆっくり考えてくれればいいよ。俺には二十歳と十八歳の娘が居て、離婚の慰謝料に貯金も粗方持って行かれてる。新聞配達はさせないけど、人が羨むような立派な式は挙げられないと思う。世間一般でいうところの、薔薇色の新婚生活とは程遠いものになるのかも知れない」

先走つてはみたが、彼女にも相談すべき人々は居るだろう。話に聞く通りの母親なら、娘の結婚相手の経済状態や経歴、年齢にも難色しよくを示すに違いない。頭の中で自分の悪条件を指折りゆびおり数えてみる。勇み足いさあしを一步引いた。

「二ヶ月：あなたはそうでも、あたしは違うわ。ジュンのことを六年間ずっと見てきたんだもの。奥さんも恋人も居たあなたとこうなれたことですら信じられないのに」

奥さんも恋人もか……確かにそうだったのだが、改めて言われると歪ゆがんだ倫理観りんりかんが浮き彫ぼりにされるようで、複雑な気分になる。心を入れ替えますと、声に出さずに誓った。

「水野さんにね、ジュンと付き合いたいなら結婚できないつもりでいろつて言われていたの。母の面倒なんかどうでもいい。あたしは、あなたと一緒に居たいです。新聞配達だつて何だつてします。あたしをお嫁さんにして下さい」

紗江子の瞳から大粒の涙が流れ落ち、顎先あごさきで光る。

させないつてば、新聞配達なんか。泣き笑いの顔で俺の胸に倒れ込む彼女を抱きとめ、今まで何度、彼女の涙を流させたかを数えていた。今日は数えることが多い日だ。

「法要ほうようは三時からで、会食は五時だぜ。そんなに早く来たってしようがないよ。娘達にまだ君のことを話してないんだ。彼女達の反応次第じゃあ、今日は紹介できないかも知れないって言っただろう？」

正直なところ、年頃の娘達に、紗江子の件を告げるのは気が重かった。

「あのお部屋で二晩も泊めてもらったのに、掃除もしてないわ。それに法要の間は留守になるんでしょ？ 物騒ぶっそうじゃない、あたしが留守番してあげる」

「取られるものなんか何も無いよ。それに昨夜もお腹が痛いとか言ってたじゃないか。休日診療医を調べて行ってこいよ」

「明日、有給をとってあるの。ちゃんと医者様に行くわよ。だから、今日はお掃除をさせてちょうだい」

紗江子は引き下がらない。遅かれ早かれ娘達に逢わせない訳にはゆかないのだ。手っ取り早く済ませるか。俺は腹を決めた。

「じゃあ、十分だけ待つてくれ。彼女達に話してみるから」  
さて、どうやって切りだしたものが。思案ふけに耽りながら母屋の裏口を開く。携帯電話は外で話す、それが我が家のルールだった。誰とだか携帯メールのやりとりをしていた次女の由里ゆりが居間で寝そべっている。長女の祥子はアルバイトに行っていた。

「ちよつと話があるんだけど、いいかな」

「うん、なに？」メール画面から目を離さずに由里は答える。回りくどくなると時間ばかりかかって、紗江子から催促たいんとしやくごうがきそうだが、単刀直入たんとうちよくごうに行こう。俺は腹をくくった。

「お父さんな、付き合ってる人が居るんだ」

「知ってる。お母さんから聞いている。中西さんと一緒のところまで働いてる人でしょう。それがなに？」

感慨を、これっぽっちも感じさせない平坦な口調で由里が答える。拒否反応への準備をしていた俺は少し調子が狂った。

中西女史は別れた妻の友人で、紗江子の職場の局存在の女性だった。たぶん、俺だけはやめておけと紗江子に忠告したのも彼女辺りであろう。女性同士を繋ぐネットワークの通信速度に驚く。

「それで、今日の会食に呼んであるんだけど、大丈夫かな？」

「大丈夫って何が？」

由里は、ようやく俺に目を向けた。

「つまり、お前達の叔母さんにも紹介するって意味だ。わかるか？ あたし達のお父さんを取らないで、とか言ったりはしないか」

次女は、きやはははと嬌声を上げて笑った。

「結婚してどこかへ行つちゃう訳でもないんでしょう？ 取るも取らないもないじゃん。それともあたし達にそんな風に古典的な娘を演じて欲しい訳？ あたし達が結婚したら、お父さんと、お婆ちゃんだけになつちゃうんだから、誰か居てくれた方が安心よ。でも、物好きな人も居るものね。子持ちのヒゲオヤジなんかと結婚しようっていうんだから。二十六歳なんでしょう。洋服の趣味が合うと共有できて助かるなあ。最近、デートファッションも行き詰まったんだ」

案ずるより生むが易しとは、このことだ。この娘は、俺の個人主義を見事に引き継いでいるようだ。トラブルを回避できそうな予感に安堵し、また、どこかさびしい気持ちにもなる。

「お父さんは、こう見えて、もてるんだぞ」

「はいはい。でも、それが原因でお母さんと別れたのを忘れないでね。キレイらしいわね。サエコさんだっけ？ じゃあ、お父さんはダルね。随分、顔の造りは違うけど」

あそこは離婚協議中じゃないか、縁起でもない。それに、こつちの紗江子は、ダルより俺の方がいいっていうに決まってる……はずだ。

「祥子も知ってるのかな？」

「毎晩、遅くにしか帰ってこないお父さんが知らないだけです。一日おきぐらいに、お母さんのところへも行ってるのよ、あたし達心配しなさんなって。かわいい娘を演じてあげるから。その代わり」

振動した携帯電話に目を戻し、掌てのひらだけ俺に向け差し出す。小遣いの要求か、ちやつかりしてやがる。札入れから抜き出した千円札を置くと、由里はそれを片目で眺め、もう一枚というかのように掌がおいでおいでをした。俺がガキの頃はその一枚が、一ヶ月分の小遣いだっただぞ。

「いいよ、おいで。でも掃除はしなくていい。今はおふくろと由里しか居ないからハンバーガーでも食べにいこう」

「お母様はフィッシュバーガーで、由里さんはチキンでしょ？あたしが買って行くわ。ジュンはいつものでいいのね。喪服は持ってないから、紺のワンピースでいいかしら」

電話口から紗江子の弾んだ声が返ってくる。いつものか。それまで私的な会話を交わしたことすらなかった二人が、こんな短い間でこうも分かり合えるものなのか。事細かな説明を必要としない会話は心地よい。俺に対する調査が徹底的に行われてきたのだろう。中尾興信所のスキルも侮あなごれない。ニュースソースは水野かな、ヤツはそんな紗江子のことを、これっぽっちも俺に伝えてこなかった。

「法要に出てもらおう訳じゃないし、そう畏かしこまる必要はないよ。急がなくていいから安全運転でな」

「わかってます」

年の離れた恋人には、娘を気遣うような気分になってしまう。

鮎屋あしやの座敷で行う会食の参加者は九名。我が家からは紗江子を含む五人。姉夫婦と三年前に離婚した妹、近くに住む叔母という顔ぶれであった。

「ジュンちゃん、ジュンちゃん、あの娘さんは誰ね？」

早速、きたか……姉達には手早く紹介したが、耳の遠い叔母には、再び同じ説明を繰り返さねばならない。話好き、詮索好きのこの御人を俺は苦手にしていた。

紗江子の両隣りには娘達が陣取り、笑い声が途切れることはない。姉と妹も幾度となく紗江子の前に移動しては話し込んでいるようで、彼女の周囲に人が居なくなることにはなかった。見飽きた顔ばかりの親族の集まりに、彼女の美貌が華を添えてくれたようだ。

「祥子の友達です。ちようど遊びに来ていたんで連れてきました」叔母には、こういった説明で充分である。結婚する予定の女性だなどと伝えた日には、数時間は質問攻めに遭っただろう。聞き取れた範囲の説明との相違に、しつこく質問を浴びせてきそうな気配の叔母に、気を利かせたおふくろが相手を買って出してくれて俺は解放された。

「彼女、二十六歳だった？ うまいことやったな。どこで知り合ったんだ？ 悦子さんは知ってるのか？ 式はいつ挙げるんだ」

ビール瓶を携えた義兄が俺の前に座る。一難去ってまた一難か、俺は少々うんざりしていた。

暇人は恋人同士の慣れ染めを必ず聞いてくるものだ、何かの本で呼んだ気がする。俺と紗江子のそれを説明するとなると、元カノの存在までさかのぼらねばならない。正直に全てを語る必要もないのだろうが、適当な作り話をでっちあげて、矛盾を指摘されるのも面倒だ。どんどん飲ませて前後不覚にしてやる。義兄が手にしたコップになみなみと焼酎を注ぐ。間違ってはいないが本質でもない答えで、お茶を濁す。

「はあ、彼女の同僚が悦子の友人みたいで、祥子達も、私が紹介するより前に知っていたみたいです」

義兄は某自動車メーカーのディーラーを経営していた。業界に長くはびこる不景気に業績は伸び悩んでいるらしいが、まるまると太った彼の体型は、そんな窮状を感じられない。

「まだ、彼女の親にも逢ってないんですよ。去年の騒動で貯金を

はたいてしまっていますし、式らしい式も挙げられるのかどうか…  
…これから相談して決めて行きます。今日は家族に逢わせるのが目的で連れてきました」

「そうか、しかしキレイな子だな。女優のAに似てる」

紗江子を初めて見た時の俺と同じ感想を口にする。酔いが回りはじめた義兄は最初の質問を忘れていた。

二時間程度の会食を終え、戻った我が家で紗江子が腹痛を訴えた。  
「大丈夫か？」

彼女が横たわるベッドの端に腰を下ろす。眉間に刻まれた皺の深さが、痛みの激しさを物語っていた。

「ごめんなさい。少し休めば楽になると思うわ。ジュンという通り、もっと早くお医者様へ行っておくべきだったわね」

そう言つて、また苦しげに表情を歪める。

「また、半日休暇をとつて、俺が病院に連れて行ってやるうか？でも、婦人科でいいのかな」

「そっちは行かない。もう、調べたの。出来てなかったみたいだわ。がっかりね。結婚もキャンセルされちゃうのかしら」

無理に笑顔をつくつて、そう答える。妊娠検査薬でも使ったのだろつ。

「元気な君なら、そうも言つてやりたいところだけど、そのせいで腹痛がひどくなったとか言われてもかなわない。今日のところは、こうしておくよ」

俺はチャックをするように口の前で手を横に引いた。

「腹痛サマサマね」

紗江子の額に滲む汗に、言葉ほど症状は軽くないと判断した。さして暖房も効かせすぎではないはずのハナレだった。

「泊まってゆかい？鎮痛剤なら置き薬があるし、明日は俺の役所行きに同乗して行けばいい」

「ううん、健康保険証も部屋だし、着替えも持ってきていないか

ら。今夜は帰ります。でも、車は置かせてもらっていいかしら。運転は無理みたいだからタクシーを――

急に激しく咳せきこんだかと思うと、シートが赤く染まる。吐血だった。頭を横に垂れ、動かなくなつた紗江子の肩に手を賭けて軽く揺するが反応がない。彼女は意識を失っていた。

「かかりつけはありますか？」

紗江子の容体を説明した俺に救急隊員が訊いてくる。頻繁ひんぱんに世話になりたくはないが、こんな状況では付近に点在している消防署はありがたい。救急車は数分で到着していた。

「いえ、聞いていません」

「では、G病院の緊急救命センターに搬送はんそうします。救急車には患者さんしか乗れませんので、付き添われる方は別の手段でいらして下さい。場所は分かりますか？」

親父を看取みとった病院名を告げられ、俺は小さく頷く。

「ええ、何か必要なものはありますか？」

ストレッツチャーに乗せられた紗江子の青白い顔から視線を外すことが出来なかった。

「御本人が確認出来るものがあれば、お預かりします。当面はそれだけで結構です。ただ、処置なぐさが長引いたり入院ともなれば着替えや日用品も必要になるでしょう。後は、病院でお尋ね下さい」

運転席では別の退院が無線で病院と連絡を取り合っているようだった。手短にそれだけを告げると、後部ドアを閉じて救急車を発進させた。

遠ざかるサイレンと回転灯を見送る俺に、それぞれの部屋に行っていたおふくろと娘達が出てきて、心配そうに肩を並べてくる。

「何か悪い物でもあったのかねえ。あたし達は何ともないのに」

「ここのところ、ずっとあんな調子だったって言っていた。食べ物のせいじゃないと思う。とにかく、俺は病院に入ってくる。後を頼むよ」

礼服のままだった俺は普段着に着替え病院に向かう。日曜日の夜で道路も空いており、五分とかならずに着くことができた。親父が入院していた時もそうだったが、ここの駐車場はいつも満車だ。放

置されたままで朽ち果てかけた車もある。病院の景観としては、よろしくないものだと言えよう。

夜間受付で紗江子の所在を訊ねる。三十歳前後だろうか、女性にしては低い声の看護師が顔を上げた。

「ご家族の方ですか？」

「え、ええ、婚約者です。何の病気なんでしょう？ 今はどんな具合ですか？」

「まだ、検査中ですので、何とも言えませんが、当直医が外科の先生なので、全ての検査を終えてもはつきりしたことは、お答えできないかも知れません。この時間ですし、今夜は泊っていただくことになりそうです。処置が終わりましたらお呼びしますので、こちらでお待ちになっていて下さい」

リノリウム張りの廊下のベンチに腰をおろし、持ってきた紗江子のバッグを覗いてみる。携帯電話と財布、ハンドタオル、マンシヨンの鍵、救急隊員に中身を渡して空になった免許証入れ、それに小さめの化粧ポーチが入っているだけだ。気がついたら保険証の在処を聞いておこう。連絡が必要なところは職場と実家か。

すべき事案が次々と頭をよぎる。しかし、紗江子の病状を把握できてない不安が、それらを心の隅へと追いやった。

搬送されて四時間ほど経つたろうか。ICU（集中治療室）と書かれた部屋に移された紗江子への面会が許された。ものものしい医療機器と集中治療の文字に病状を憂慮したが、名札に吉岡と書かれた看護師の「心配いりませんよ。満床でここしかベッドが空いていないからの措置です。ですが、入院となれば転院も考えておいて下さい。若い女性を廊下に寝かせておく訳にはゆきませんから」との言葉に胸を撫で下ろす。紗江子の着ていたワンピースは病衣に変わっていた。決して明るいとはいえない病室の灯りが、照らし出す顔の彩度も下げているように感じられた。

「点滴は痛み止めと栄養剤です。胃が荒れているようですから、喉が渴くようなら白湯を少しづつ飲むようにして下さい。給湯室は

あちらにあります」

それだけ告げると、看護師は部屋を出て行った。紗江子の細い手首には点滴のチューブが繋がれて、色白な彼女の二の腕は既にうっ血していた。空いた方の手を両手で包み込む。少し熱もあるようだ。「ごめんなさい。本当にジュンには迷惑をかけたっぱなしだわ。嫌になっちゃう。でも、もう大丈夫、すっかり痛みも引いたみたい。何だったのかしら」

どんな検査が行われたのかは分からないが。紗江子の声はかすれていた。

「迷惑だなんて思っちゃいけないよ。君のお陰で色んな経験が出来る楽しんでるくらいだ」

しきりに恐縮する彼女の負担を軽減すべく、俺は、そんな冗談を口にする。

「それと、まだ、検査の結果は出てないんだつてさ。当直医が専門の先生じゃないそうだよ。でも、血を吐いたんだから、痛みは引いても油断は禁物だ」

「あ……ごめんなさい。シーツを汚しちゃったわね」

「また、そんなことを気にする　君は謝り過ぎだ。俺の顔を見る度に、ごめんなさいって言っているぞ。そういうのが胃に穴をあけたのかも知れない。胃潰瘍いかいようの多くはストレスが原因だってゆうからな。もう少し悠然ゆうぜんと構えているよ」

「胃潰瘍なのかな？」

「いや、分からない。吐血から推測しただけだよ。でも、気を遣いすぎなのは間違いないな。俺なんか、こんなに気が小さくてもストレスとは無縁だ。少しは俺を真似てみる」

「おヒゲは無理だわ」

依然いぜん、声はかすれていたが、冗談を言える程度の元気は取り戻したようだった。

「検査の結果が出ないことには、どうしようもないけど、お母さんへの連絡はどうする？　君のバッグは持ってきたから、明日の朝

にでも電話しておいたらどうだい」

「うん、でも胃潰瘍程度じゃあ、連絡しても却って叱られるだけだわ。退院して、あなたを紹介する時に、こんなことがあったのよって、伝えればいいんじゃないかしら」

病状の如何いかにに関わらず、娘のそれを知らされて怒るような親にも呆れるが、喉元過ぎれば熱さ忘れる的発言が引っかけかり、俺は少し声を荒らげた。

「だから、胃潰瘍って決まった訳じゃないってば。それに、例えそうだとしても入院しなきゃならない可能性だってあるんだからな。そうなたらそんな悠長じょうじやうなことは言ってられないぞ」

「そうなの？」

紗江子の顔に不安が表出する。

「ああ。看護師はそういつてた。どうする？ 余命よめい幾許いくばくだかの花嫁よめって映画みたいになつたら、どうする？ 婚約こんやく不履行ふりやうで、訴えてやろうかな」

脅かしすぎたか、冗談のつもりだったが不安の色を浮かべたままの彼女の瞳に気づき、言ったことを途端に後悔した。

「冗談だよ。病院の検査つてのは大袈裟なんだ。親父の時もそうだった、検査だけで二三日かかるのが普通なんだろう」

「ねえ、ジュンは明日 もう、今日ね。お仕事なんでしょう？ あたしは、もう大丈夫だから、帰って休んでちょうだい」

一人きりの病室で過ごす夜が心細くないはずはない。紗江子は気持ちと裏腹の言葉を口にした。

「今日は休むよ。土日に新案の申請もなければ受理もない。女子社員に行かせても事は足りる。君をこんなところに独ひとりにしてはおけないよ」

「ご」

俺は人差し指で紗江子の唇を押さえて、にっこりと笑った。

「言わせないぞ。これは貸しにしておく。君が元気になつたら、たっぷりと利子をつけて返してもらおうからな。あんなことやこんな

ことをさせてやるんだ」

「こわーい、何をさせられるんだろっ」

言葉は怯えを表し、表情には期待を含んでいるようにも見えた。

当直医の説明があると看護師に呼ばれ、カンファレンスルームと書かれた部屋に入る。三十代半ばぐらいだろうか、髪を七三に分けた実直そうじつじくな医師がカルテらしきものを手に取って眺めていた。投影機には数枚のレントゲン写真が挟はさんである。

「お父様ですか」

ドアを開けた俺に気づき、医師は顔を上げる。彼より明らかに年上の俺が婚約者であるとは言いいにくかったが、話を聞けないのでは意味がない。面映おしかくゆさを押隠して正しい関係を伝えた。

「そうでしたか、それは失礼しました。私は当直医の佐伯と申します」

勤務医の労働条件は過酷だと聞く。佐伯医師の表情にも疲労の色が見てとれた。

「それで患者さんなのですが、腹痛や吐血は依然からあったのですか？ 嘔吐おうとは、どうでしょう」

「いえ、腹痛は食べすぎた時に起きる程度だと聞いていました、吐血も失神も、今回が初めてだと思います。嘔吐は私が知る範囲ではありません」

医師は、うーん、と考え込む表情になった。

「おかしいですね。いえ、全ての検査結果が出ていない状況で軽率そうな判断はできませんし、症状に個人差があります。しかし、これから判断しますと、もっと早い時期に自覚症状があったはずなんです。腹痛も我慢出来るレベルではなかったと思うのですが……」

これ、と指先で叩く検査結果が記されているはずのカルテに目をやる。若い医師らしく英語での記述だったが、素人の俺に、表記された内容も数値が示す意味も分かるはずもない。

記憶を辿ってみる。たった二ヶ月でも、紗江子と過ごす時間は短くはなかった。二人で朝を迎えた日も何度かある。しかし、彼女が

俺にそんな素振りそぶりを見せた記憶はない。もしかすると、ラーメン屋での不機嫌も、このせいだったのだろうか。中華料理店での細かい食欲いしょくは？ 痛みを堪こらえて笑顔を見せてくれていたのか。俺は自分の愚ぐ鈍どんさを腹立たしく感じていた。

「あのう、胃潰瘍とかではないのでしょうか？」

「その可能性もあります。ただ、私は専門外でしてね。本来なら、このまま入院していただいて専門医の判断を仰ぐのが一番なのですが、看護師が申し上げました通り、当院は満床で受け入れが不可能なんです。こちらへの転院をお勧めします」

「K医療センター病院案内？と書かれたパンフレットを手渡される。この部屋にたどり着くまでの病棟の廊下で、ストレッチャーに寝かされ、病室が空くのを待つ人々の姿を目にしていた。紗江子をあんなところに寝かせておくわけには行かない。

「分かりました。本人に相談してみますが、その方向で進めていただいで結構です」

佐伯医師の提案に同意をする。実をいうと、親父の最期さいごを看取ったここに紗江子を入院させるのは気が進まなくもあつたのだ。

「あちらでは消火器系の権威である神代先生が医局長を務めておられます。先ほど連絡をしましたところ、ベッドにも空きがあり、明日にでも検査が可能だといわれました。検査結果はこちらからお送りしておきます」

渡された病院案内の地図から、おおよその地理を頭に描く。この病院からは十キロ程度離れてたが、新しく繋がつながった環状線を走れば、さほど遠いともいえない距離だった。

「状態は安定しておられるようですし、明日には退院していただいて結構です。入院の準備をして行かれて下さい。紹介状を書いておきます」

「入院？ 検査ではないのですか？」

「検査の結果次第だとお答えしておきましょう。入院になる可能性は高いと思われれます」

奥歯に物の挟まったような物言いが気になったが、それ以上は語るつもりはないとカルテをパタリと閉じる医師の姿に言及を諦める。専門医の診断が下される前に、一喜一憂するのもバカげていると思えた。

病室に戻ると、紗江子は小さな寝息を立てていた。気を失う前の苦悶の表情とはうって変わった安らかな寝顔には、俺の不安を吹き飛ばすだけの力があつた。佐伯医師は、ああいったが毎年の健康診断でも異常はないといわれているのだ。重病であろうはずがない。俺も少し寝ておこう。座り心地の悪い椅子を引いて、ベッドの隅に頭をあずけると、俺は瞬く間に眠りに落ちていった。

四時間ほどは眠っただろうか。赤ん坊をあやすように、俺の背中をトントンと叩く手に気づいて目が覚める。

「あ、おはよう」

「おはようございます。そこ、よ、だ、れ」

俺がうつ伏さっていた付近に五センチ程度の染みが出来ている。上半身を起こしていた紗江子が楽しそうに指を差した。

「君が心配で、夜通し泣いていたんだぞ。涙の痕だよ」

「嘘おっしやい。すごい躰いびきをかいていたくせに。猛獣みただったわよ。それなのに寝顔は少年みたい。あなたって本当に不思議な人ね。この先も、たくさんの驚きが発見できそうに楽しみだわ」

「任せとけ、嫌っていうほど驚かせてやる。こんな人だとは思わなかったって、離婚を申し出ても応じてやらないからな」

「そのまま、そっくり同じ言葉をお返しします。あたしも猫をかぶっているだけかも知れないわよ」

にこやかに切り返す様子は、いつもの紗江子だった。かすれていた声も戻っている。

受付で紹介状を受け取り、世話になった旨を伝え、駐車場までの道のりを肩を並べて歩く。紗江子が腕を絡めてきた。

「病院に運ばれなかったら、今日は逢えなかったのよね。何だか得をした気分だわ」

清々《さすが》しい顔で俺の顔を覗きこんでくる。顔色も悪くない。

「あれだけ痛い思いをして、得もないだろう」

「いいの、こうしてジュンと一緒に居られるんだから。これで検査がなければ最高なんだけどなあ」

朝の陽射しが、道路わきに積み上げられた雪塊を融かしてゆくよ

うに、俺の中に鬱積した不安も小さくなってゆく。K医療センターでの検査も二三日で済むだろう。今後は彼女の様子にもう少し気を配るようにしよう。

「何を考えてるの？」

口にしなかった想いを込め、紗江子の腕に手を重ねた。

マンションの駐車場で、車を下りずに紗江子が言った。

「ねえ、病院に行く前に、お風呂に入っておきたいの。職場にも連絡しなきゃいけないし、留守にするならこの管理会社にも伝えなきゃいけないわ。少し後で来てくれない？」

「全裸の君をお姫様抱っこで入浴させる役目は俺にさせてくれな  
いのか。なんなら、ランジェリーも鞄にお詰めしますが」

「エッチ、部屋には上げないわよ」

「ちえ、ご褒美はなしか」

とは言え、俺も突然の休暇願いを申し出た会社に顔を出しておきたかった。不測の事態が起きていたとは思えなかったが、三十分もあれば、翌日の打ち合わせぐらいは出来る。病院で一晩過ごしたままの身なりを整える必要もあって、三時間後の迎えを約束する。

「ねえ、入院の準備って何が必要なのかしら？ 何日ぐらいになるのかな。入院なんて初めてだし、何も分からないわ」

「ここに書いてあるよ。着替えだろ、パジャマはボタンフロントがいい。持っていないければ、病院の売店で色気のないのが買える。それと日用品。ハブラシヤタオルにティッシューにスリッパ。あ、コップもあった方がいいな。保険証も忘れるなよ。足りないものがあるれば後で俺が届けてやるよ。管理会社には、ヒゲオヤジが出入りするかも知れないから宜しくと言っておいてくれ」

楽しい経験ではなかったが、親父の入院が役に立った。紹介状と一緒に渡されたK医療センターの入院案内を読んで聞かせる。

「みんなに迷惑かけちゃうなあ。ジュンみたいに優しい人ばかりじゃないから退院した後が憂鬱だわ」

「参事かい？ ヤツには何も言わせないさ。とにかく、今は自分の体のことだけを心配してる。この機会に原因をつきとめてしっかり治すんだ。そうでないとお奥さんになった君をこき使えないじゃないか」

「そうやって、昨日からあたしを脅してばっかりね。プロポーズを後悔してるの？」

紗江子は真顔になって訊いてくる。

「こんなに手間のかかる女じゃあ、他に貰い手はないだろう。気は変わってないから安心しろよ」

「大好きよ」頬を緩め、車のセンターコンソール越しに紗江子が抱きついてきた。

「Ditt...、同じく」

映画ゴーストで何度となく使われていたフレーズを彼女が知っていると不思議、言い直す。

尚子、悦子、そして俺が不幸にした数多くの女性達よ、先に幸せになってしまおう俺を赦したまへ。俺は完全に浮かれていた。

「何か食べたいものはないか？ 迎えに来る前に買って来てやるよ」

額を合わせたままの姿勢で話し続ける。

「今は食べるのが少し怖いわ。お腹は空いてる気がするんだけど……お金は、どのくらい持って行けばいいのかしら？」

「月締めつきじの請求になるはずだから心配ない。必要なら俺が立て替えておくよ」

「勝手に払ったりしちゃだめよ。キャッシュカードを預けておくかしら」

「俺のスーツがイタリア製になってたりしてな」

「やーめた」

不自然な体勢くちが辛くなってきた頃、紗江子が体を引いた。こんなやりとりは普段と何もかわらない。

用を済ませ、迎えに戻った時の紗江子の顔は少し青ざめて見える。

「大丈夫か？」

「うん、検査だっというのに、洗濯や掃除をしたのがいけなかつたみたい。また、少しお腹が痛くなってきた」

貧乏性も過ぎる。退院したら叱ってやらないと。やれやれと頭を振ることで非難を示し、見慣れたポストンバッグを受け取って車に積み込んだ。

K医療センターは井之口市のベッドタウンを見下ろす山の麓ふもとにあった。クロークと書かれた受付で入院の手続きを済ませる。そんなネーミングにも、真新しい建物にも近代的な雰囲気たたよが漂う。入院申込書の連帯保証人欄に婚約者と書き込むと、紗江子が顔を寄せて「婚約者ですって」と唇だけ動した。馴染なじみみ深い柑橘系かんきつけいの香りが広がる。

G病院では、散々、口にした言葉だが彼女には聞かせていないはずだった。文字にせよ、関係をはつきりとさせたのが嬉しかったのだろう。痛みを堪えていた顔に満面の笑みを浮かべている。对象的に受付嬢は不機嫌そうな顔になっていった。

病室は山側の六階だった。長時間の検査で病状を悪化させる場合もあるからと、勧められるままに個室を選んだ。紗江子の元気が戻れば、また、いちやいちゃ出来るな。俺はそんな気楽なことを考えてもいた。

説明にきた医師は四十代前半ぐらいの女医で、西尾と自己紹介をした。G病院での検査結果を基もとに診療計画書をつくった。それに従って午後から検査を始める。終了は翌日の夕方になるといった説明に、明日は出社できそうだなと踏む。

「本でも持ってこようか？」

「検査が終わるまでは落ち着かないからいいわ」

「じゃあ、テレビのプリペイドカードを買っておこう。イヤホンの後でもってくるよ。個室だから大きな音じゃなければ要らないかも知れないけど」

「テレビは見ないわ。素人に毛の生えたようなアイドルか、駆け出しのお笑いタレントしか出てこない番組を観て、何か心に残るものはある？」

「どっかで聞いたような台詞だな」

紗江子が我が意を得たりといった表情になる。

「忘れちゃった？ ジュンが斎藤さんにそういつてたのよ。本を読め、映画を観ろ。報道番組ですら国民に知らせたくない真実はねじ曲げて伝えられるものだって。あなたの声は低くてもよく通るの。カウンターのこちら側でも、よく聞き取れたわ。随分、書き溜めたわよ。ジュン語録を」

確かにテレビは観る価値がない。アイドルの学芸会レベルの番組について、あれこれ語る斎藤に、一括した記憶が蘇る。

「ねえ、バレッタを忘れてきたみたい。明日でいいから持ってきてもらえないかしら」

「バレッタ？ なんだい、それは」

「髪留めよ、こんな形の。姿見の前にあると思うわ。シュシュもお願い」

あー、あれか。彼女がよく着けていた装飾具を思い出した。

「それなら、さつき鞆で見かけたぞ」

シュシュは知っていた。無遠慮に紗江子のポストンバッグを探る。

「ほら、これだろ？」

手に取った俺から、凄い勢いで紗江子が奪い取る。

「ばかっ！」

どうやら、それはショーツだったようだ。くるくると丸くなった状態では区別がつかない。

「検査に入ったら、ジュンはおうちに帰って休んでね。昨日もあんなところで寝かせちゃったんだし、あなたまで体を壊したりしたら、お母様や祥子ちゃん達に申し訳なくって……」

「うん、そうさせてもらう。夕方また来るから、必要なものを思い出したらメールしてくればいい。具合はどうだい？」

「さつき飲んだ、お薬が効いてるみたい。痛みは治まったわ」  
「そういっただが顔色は冴えない。」

「検査の結果が聞けるのは明後日だっていつてたよな。俺一人で

聞いていいのか？ お母さんも呼んだ方がいいんじゃないのか？」

「大丈夫だってば」

頑かたくなに母親へ連絡を拒む紗江子だったが、後でトラブルにならないよう、祐二に連絡させておこう。俺はそう考えていた。

検査を終え、病室に戻った紗江子は憔悴せうすいし切った表情で言う。

「最悪だわ、もう帰りたい。ジュンは胃カメラを飲んだことはある？ もどしたいのに我慢しろって言われるし、不味まずい造影ぞうえい剤ざいっていうのも飲まなきゃいけないのよ。エコーでぐりぐりされるのも痛くて、もう嫌。明日は超音波胃カメラも飲まされるっていうし、肺や大腸の検査までするっていうの。痛いのは胃だけなのに」

「入院すらしたことのない俺だからな。そんな経験はないよ。でも、早く医者にかかっておかないから、こうなるんだぞ。腹痛は随分前からあったんだろう？」

診療計画書をしっかりと読んでなかった俺は、肺や腸の検査を不審に思ったが、病院の方針もあるのだろう。不満を吐き出し続ける彼女を、そう言っただしなめた。

「だって、毎年定期健診は受けてたのよ。急に病気になるなんて思わないじゃない。タバコも吸うし健康診断も受けてないジュンが元気で、あたしだけ、こうなるなんて不公平だわ」

「おいおい、俺に八つ当たりしても仕方ないだろう」

「八つ当たりなんかしてないわよ」

明らかに八つ当たりである。

箸はしもつけてなさそうな病院食が目に入った。診療計画書にチエツクしるもののあった潰瘍食かいようしょくは見るからに食欲を減退げんたいさせるような代物しろものではあった。

「食べてないじゃないか」

「何も食べたくない。まだ、胃カメラのぬめぬめした感触が喉の奥に残っていて、気持が悪いの。検査のせいで余計ひどくなっただみただみ。さっきまで咳も止まらなかったのよ。点滴に栄養剤と痛

み止めを入れておきますって看護師さんが言っただけだから、食べなくても平気よ」

親父も検査を嫌がった。指先から採取さいしゅするだけの血液検査も毎日ともなれば苦痛なのであろう。検査の過酷かこくさに少し我儘わがままになっていた紗江子だったが、親父の譎妄せんもんよりは随分マシだ。俺は再び、なだめにかかる。

「とりあえず今日の検査は終わったんだから、機嫌を直せよ。後は体調が戻るのを待つて治療に入るんだろう？ 通院で済むといいな。ベガはまだ見えないから尚子の三連星を借りて祈っておくよ」

「叱られないかしら？」

妙なところで気にする紗江子だった。

「ばれやしないさ。それに、彼女は心の広い女性だ。代わりに、夏はベガを貸そう。その頃には尚子も嫁に行っているのかも知れない」

俺達は星空をすっかり私物化していた。

「君が怒るといけないから先に言っておく。祐二に頼んでお母さんに連絡をしてもらった。店を休むわけには行かないから定休日の木曜に来るってさ。叔母さんも一緒だそうだ。検査結果は俺が聞いて伝えるよ」

「よかったのに……でも、ありがとう。色々、迷惑かけてごめんなさい……あ、また言っちゃった」

紗江子はペロリと舌を出す。

「入院中は何だろうと許してやるよ、お姫様。でも、今だけだぞ、甘えられるのは。俺は若者には厳しいんだ」

「あたしにも？」

返事に窮きつする。俺は愛する女性には、とことん甘い。

「できないでしょう？ 分かっているんだから。ねえ、今夜はどうするの？」

してやったりといった顔で笑う紗江子の不満は出尽くしたようだ。「スーツと洗面用具を持ってきた。このまま朝まで居て、明日は

ここから出社するよ。食堂の向こうにソファがあったから、君が寝付いたらあつちで眠る。本もないテレビも観ないじゃあ、退屈しちやうだろう。疲れしてるなら眠ればいいけど、そうでなきゃ話をし  
ていよう。何なら、子守唄も歌ってやるぞ」

「子守唄は要らないけど、一緒に居られるのは凄く嬉しいわ。ねえ、キスして」

「よろこんで」

おそらく雑菌ざっきんまみれの俺が紗江子の唇に触れるのは好ましくないのだろうが、お姫様のリクエストなのだ。拒む訳には行かない。顔を寄せて唇を重ねた。健康この上ない俺は、他にもあちこち触れたい衝動に駆られたが、薬品の匂いが混じったキスに、それを思い留まる。

「検温です」看護師の声に。俺達は慌てて体を離れた

「そんなバカな……職場では毎年健康診断を受けていて、何の異常もないっていわれていたんですよ。急にそんなことをいわれても信じられません」

西尾医師から紗江子の病名を告げられた俺は、椅子を蹴立けたてんばかりに立ちあがる。神代かみしろと紹介された医局長が、まあまあと、なだめるように手を振った。

「なるべく分かりやすく説明します。不明な点があれば、話の途中でも結構ですのでお訊ね下さい。この病気は粘膜表面ねんまくひょうめんに変化をもたらし、健康診断や内視鏡検査ないしきょうけんさでも発見出来ないことが多いのです。初期症状ほしんも殆どありませんので、本人の自覚症状に頼るしかないんです。ただ、それも進行してからは現れません。ですから、既にこのような状況になっている場合も多く、手術の適用外つまり、外科手術による治療が有効でないということになってしまふのです。お気の毒ですが、中尾さんの場合、ガン進行度の指標しひょうでいいますところのステージ4です。腹膜播腫ふくまくはしゅも起こしてますし、遠隔転移くわんいのみられる肺の機能も低下しています。現在の医学では治療ちゆの見込みはありません。化学療法で進行を抑制よくせいするしかないでしょう」

「でも、紗江子はまだ二十六歳なんですよ」  
何かの間違いであって欲しい。淡々と語る西尾医師に、絶すがるような気持ちで食い下がった。

「スキルス胃がんというのは若年層の女性が罹患りかんすることが多いのです。遠隔転移がなく手術が成功したとしても五年生存率が十〜二十パーセントという恐ろしい病気なんです」

医局長が、口を開きかけた女医を掌で制して答えた。

「死ぬってことなんですか」

口にしたくない言葉だった。両医師ともに視線を落とすだけで否定はしない。

「医師の我々は奇跡に期待はできません。一刻も早く治療を始めたいと思います。但し、抗がん剤での治療は過酷かこくです。激しい副作用の出る場合もあります。白血球が減少し免疫力も低下してますから、治療中の感染症にも配慮せねばなりません。中尾さんの血管は細く、点滴ばかりにも頼れません。経口剤けいこうざい 飲み薬ですね。それと併用しての投与になると思います」

いったん言葉を切り、言いにくそうに続ける。

「御本人に知らせないのであれば、親族 お母様の同意書もいただいたほうがよいでしょう。決して小野木さんでいけないという訳ではありませんが、まだ入籍はなされてないようですし」

頭の中が真っ白になっていた。

藁半紙わらはんしに図説ずせつを交えながらの説明は、素人の俺にも理解出来るはずだった。頷いてもいたのだろう。しかし、視覚からも聴覚からも情報が脳に伝わってこない。「長くもつて、二月ふたつき」その言葉の持つ衝撃に、俺は打ちのめされていたのだ。

「母親は明後日に来ます。私の同意で出来る範囲の治療を始めして下さい、本人には私から話します」

ようやくそれだけを医師に告げ、カンファレンスルームを後にした。

病室には戻れなかった。通院治療の可能性を期待している紗江子にそんな残酷なことを告げられるはずがない。悲壮感で塗り固められた俺の表情から、彼女が会談の内容を読みとるかも知れない。こんな心理状態で、紗江子に疑いを抱かせない信憑性しんぽうせいに富んだ嘘を思いつけるはずもない。どう伝える？ 夢遊病者むゆうびやうしやのようにフラフラと屋上への階段を上っていった。

暗くなりかけたそこに人影はない。濡れたコンクリートの床に、給水塔が暗く長い影を落とし、陰気なグラデーションを描いている。まるで、俺の心情を映し出すかのよう。

なぜだ、俺に出逢って人生が豊かになった。行きたいところもやりたいこともいっぱい増えた。そう楽しみに話してくれた紗江子か

ら、なぜ時間を奪うんだ。夕方の冷気で冷たくなった手摺りを両手で握って強く揺すりながら怒りの矛先を探すが見つからない。

俺は吠えた。獣のように吠え続けた。声が枯れ、喘ぐような息しか出なくなると、膝について四つん這いになった。紗江子の告白を聞いた時に流し尽くしたと思った涙が、また溢れだす。

医師は一刻も早い治療の開始を勧めた。勿論、そうしたい。しかし、紗江子にどう話せばいい？ 母親にはどう伝える？ 考えなければならぬことは山ほど浮かんでくるのだが、答えが出てこない。怒りと哀しみ、絶望感と無力感がグルグルと頭の中を駆け巡るばかりだった。

気がつくのと、すっかり陽は落ち、照明のない屋上を月灯りが照らし出している。東の空に昇りかけた三連星が目に入った。尚子、すまない。今だけ君の星を借りる。奇跡が無理なら一日でも一分でも、紗江子がこの世界に留まれるようにしてくれ。両の掌を合わせて握りしめ、何に祈るでもなく頭を垂れた。

早く戻らないと、紗江子に不安を抱かせることは分かっていた。だが、こんな顔のままでは戻れない。身なりを整えようと、のろると立ち上がり屋内に戻る。六階に降りると、洗面所の冷水で顔を洗った。ズボンの膝から下は、屋上に積もった雪でびっしょりと濡れている。

「遅かったのね、どうしたの？ その格好」

彼女が驚くのも無理はない。濡れたズボンを誤魔化すために膝までまくり上げ、泣き腫らした目を冷やそうと頭から水を被ったようになっっていたからだ。洗面所から病室までの短い時間で仕込んだ嘘を紗江子に告げる。

「医者の話は退屈で長いんだ。居眠りしかけちゃってさ。外の空気で目を覚まそうと屋上に出たら凍った雪で転んじやったよ。お陰で、このざまだ」

作り笑顔で、濡れたズボンを指し示す。

「でも、ちゃんと検査の結果は聞いてきたぞ。君の胃には十円玉大の穴があいているそうだ。せめて、それが半分ぐらいまで塞がらないと通院治療には切り替えられないってさ。胃潰瘍も、ここまですどいのはそうは見られないって西尾先生が言ってた。いい研究材料にされちゃうんじゃないか。お気の毒さま」

「長く待たされた拳句あけく、その返事なのね。目が赤いわよ」

紗江子の観察眼は鋭い。

「ギクツ、居眠りをしかけたじゃなく、しちやったのがばれたか」

「所詮、ジユンにとってあたしの病気は他人事なのよね」

紗江子は、ぷいと顔を背ける。俺は慌てて彼女の正面に回った。

「ヘソを曲げるなよ。いい報告もあるんだぜ」

「なによ？」

口を尖らせたままで訊いてくる。

「今日、出社したら社長からこんなことを言われたんだ。勤続二十年休暇をくれるってさ。二週間だぞ。それだけあれば充分だろう。紗江子が退院するまで、俺がずっとついてやる、他人が、こうまでしてくれるかよ」

乱暴な物言いを交えることで嘘に真実味を持たせようとした。

二十年休暇　そんな制度があるのを聞いたような気がするが、確かめるまでもない。俺は既に会社を辞める決意を固めていた。

「許してあげようかなあ」

俺の顔を両手で挟んで、紗江子は頬を緩める。即席の作り話をどれだけ信じてくれたのだろう。俺は、彼女が腕を伸ばした拍子に、点滴のチューブが外れたりしないかが気になっていた。

? スナツク宴 ママ 氏家京子? 紗江子の母親から名刺を渡される。名字が違うのは旧姓なのか、源氏名なのか、特にそれをつきとめたいとも思わず、俺も名刺入れから一枚引き抜いて渡した。

紗江子の説明によれば四十九歳になるはずの母親だったが、水商売をしているせいか、肌の色つやに年齢を感じさせない。全体の印象こそ紗江子に似てはいたが、やや厚ぼつたい唇は妖艶さを纏い、ひつ詰めた髪は目尻を吊り上げて冷たさを漂わす。苦労が彼女をそう変えたのかも知れないが、紗江子の持つ柔らかさは、母親の内に見い出せなかった。

対象的に叔母の加藤頼子は、見るからに人の良さそうなおばさんといった風体で、お世話になっていきますと、俺に何度も頭を下げてきた。氏家京子が口を開く。

「祐ちゃんから、お話は聞いております。紗江子がたいへんお世話になっていそう。でも、それと結婚とは別のお話です。私はそう考えておりますので、その、おつもりで」

のつけから喧嘩腰かよ。鬱ぐ気持ちを包み隠し、俺は平静を装って言う。

「その話は、いずれまた。今はそんな状況ではないんです」

「わかっています。胃がなんでしょう。祐ちゃんから聞いてます。まったく、親不孝な娘だわ。結婚は勝手に決めるし、手術だってお薬だつて安くはないんだから」

あなたの金は使わないから安心しろ。手術が出来るのなら、どれだけかかるかと俺がかき集めてきてやる。そうでないから、あなたを呼んだんじゃないか。詳しい状況を伝える前とはいえ、病気の娘を思い遣るどころか、親不孝とまで言い切った目の前の女を、俺はぶん殴つてやりたくなった。

祐二には、この時点でまだ真実を知らせていない。

談話室を借り、紗江子の現状を伝える。病状を軽視していた氏家京子も絶句して俺の話に聞き入っていた。

「私の話が信じられなければ、西尾先生にお確かめになって下さい。医学には素人の私ですし、正確にお伝え出来ない部分があるかも知れません。今日は手術があつて時間が取れないのですが、外来を終えた明日の午後なら大丈夫だとおっしゃってました」

叔母ははらはらと涙を流し、さかんにハンカチで目元を抑えていたが、紗江子の母親は唇をきく結んだまま、取り乱す様子もない。

「化学療法つてお金がかかるんじゃないの？ 支払いはどうなつてるの？」

急に水を向けられた祐二が、うろたえて俺に視線を投じる。

また、金の話か、母親なら真つ先に娘の体を心配するべきだろうが。「月締めですから、まだ請求はきていませんが、私が払います。

高額医療費の控除もありまし、べらぼうな金額にはならないはずです。お母さんが失礼、氏家さんにご承知いただければ入籍しようと思つていたのでから当然でしょう」

「あら、私は認めないなんて言つたつもりは、なくつてよ。」

ついさつき、そう言つたではないか。治療費を払うなら結婚も認めるとでもいうのか。紗江子の母親でなければ談話室の窓から投げ落としてやる。そんな衝動を抑えるのに、俺は必死だった。

「紗江……お嬢さんには、胃潰瘍のひどいものだと伝えてあります。今後、どうすべきか、どの時点で真実を告げるべきかをご相談したく、御足労いただきました。私は暫く席を外します。みなさんで御相談いただき、意見をお聞かせ下さい」

病室に立ち寄り、眠っている紗江子を確認してからエレベーターでロビーまで下りる。駐車場に停めた車から携帯灰皿を持ち出して、病院の敷地外に歩み出た。紗江子に付き添うようになって減った喫煙量のせいで、俺の肉体はニコチンへの耐性が落ちているようだった。大きく吸い込んだ一服目に軽い目眩を起こす。

「申し訳ありません。一身上の都合としか申せません」

辞意を申し出た社長室での会話が蘇る。紗江子の病名を聞かされた翌日のことだった。一枚板の天然木を天板にもつ重厚なデスクを挟んで向き合う俺に、座り心地の良さそうな椅子に腰かけたまま、社長が言った。

「どうしたんだ、一体。君は十年休暇もとっていないし、そろそろ勤続二十年にもなる。休職扱いにしてやろうと言っているのだぞ。一ヶ月、いや二ヶ月でも構わない」

その期限が紗江子に残された時間のように思て、俺は受け入れることが出来なかった。

「社長のお心遣いは、たいへんありがとうございます。ですが、社の都合も考えず、突然の退社を申し出る私のような者に、そんなお心遣いは無用です」

「引き抜きか？待遇なら考えないこともない」

「それには、何の不満も持っておりません。一身上の都合としか申し上げられません。社を裏切るような真似だけはいたしません」

社長は、うーむと唸って足を組み直すと、手に持ったファイルで机をぱたぱたと叩く。俺の勤務評定きんむひやうていが何かなのだらう。

「よし、わかった。だったら君の代わりを連れてこい。そうすれば辞表を預かるう。そして、その一身上の都合が片付いたら戻ってこい」

戻る気はなかったが、話が長引いて、紗江子を一人にしておく時間が延びるのが嫌だった。わかりましたと頷いて、俺は社長室を後にした。

「独立か？」「そんなんじゃないよ、一身上の都合だ」

デスクの整理をする俺に、同僚や部下が近づいてきては声をかける。

「係長、辞めちゃうんですか？」

女子社員が二人、俺の背後に立って遠慮がちに声をかけてきた。

「ああ、急なことですまない。でも、バレンタインの義理チョコ

代の節約にはなるぞ。君らにも色々世話になったな。ありがとう」  
「係長がいたから、課長のセクハラも鳴りを潜めていたのに」  
「俺の代わりなんざ、掃いて捨てるほどいるさ。社長に、後釜を  
見つけないと辞めさせないって言われたからな。活きのいいのを送  
りこんでやるよ」

当の課長は出張中であつた。俺のやることなすこと全てが気に入らない彼には、いい厄介払いと、なったことだろう。

戻った談話室では、祐二だけが窓の外を眺めて座っていた。

「二人はどうしたんだ」

「紗江ちゃんの所へ行きました。叔母さんは金の話ばかり。俺はつくづく嫌になりましたよ。小野木さんも行ってやって下さい。あの叔母さんが紗江ちゃんに何を言い出すか心配です」

嫌な予感がして、足早に病室へと向かう。

氏家京子のものと思しき声おほが、ドアの隙間すきまから漏れてきた。ノックに返事はなかったが、ドアを開けて病室に入る。

「だから、お金が、かかるんだっていつてるでしょう。私が預かって払うから出さない。あんな人に渡しておいたら……」

あんな人の登場に、母親の声が途切れる。

「ねえ、ジユン、あたしガンなの？ 胃潰瘍だつていったじゃな

い  
俯うつむいていた紗江子が顔を上げて俺に言った。

「あ、ああ、聞いたのか ごめん。お母さんに知らせてからと思つて 大丈夫、医学の進歩は凄いな。今時、胃がんなんか病気のうちに入らないさ」

察するに、紗江子の預金を奪い取ろうとして、病名まで明かしてしまつたのだろう。俺に何の相談もなく重大な告知をしてしまう母親に腹が立って仕方がなかったが、今はどうやってこの場を収めるか、それが急務となつていた。俺は必死に頭を働かせる。

「よく聞いてくれ。確かに君の病気は胃がんだ。大掛かりな手術

も必要になる。だから、術前治療じゆつぜんちりょうで手術に耐えられる体力を取り戻す。そう、先生に言われていたんだ。もう少ししたら、知らせるつもりだった。嘘をついていて、「ごめん」  
病気のうちに入らないといった舌の根も乾かないうちに、大掛かりな手術だと話す俺は、完全にうるたえまくっていた。

「出てって」  
潤んだ瞳を俺から逸そらし、紗江子がそう呟く。

「聞いてくれないか」

「出てって。ジュンもお母さんも、みんな出てって。あたしを一人にしておいて」

激しく言い放つと、紗栄子は頭まで布団を被ってしまった。俺達は仕方なく病室を出た。

談話室に戻った途端、俺は母親を詰なる。

「お金、お金って、あなたは娘の体が心配じゃないんですか。病院の支払いは私がするっていったじゃないですか」

紗江子の母親でなければ、女性といえども襟首えりくびを掴んで詰め寄っていただろう。頭の中では既に数回この母親を殴り、窓から投げ落してもいた。

「貧乏したことのない、あんたに何がわかるっていうのよ。籍を入れたいの紗江子のお金が目当てじゃないの？」

氏家響子は平然とそう言い返してくる。

「姉さん、それは言いすぎよ。小野木さんが支払いをなさるっていつてるじゃない」

「そうだよ、叔母さん。いくら婚約者のためとは言え、ここまでするものかな。この人は紗江ちゃんに付き添うために、仕事まで辞めちゃんつたんだよ」

「それじゃあ、なおさら、お金に困るじゃない。紗江子のお金で払うつもりなんですよ」

妹と祐二の言葉にも耳を貸さない。金の亡者と化したこの女には、何を言っても無駄だ。俺はこの数時間で何度目かの大きな溜息をつ

いた。

「分かりました。通帳と印鑑を預かって、祐二君に渡します。それでいいでしょう。車は、家にあります。部屋の鍵を渡しましょう。欲しい物があれば全部持って行って下さい」

頼む。そう言ってポケットから出した鍵を祐二に渡す。

「何もそこまでしろっていつてる訳じゃないわ。私は母親の義務と権利を主張してるだけなのよ。それが、間違ってるっていつの？」

ああ、間違ってるね。あんたは人の母親になれるような人間じゃない。とにかく、もう黙っててくれ。俺の自制心も限界に来ていた。

「その代わり、二度と紗江子の前に顔を出さないで下さい。私が傍に居る限り、あなたを紗江子には逢わせません。責任は全て私が負います。」

声を抑えていったつもりだが、間違いなく穏やかな表情ではなかったはずだ。俺の憤怒を感じ取ったらしく、氏家京子は押し黙った。

「それでは、私達は帰ります。くれぐれも紗江ちゃんを宜しくお願ひしますね。何かあったら、ここへ連絡して下さい」

携帯電話の番号ではない、加藤頼子の自宅なのであろう。走り書きされたメモを受け取って、三人を見送った。黙り込んだままの氏家京子は、最後まで俺に好戦的な眼差しを向け続けていた。

「入っていいかい？」

ノックして、おそろおそろ訊ねてみる。どうぞと、返事があったので、病室のドアを開けて入った。

「母達は帰ったのね。さっきは、取り乱しちゃってごめんなさい」  
紗江子が伏し目がちに詫びてきた。泣き腫らしたらしい目が赤い。

「気にするなって、嘘をついてた俺も悪いんだから。こっちこそ、ごめん」

「そうね、ジュンは嘘つきだわ。でも、優しい嘘だったのよね  
胃がんか……あたし、どうなっちゃうんだろう」

大きく息を吐くと、結ばない視線を病室の天井へと向ける。そんな紗江子に、インターネットで調べて作り上げた嘘を俺は語る。それでも外科手術が適用外となっていて彼女の状態からは程遠い。

「覚悟して聞いてくれ。先生の話だと、胃と周辺のリンパ節を全部取らなきゃならないらしい。食道と十二指腸と小腸を繋いで胃の代わりをさせるんだそうだ。胆のうも取らなきゃいけないっていわれた。でも、ちゃんと治れば健康な時の八割ぐらいは食べられるようになるってさ。無理しなければ普通の生活に戻るんだ。俺がついてる。辛いだろうけど、頑張つて欲しい」

「ちゃんと治ればか……そんなんじゃない、ジュンのお嫁さんにはなれないわね」

悲しそうな目で俺を見つめる。紗江子のそんな反応を予想し、講じていた手段があつた。会社は辞めてもクセになつて持ち歩いているアタツシケースから一枚の紙を取り出す。

「こんな手のかかる君を誰に任せられる。ジャジャー、これ何だ？ さっきみたいに泣き喚いたり、治療や手術を嫌がったりすると、勝手に書きこんで、役場に提出しちゃうからな」

紗江子の膝の上に置いた用紙の婚姻届の文字に目が留まる。ぱつと輝いた瞳が、すぐに涙で潤んだ。

「だめっ、一緒に行きたい。ちゃんと治療も手術も受けるから待ってて。あたし、病気は怖くない。痛いのも辛いのも我慢する。でも、ジュンが居なくなるのだけは耐えられなくて……」

俺だつてそうさ。でも君は去つて行く。それが分かっている、こんな嘘をつかなければならないんだ。釣られて涙声にならないようにゆっくり、そして、わざと乱暴に言った。

「居なくなったりなんか、しねえよ。いいか、俺は君を病気ごと愛してるんだぞ。これが婚約指輪だ。普通はサラリー三ヶ月分くらいの金額のを贈るらしいんだけど、それは、いつかきつと。君の誕生石のルビーもついている、サイズは適当だから、退院したら直してもらいに行こう」

妹に見立てを頼んだ指輪をアタツシエケースから出し、紗江子の目の前でケースを開いて見せた。

「素敵……はめてもいい？」

「ああ、でも、それをはめたら二度と俺から逃げられないと思え」入院で一層、細くなっていたのだろう。薬指の根元まで、するすると通ってしまうリングが悲しくて堪らなかった。大粒の涙を浮かべたままで紗江子が「大きいよ、これ」と泣き笑いで言う。

真実を告げる事が出来ずに曇ってしまう顔を　こぼれ落ちてしまいきりになる涙を、紗江子には見せられない。彼女の肩に顎を乗せて、俺はそっと抱きしめた。

借金を申し込みにきた俺があれこれ説明するより前に、悦子は見覚えのある預金通帳と印鑑を渡してきた。娘達から伝え聞いていてくれたのだろう。俺は別れた妻を訪ねていた。

「聞いたわ。お金が要るんでしょう。はい、これ」

高額医療控除があるとはいえ、還付は世帯ごとに行われる。そう病院で聞かされた俺は、事前申請のため社会保険事務所に走らねばならなかった。当座の支払いに窮することはなかったが、紗江子の未来をたった二カ月で終わらせるつもりなどない。充分な治療を受けられるだけの金銭的余裕が欲しかったのだ。

「すまない。きつと返すから」

「いいわよ、あげる。共有財産は本来、半分ずつにするものでしよう。あの時は意地になって通帳を全部持つてきちゃっただけだから。で、治りそうなの？ そのサエコちゃん」

「ああ、そう願ってる」

緘口令が厳守されているのなら、真実を知っているのは、俺と紗江子の母親、叔母、そして祐二だけのはずだった。娘とおふくろに、紗江子が胃がんであることは伝えたが、治癒の見込みがないとは言えなかった。明日の保証すらないことは告げられなかった。

「あんたも、つくづく女運のない男ね。わたしと別れる原因になった女には逃げられ、若くてきれいな子を見つけたら、こんなふうになっっちゃうだなんて。私で我慢しておけば良かったのよ」

尚子のことまで知っていたのか。俺は少し驚いたが、紹介するより早く紗江子を知っていた娘達を思い出した。知らぬは亭主ばかりなり。そんな諺が思い浮かんだ。

「そうだな　そうかも知れない」

「あら、素直じゃない」

そう思った訳ではない。話を長引かせたくなかったただけだ。紗江

子から離れている一分一秒を惜しんでいた。簡単に礼を述べ、暇を告げた。

病院の夜間通用口を通り抜けようとすると、暗い駐車場に止められた車から声を掛けられる。大山と祐二だった。

「見舞いにきてくれたのか？ 忙しいところすまん」

「なに水臭いこといってやがる。紗江ちゃん、辛そうだったな。

可哀想に、お前を待っていたぞ」

「ああ、色々と手続きがあつてな。今も社会保険事務所へ行つて来たところなんだ。祐二は毎日来てくれてるんじゃないのか？ 仕事も早く覚えるよ」

さすがに別れた女房に金の無心にいったことまでは告げられない。

「俺は親戚ですからね。おふくろにも、ちゃんと顔を出すようにと釘を刺されているんですよ。でも、俺では役不足みたいです。小野木さんと居る時みたいには、紗江ちゃん、笑ってくれないんですよ」

「痛みがひどいんだよ。なのに、モルヒネは嫌がる。困った病人だ」

花瓶には大山が持ってきたらしい花が生けてある。彩り豊かな花弁が、無味乾燥した病室に華やかな雰囲気醸し出していた。花に疎い俺にはシクラメン以外、分からない。

日毎に喉を通るものが減ってゆく紗江子だった。食べ物ではない見舞いの品はありがたい。祐二の助言だったのだろう。病院の出す潰瘍食ですら一時間かけて、やっと三分の一を食べるのが限界になっていた。いや、例え、たくさん食べられたとしても、収縮の始まっていた彼女の胃に、過大な期待は出来なかった。点滴のみに栄養摂取を依存するようになっていた紗江子の体は、日に日に厚みを失ってゆく。掛けてやる布団の隆起が小さくなってゆくの、胸が締め付けられる思いがした。

「いい香りが、してるじゃないか」

「うん。ねえ、いいこと聞いちゃった」

我慢出来るレベルではない。医師が言うのだ。それほどの痛みだろつに、笑顔をつくって語りかけてくる。

「何だよ、嬉しそうに」

「さつきね、祐ちゃんと一緒に大山さんがお見舞いに来てくれたの。ジュンの学生時代のお話をたくさん聞かせてもらったわ。そのお花も大山さんが持ってきてくれたのよ」

「ああ、たつた今、下ですれ違つたよ」

「ギター弾けるんじゃない。聞かせてよ、あたしにも」

大山と組んで演奏した文化祭の話を聞いたようだ。

「個室でもさすがにそれは叱られるんじゃないか？ 先生に訊いて、屋上に出てもいいっていわれたら」

俺が言い終わる前に紗江子の声が重なる。

「あつたかくして、短い時間ならいいって。もう訊いたの」

「しょうがないな、じゃあ今度ギターを持ってくるよ。でも、屋上の雪がなくなってからだぞ。それと期待するな、この低い声なんだから」

キーが合わず、若者が好むようなポップスは歌えない俺だった。

「楽しみだわ」そう語る紗江子だが、さつきから頻繁に顔をしかめている。

「なあ、痛むんじゃないのか？ 凄い汗だぞ。痛みどめの注射を頼んでやろう」

「注射は嫌。ぼうつとしちゃって、そこにいるジュンが夢なのか現実なのか分からなくなってしまふんですもの」

ここに入院してからも、紗江子は激しい痛みで二度、意識を失っている。それを見ている俺としては簡単に退く訳には行かない。

「病院に居るんだぜ。痛い思いを我慢する必要はないだろう」

「お願い、あなたが居ない時は、ちゃんと看護師さんにお願ひするから。ジュンが居る時だけでいいの。このままでいさせて。話し

ていたいの。ジュンを見ていたんだもの」

モルヒネの注射を嫌がる紗江子について、医師に相談したことがある。「好きにさせてあげなさい」そんな答えが返ってきた。俺は、その言葉の意味に困惑し、落胆したものだっただ。

紗江子の苦しむ姿は見たくない。しかし、訴えるようにじっと見つめてくる彼女の望み通りにもさせてあげたい。俺はどうしたらいいのか分からなくなっていった。

「ええと　どちら様でしょう」

病室に入ってニットキャップを脱いだ俺に、小首を傾げて紗江子が訊ねてくる。笑いを含んだ声だった。

身なりを整えるのと、風呂に入るためだけに自宅に戻り、数分だけの墓参りをして、そしてまた病院へ。そんな日常になっていた俺は、髪やヒゲの手入れにかける時間も、散髪に行く時間も惜しくなっていた。そこで、ホームセンターで買ったバリカンで髪を三ミリに刈り上げ、ヒゲも剃り落としてしまった。

顔が見えないからと、俺がマスクをするのを嫌がる紗江子だったが、外部と行き来する俺に雑菌が付着しないはずがない。いつかこうしようと思っていたのだ。

「赤ん坊の頃からヒゲを伸ばしてた訳じゃないぞ。君の職場に通ってた頃の俺も、大抵はこうだったろう。ワザとらしい質問はやめろ」

頭を差しだすと、あはは、と笑ってシュリシュリと俺の頭を撫でる。

「可愛いわね、これ。あたしも髪を切りたいな。お風呂も一日おきだし、トリートメントなんてしてもらえない。仕方ないんだけどね　随分傷んできているわ」

長い髪の手を手にとって見つめる。抗がん剤投与イコール髪が抜けるという訳ではないらしい。紗江子の長い髪は、以前の艶やかさこそ失ってはいたが、抜け落ちることもなく、量感をたたえたままだった。勿論、そうなればなただで、気落ちしただろ彼女を慰めるために、また新しいサプライズを用意せねばならない。そんな副作用の出ないことが、せめてもの救いだった。

「汗をかく季節でもないし、動き回る訳でもない君の風呂は、一日おきで充分さ。風邪でも引いたらどうするんだ。でも、美容師は

頼んできた。祥子の友達なんだ。西尾先生も構わないっていつてくれた。シヨートカットの君は見たことがないから、楽しみだな」

毛先を眺めていた紗江子が顔を上げて笑顔を見せた。

「ジユンは、あたしの考えることが、何でも分かっちゃうみたいね。嬉しいわ。でも、こんな風になっちゃうたあたしを、祥子ちゃん達に見せたくないな」

「こんなふう？ 少し痩せただけじゃないか。そんなこというと、ちっとも痩せない祥子がひがむぞ」

悦子似の由里はともかく、俺に似た祥子は、どう鼻<sup>ひこめ</sup>目に見ても、紗江子の美しさの足元にも及ばない。

「あら、祥子ちゃんは可愛いわ。若くて澁<sup>はつみつ</sup>刺<sup>つ</sup>としてるじゃない」「そういつてやってくれ。君の言葉なら祥子も喜ぶだろう」

「ねえ、部屋に行けばアルバムがあるわ。短大時代のシヨートカ<sup>ツ</sup>トが見られるわよ。高校時代のは見せてあげない。ほっぺが真っ赤になつてるのしかないんですもの」

「見せてあげないと言われれば余計に見たくなるもんだ。君の部屋を探せば済む話じゃないか」

「だめだつてば、そんなこというなら鍵を返して」  
口を尖らせてジャケットのポケットに手を伸ばそうとする。

「暴れると点滴が抜けちゃうぞ、家探<sup>やまが</sup>しなんか、しないから安心しろ。退院したら一緒に見よう」

「じゃあ、ジユンのアルバムも見せてね」

「女性と一緒に写ってるのは削除しておこう」

「あ、ずるい」

必要なものは、病院付近で全て買い揃えるようになっていた俺だ。当分、紗江子の部屋を訪れることはないだろうと思っていた。

娘達は午後によつてきた。

「紗江ちゃん、大丈夫？ 早く元気になってね。あたし、お姉ちゃんみたいなお母さんが出来るって友達に自慢しちゃったの。みんな

な信じないのよ、あのヒゲオヤジにか？　　つて、ないじゃん、ヒゲ」

俺を見て大仰に驚いたふりをするが、切り替えも早い。

「ま、いつか。はい、これ。お見舞い」

「気を遣わせちゃって、ごめんなさい。退院したら、何か美味しい物を奢るわね」

そう言つて、渡された紙袋を覗きこんだ紗江子の口元が緩む。

パジャマや下着の替えが入っていたようだ。いくら図々しい俺でも、さすがにランジェリーショップに入ってゆく勇氣はない。二三日の検査入院のつもりだったため、前もって用意したもののだけでは足りるはずもなく、それでも俺が洗濯に持ち帰ると言つと、紗江子は拒んだ。一人で歩き回れた頃は、病院の売店で間に合わせていたのだから、激痛で動けなくなつてしまふことが多くなつた今、下着の買い置きも底を尽きかけていたようだ。そこへもつてきての、この見舞いの品は、俺にとつても有難かつた。

淡いブルーのパジャマを手を取つて胸にあてがい、可愛い　似合う？　と、祥子と由里に交互に訊ねる。

「お姉ちゃんは、なんでも気が早いからなあ。紗江子さんの気が変わつて、お父さんが捨てられちゃつたらどうするつもり？」

俺を見て由里が笑う。

「何てこと言いやがる。紗江子が本当にその気になったらどうしてくれる。君も否定しろよ」

紗江子は、あはは、と笑つて俺と娘達のやりとりを楽しそうに眺めていた。

「いいなあ、あたしもこんな楽しいお父さんが欲しかったわ」

「紗江ちゃんは、お父さんより、あたし達の方が歳が近いんだからさ。いつそ、お父さんにしちゃえばいいのよ」

祥子が気楽に言い放つ。父親としてしか、接することが出来ないという条件を飲むなら、紗江子の時間を伸ばしてやつてもいい。もし、死神にそんな取引を持ちかけられたら、俺は、一も二もなく受

け入れていたであろう。

「覚えてる？マリちゃん。小学校と中学校が一緒だったのよ」

娘達の後ろに立っていた、真ん丸い顔で目も鼻も丸いふくよかな娘を紹介される。なるほど、確かに毬まりだなと納得する。

「ああ　よく、うちに遊びにきてたよな。そうか、美容師さんになっただんだ」

「はい、スタイリスト目指して頑張ってます。今日は一生懸命、切らせてもらいます」

マリはぺこりと頭を下げた。スタイリスト？　また、分からない単語が出てきたな。しかし、それを理解出来なかったのは俺だけだったようだ。誰一人として、そんな疑問を口にする者は居なかったからだ。

「うんと短くしてね。こんなところまで来てもらったんですもの、マリさんの思い通りにしてもらっていいから」

祥子の年齢を基もとにマリの経験を推定してみる。美容の専門学校を出て四年といったところか、とんでもないヘアスタイルにされることもないだろう。

「男の子みたいかな」

ベリーショートになった紗江子が、手鏡てかがみを色んな角度でかざしていた。

「ギルバート・グレイプって映画を観たことは？」

「ないわ」

「ジュリエット・ルイスって女優がそんな髪型で出ていたんだ。キュートだったぜ。映画の中で彼女がジョニー・デップにこう言うんだ。空をあらわすには大きいという言葉では小さ過ぎる」

「ふうん、とても詩的な表現ね。でも、女優と比べちゃ嫌よ」

「なんで？　君の方がきれいだよ」

にやにや笑いを浮かべた祥子の咳払いが聞こえた。

「いちやいちやするのはあたし達が帰ってからにしてくれませんか」

かねえ」

娘達を見送るため病室を出た俺に、由里が耳打ちをしてくる。

「お母さんにお礼を言っておいてね。パジャマや下着を買い揃えてくれたのはお母さんだから。あたし達はクッキーか何かを持って来ようとしていたの」

悦子だったのか　元カノと結婚すると言って、一方的に離婚を申し出た俺を　そして紗江子のために借金を申し込みに行くような男を彼女は許すのか　俺は目頭めがしらが熱くなった。

「うん、必ず言う。ばあちゃんは元気か？　お父さんが居ない間、ちゃんと面倒みてやってくれよ」　「どつちが面倒みられてるの

かは分かんないけどね。最近のおばあちゃんはすっかりしてるのよ」  
「これで、どこかで飯でも食って帰れよ。残った分はマリちゃんに出張費しゅつちゆうひだって言って渡すんだ。ネコババするんじゃないぞ」

勉強中ですからと言って、カット代を受け取らなかったマリに  
彼女を連れてきてくれた娘達に、そのぐらいの感謝はするべきだ。  
俺は札入れから一万円札を抜いて由里に渡す。

「ありがとう。紗江子さん早く良くなるといいわね。お父さんも体を壊さないように」

普段は憎まれ口しか叩かない娘の優しい言葉に、血の繋がりを感  
じずには居られなかった。

「いいなあ、家族って　ねえ、あたしが死んだらジユンのおうちの  
お墓に入れてくれる？　お父様と坊やの面倒を見てあげるから」

「死ぬだと？　何、甘えたこと言ってるやがる。だいたい、女性の方  
が平均寿命も長いし、君は俺より十四も若い。うちの墓に入りた  
きゃ俺の介護かいごが終わってからにしろ。今回のお返しに、とんでもな  
く手間のかかる呆ぼけ老人ろうじんになつてやる」

？死と？という単語に必要以上に敏感になつていた俺は、それを否定  
しようとする、どうしても乱暴な口調になつてしまう。どうした  
ん　俺はもっと嘘が上手いはずだではないか。優しい言葉

をかけてやれない自分に、やりきれない気持ちになった。

「ねえ……ジュン」

「なんだ？ 俺の介護をしないっていうんなら、今後、君の面倒もみてやんねえからな」

真っ直ぐに見つめてくる紗江子の眼差しにたじろぎ、やはり乱暴な口調で返す。

「ちがうの、あたしに触れて」

「手を握ってるじゃないか」

「うん、とつても落ち着く。でも、そうじゃない　あたしの全てに触れて欲しいの。ジュンがあたしを忘れないように」

「忘れる訳ねえだろう」

不覚にも俺は泣きそうになってしまう。

「分かってる。でも、今だけ、あたしのお願いを聞いて。あたしが醜くなる前に」

「君が醜くなるって？ 世界が滅んでもそんな日は来ねえよ。まあ、でも、せつかく触らせてくれるっていうんだ。遠慮なく触らせてもらおう。変な声を出すんじゃないぞ」

言葉だけ強がっていても声が裏返りそうになる。おずおずと紗江子のパジャマの下に手を這わせた。性的な欲求を伴わないで女性の素肌に触れる機会など、医者でもなければ、そうそうあるものではない。俺にとつても娘達のオシメを替えた時以来だったろう。

もとより華奢な体から脂肪も肉も削げ落ち、隆起した胸骨の感触が掌に伝わる。哀しみに、くじけまいとするほどに、俺の顔は歪みそうになる。紗江子がじっと見つめている。涙を流すんじゃない、憐憫を気取らせるな。女性を捨てる時の冷酷だった自分を思い出せ。自分を叱咤しながら、かけるべき言葉を探すが、焦るばかりで何も見つからない。耐えきれず視線を外そうとする俺に紗江子は言った。

「お願い、何も言わなくていいから、目を逸らさないで」

一年前のクリスマスに元カノから贈られたギターを抱えて病院の玄関を通り抜けると、外来で待つ患者や摺れ違すう看護師や職員が、不審そうな眼を向けてくる。病院の静寂せいじやくをエレキギターの騒音で破ろうとするような不屈き物があることなど、思いもよらなかったのである。

紗江子がリクエストした弾き語りは、屋上の雪が融とけるのを二日待ち、良く晴れた木曜日の午前中になった。

「寒かったら、言うんだぞ」

祥子から借りたダウンのコートを羽織はおらせ、ニットキャップを被かぶせてやる。

「あら、お揃いなね」

俺が被ったニットキャップを指差して、くすつと笑った。

「ああ、俺のお古つて訳には行かないからな。買ってきたよ」

或るスポーツメーカー製のニットキャップは、黒地にくすんだ赤で幾何学模様きかがくもようが描かれている。紗江子にスニーカーを買ってやった店にあったものだった。

「歩けるのに」不服そうにいう紗江子だったが、肺機能の低下している彼女から酸素のチューブは外せない。ボンベ用の架台かだいが着いた車いすを押してエレベーターに乗る。

「うわっ、寒い　でも、気持がいいわ。病室の中ばかりに居ると冬の寒さまでもが新鮮に感じるのね」

およそ十日ぶりの屋外をじっくりと味わうかのように、紗栄子は伸びをして空気を吸い込み、眩まぶししそうに冬の太陽を見上げる。暗くなりかけてからしか来たことのない屋上だった。以前は気づくことのなかった十五メートル四方ほどの緑化庭園があった。紗江子の乗った車椅子を花壇れんがべいの煉瓦塀れんがべいに寄せて停めた。

「よし、始めるぞ。二十分の約束だからな」

俺はエリック・クラプトンの Change the world を歌い始める。

If I can reach the stars

歌い終わった俺に、紗江子が拍手と質問を投げかけてきた。

「どんな歌詞なの？」

「星に手が届くなら、一つとつてハートを照らす。そうすれば真実が見えるだろう。もし、世界を変えることが出来るなら、太陽と成って君の世界を照らす。そんな愛も悪くないだろう。そんな歌詞だよ、ラブソングだよ」

「へえ、素敵。でも、あたしはジュンが傍に居てくれるこの世界を変えて欲しくないわ。他には？」

紗江子に歌って聞かせるなら、これしかないと思っていた。弾き語りに耐えられるほど、俺の歌 上手くない。学生時代のライブも大山のマスクと声に観客が集まったようなものだったのだ。

「お約束の Stand by me なら、歌える」

「拍手 ぱちぱちぱち」

紗江子は俺を乗せるのが上手い。

When the night has come And the land is dark

雨に濡れ立つ

調子に乗って、おさびし山の唄へと続く。

「ムーミンだー」

楽しそうな紗江子の歓声が屋上に響いた。

「もう、終わり？」

「ああ、俺はギター担当で、滅多に歌うことなんかなかったからな」

実は Tears in Heaven も歌えるのだが、嘘をついた。

天国で逢う君が俺の名前を覚えているだろうか。以前と同じように、僕に接してくれるかい？そんな歌は哀し過ぎる。

「警沢ね、あたし一人だけが観客のライブなんてへたくソな俺の歌を喜んでくれるのは君だけだよ。俺は小さく頭を振ってみせた。」

「さあ、もう時間だ。先生に叱られる前に病室に戻ろう。紗江子が退院するまでに、レパトリーを増やしておくよ。」

「お願い、さっきの Change the world をもう一度聞かせて。今度は歌詞もしっかり聞きたいの。」

訴えるような目でアンコールをしてくる。紗江子の願いとは逆だったが、俺はこの世界を変えたいと願っていた。治らない病気などない世界へと そんな想いを込めて歌った。

「ジユンの好きな曲なんでしょう？ 歌詞を知りたいわ」  
医師に許可された二十分は過ぎていた。

「明日、クラブトンのアルバムをIPODに入れて、歌詞カードと一緒に持って来てやるよ。英語の勉強にもなるぞ。ほら、こんなに、ほつぺが冷たくなってるじゃないか。病室に戻ろう。」

斎藤が見舞いにやってきたのは昼食を終えて、しばらくしてからだ。役所で紗江子の隣に座っていた松野かおるといふ女性が一緒だった。

「紗江ちゃん、どうしちゃったの？ 何で知らせてくれなかったのよ、水臭いじゃない」

「ごめんね、検査だけのつもりだったから。みんなに迷惑かけてるんじゃないかしら」

「そうっすよ、ジユンさんからいきなり電話があったかと思っただら俺の代わりをしろ、待遇は保証してやるから、すぐに会社を辞めて富士ノベルテックに來い」でしょう。紗江ちゃんに事情を聞くにも、役所に居ないし。俺は何が起きてるのか、さっぱりわかんなかったっす」

俺は社長が要望した代役に、斎藤をあてがっておいただ。松野かおるが紗江子に小声で囁くのが聞こえた。

「ねえ、彼、ただの王子になっちゃったわね。丸刈り王子ってとこかな」

紗江子がくすくすと笑った。頼むから王子は止めてくれないか。その言葉に俺は、白いタイツを履かされ、嫌々演じた幼稚園のお遊戯を思い出してしまふのだ。

「ところで、お前らはいつからそうゆう関係になつたんだ」

俺は斎藤に問い質す。彼が答える前に、かおるが大袈裟おおげさに手を振りながら言った。

「何、言ってるんですか。そんな関係にも、こんな関係にもなつてません。斎藤君が病院を知ってるからって言うから一緒に来ただけです。一緒に行かないなら教えないっていうんですよ、この人つたら」

ムキになって否定するが、まんざらでもなさそうに見える。

「俺の方が年上なんだから、君くんじゃなく、さんって呼んでくれなかな」

「小野木さんみたいに、あたしのピンチに颯爽さつそうと現れて助けてくれるなら考えてあげてもいいわよ」

「勘弁してくれよ、かおるちゃんのピンチを俺がどうやって知るんだよ。それにピンチってなんだよ。君は、そうちよくちよくピンチに陥るのか」

うーん、と数秒考えてから、かおるが答える。

「そうねえ 例えば、コンビニでお金を払おうとしたら足りなかったとか、料理をしてたら醤油ゆじょうを切らしたりとか」

「それじゃあ、王子様じゃなくなって召使じゃないか」

斎藤の不平に、紗江子が嘖き出した。

「ジュンさんの、あれは役所で伝説になっちゃってるんすよ。俺は割食わじくってる感じっす」

「偶然、ああなっただけだ。お前の苦情はいつも見当はずれだな。で、会社はどうだ。上手く回ってるのか？」

「ジュンさんの言った通り、課長は口うるさいっす。でも、給料

はいいし、前の会社より若い女子社員が多い。そこは感謝してます」  
「なんですって」

かおるが斎藤を睨みつける。

「じよ、冗談だつてば」

二人のやり取りを、紗江子は微笑んだり噴き出したりしながら楽しそうに眺めている。俺は、このまま時間が止まってくれないものかと、真剣に願っていた。

「じゃあ、また来るわね。早く、よくなつてね」

「うん、ありがとう。職場のみなさんにもよろしく言っておいてね」

「あ、待つてくれよ」

俺と話し込んでいた斎藤が、かおるの後を慌てて追う。小太りの体を開き切つてないドアにぶつけながら通り抜ける様は、滑稽だが愛嬌に溢れてもいた。

「あの様子じゃあ、斎藤は尻に敷かれるな」

「そうね、でもお似合いだわ」

「斎藤は君を狙つてたつて言つてたんだぞ」

「嘘ばかり。そんなこと、これっぽっちも言つてなかったわよ。それに、あたしはジュン一筋ですから」

紗栄子は、気持ち顎を持ち上げ、得意気な顔をする。

二人が持つてきた、洋菓子らしい包みをキャビネットの棚に仕舞い込んだ。紗江子の喉は通らないだろう。

俺が居れば、それでいいと言つてくれる紗江子だったが、斎藤達の見舞いはいい気分転換になつたようだ。また来る、か 誰でもいい。紗江子を訪ねて笑わせてあげて欲しい。嘘を呑み込んだままの俺の演技は限界に近付いていた。

元々、細かった紗江子の血管は抗がん剤の副作用などで脆もろくなってきたており、点滴のため看護師は何度も針を差し直した。そして、入ったと思えば血管が裂けたりもする。紗江子の血管には限界がきていたようだ。強い薬である抗がん剤の点滴漏れは、皮膚障害も起すという。医師の勧めで大静脈からカテーテルを入れる手術をすることになった。手術そのものは三十分程度の短いものだったため、出掛けていた俺が戻った時、既に紗江子は病室で小さな寝息をたてていた。

インターネットで民間療法の情報を仕入れて医師に相談し、可もなし不可もなしと言われたフコイダンだかフダコインだかを探し求めて、薬局や健康食品の店を回っていたのだ。

点滴の跡が痛々しく変色をした前腕部をそつと撫でるようにすると、うーんと言って、紗江子の起きる気配がした。

「あ、おかえり。あたし、寝ちやっみたいね」

「そうだな、眠れるなら安心だ。少しは楽になったのか」

「うん、こつちの方が楽かも。点滴は痛くて仕方なかったんだもの。看護師さんも針を入れるのに苦労なさっていたわ。痛みどめもよく効いているような気がする」

「良かったな。」

「元気だった頃にね、かおるちゃんに細くて羨まいましいとか言われたけど、こんなになると分かっていたら、もっと太ふっておけばよかったと思うわ」

点滴の効果が思わしくなく、ここ数日は、やむを得ずモルヒネに頼っていた。確たる意識はなかったらう紗江子は、譫言うたげごころのように「こんなに苦しいなら、死んでしまいたい」と、繰り返したものだ。そんな時、俺は彼女を勇気づける言葉すら見つけられない自分の無力さを呪うしかなかった。はっきりとした口調で語る紗江子に、俺

の気分も昂揚する。

「たくましい君だったら、こうはならなかったかも知れないな。でも、俺の好みは華奢な女性だ。君がたくましかったら付き添っていなかったかも知れない。いや　そもそも付き合っすらいなかったらうな」

「いじわる。喜んでいいのか悲しんでいいのか、分からないじゃない」

拗ねたような目で不満を訴えるが、ここ数日で一番の状態に思えた。

「いいから、早く良くなってくれよ。俺は去年約束したテーマパーク行きのデートを反故にしたことが、気になって仕方ないんだから。花見も行くぞ、薄墨桜に枝垂れ桜、役所の裏からずつと繋がってる堤防道路は、桜のトンネルを抜けるみたいで幻想的なんだ。奥琵琶湖には二千本の桜並木がある。花見だけで三日はかかるな」

春への期待が　未来への希望が、紗江子に生きる力を注いでくれる。そう信じて、退院後を話題にすることが多い俺だった。

「ねえ、お揃いの革ジャンでバイクにも乗せてくれるのよね、テーマパークにはそれで行かない？」

「いいとも。但し、それは完全に体力が戻ってからだな。背中にしがみついているだけでも結構な体力が必要なんだ。バイクはコーンウィークあたりまで待てよ。ボーリングの雪辱戦もしたいっていつてたろう？」

「あ、それを忘れてた。退院しても、しばらくはズル休みしちゃうかな。そうでないかと予定がこなし切れないわ」

「おいおい、俺の休暇は二週間だけだぞ。先は長いんだ、子供が出来るまでは二人で自由に動き回れるさ。慌てることはないよ」

「だって、ジュンとなら行きたいところもやりたいことも増えるに決まってるんですもの。急がないと、あなたがおじいちゃんになっちゃうじゃない」

紗江子は悪戯っぽく笑って俺の様子を窺う。

「ばかもの」

拳骨を作つて、紗江子の頭に置く。彼女は首をすくめて笑つたが、次の瞬間、何かに気づいたような顔になった。

「ねえ、あたし子供生めるのかな」

やはり、その心配をするか 先ずは生きていて欲しい。その先のことなんかどうでもいい。それが本心である俺の言葉は、説得力をもつて紗江子に伝わっているのだろうか。未来を語る時、いつもそれが不安になった。

「いいじゃないか、生めないなら生めないで。うちには手のかかるのが、もう二人も居るんだ。なんなら犬を飼おう。二頭だ。君のリハビリと俺のダイエットを兼ねて、毎朝毎晩散歩するんだ」

「うわあ、楽しみだな。ねえ、スーパーへも行きましようね。二人並んでカートを押すの」

どうにか、妊娠に関する話題からは脱却できたようだ。

「入籍は、いつするんだよ。まず、それが最初だろう」

「あ、そっか。あたし、小野木紗江子になるのよね」

「そうさ。ちゃんとお母さんを説得してくれよな。どうも俺は嫌われてるような気がしてならない」

「大丈夫よ、母が何といおうと、あたしが文句は言わせない。ええと、証人は誰にお願いするの？」

ただ、寝ているだけの紗江子にとって、時間は果てしなく長く感じられるものらしい。婚姻届も隅から隅まで読み尽くしていたようだ。恐らく諳んじていた注意書きの内容を話題に挙げた。

「おふくろでもいいし、姉ちゃんも妹も喜んでなってくれると思つぞ。何なら水野に頼んでみるか。ヤツは胸毛の生えたキューピットだからな」

何故だか友人の胸毛が思い浮かんだ。

「え？ 水野さんってそうなんだ。あたし、胸毛苦手かも」

「苦手だろうと、そうでなかつたら、君の前で水野が服を脱ぐ状況にはならないだろう。そんなのは俺が困る」

「あ　もしかして、妬いてる？」

「そりゃあ妬くさ」

「へえ、ジュンってジェラシーとは無縁の人なんだと思ってた。何だか嬉しい」

表情が乏しいのか、感情表現が下手なのか俺は、よくこう言われる。実際には嫉妬の炎に焼かれんばかりに悶え苦しんでいても、そうは思われならしい。不本意であった。

「なあ、紗江子。これ健康食品なんだけど飲んでみてくれないか。胃　、消化器系の病気に効くって話なんだよ」

病名を告げた後でも、がんという言葉は口にしづらかった。仕入れてきた瓶をベッドの紗江子が見易い高さに持ち上げる。彼女は首を傾げてそれを見つめた。

「不味いかもしれないけど、蜂蜜が入ってるそう。お茶代わりにならないかな」

「早く良くなるなら不味いぐらいは我慢する。でも、これお酒みたいね」

濃色の瓶に詰められたそれは、健康食品の店で四万九千円の表示されていた。ヘネシーを一升瓶に詰めたらこんな値段になるのだろうか。

「そうか　じゃあ早速飲んでみよう。健康食品だから俺も付き合うよ。お湯で割ってみよう」

ステンレス製のマグカップにぬるぬるした液体を半分ほど入れ、お湯を入れて手早くかき混ぜる。俺達は同じタイミングで口に運び、同じ感想を口にした。

「まずっ」

「あたしの病気はスキルス胃がんなのね」

夕食の片付けをしようと椅子を立った俺の背中に、紗江子の声が届く。油断しきっていた俺は、その言葉にあっさり切り裂かれ、トレイをとり落としそうになった。

「何だ、それ？ 胃がんに種類なんかあるのか」

動揺する心をなんとか建て直し、精一杯の演技を試みるが、語尾が震えてしまう。

「これ 読んでみて」

紗栄子は携帯電話を開いて俺に差し出す。検索エンジンで有名な或るサイトのロゴが目に入る。？スキルス胃がん？症状？と書かれたページが開かれていた。

「ジュンがパソコンを持ってきてくれないから、それで調べたの。あたしの症状に、ぴったり当てはまるでしょう。西尾先生は、ちっとも手術の話をなさらないわ。もう、そんな段階ではないってことなんでしょう。あたし、聞いてみたの。スキルスって言葉を否定なさらなかったわ」

頼まれていたラップトップをなんのканのと理由をつけて持ってこなかったのは、これを恐れていたからなのだ。それでも俺は必至に逃げ道を探る。

「あの先生は内科だからな、手術は外科の先生がやるんだよ。そんなことも知らないのか？」

「とぼけないで。あたしね、悪いとは思ったけど祐ちゃんに鎌をかけたの。彼は、小野木さんに聞いたのか？ って言っていたわ」

祐二は責められない。男の嘘を見抜く術を、全ての女性は生まれながらに持っているのだ。育ちのいい彼が、幼い頃から苦労してきた紗江子の戦術にまんまと引っ掛かってしまうだろうことなど俺が

予見よけんしておくべきだったのだ。

「それに、ジヨン あなたは自分でいうほど嘘が上手じゃないわ。髪を切ってもらった日のことを覚えてる？ あたしに触れてくれたでしょう。あの時のあなたの表情が全てを物語っていたの。ごめんね、辛い思いをさせて。人はこれほど悲しい顔が出来るものなのかって思い知らされた。尚子さんと別れた時のあなたより、ひどい顔をしてたわよ。不謹慎かも知れないけど、それが少しだけ嬉しかったな」

否定の言葉を捜す俺の思考は空回りを続ける。

「覚えておいて。あなたは嘘をつくときに、決まって乱暴な言葉遣いになるの。女は愛する人の嘘に敏感なのよ。たくさんの女性に嘘について傷つけたってい言ってたわよね。みんな騙されたフリをしてただけだと思うわ。もう自分を許してあげてもいい頃よ。あなたが悲しい目をしていたら、居なくなれないじゃない。あたし、分かるの。自分の体なんですから。きっともう長くは生きられないんだって感じるの」

うつすらと笑みさえ浮かべて話す紗江子に、堪こたえていたものが一気に吹き零こぼれた。

「君が居なくなったら、俺は一生悲うれしい目をして過ごこさなきやならないんだぞ。どこにも行かないっていったじゃないか。約束を破るのか」

いい歳をして情けない話だが、嗚咽混じりになってしまい、ちゃんと紗江子に伝わっているのかどうかすら分からない。

「仕事も辞めやっちゃったんでしよう？ あたし、ジヨンの人生を滅め茶苦茶にしたのね、とんだお荷物だわ」

それも気づいていたのか。目線を落とした紗江子の言うとおり、俺は嘘が下手なようだ。

「そんな風に思ってるのか」

「思いたくないけど、現実がそうなもの」

「バカモノ」そう言って、触れるか触れないかの力加減で、紗江

子の頭に拳骨を置く。声に力がない分、言葉と所作だけでも普段通りに。泣きべそをかいてしまった中年男がせめてもの抵抗を試みる。「尚子と悦子を裏切り続け、せつかく芽生えた命まで摘んでしまった俺は、どう償っていいのか分からず、途方に暮れてたんだ。君のお陰で、それが分かった。受け入れてもらえない謝罪は、君を幸せにすることで、それに代えてもらおうと思ったんだ。お荷物なかであるもんか。悔しくて言えなかったけど、紗江子は俺の宝物だ。何度でも言うぞ、どこへも行かせない。君のためだけじゃない、俺の贖罪の受け皿として、傍に居ろって言ってるんだ」

言葉面は傲慢だが、端々《はしばし》で声が裏返る。笑みを消さない紗江子の頬に、幾筋も涙の跡があるのに気づいた。

「泣きながら威張るのね、おかしいわ」  
「君だっけ泣いてるじゃないか」

「あたしが望んであなたから去るんじゃないもの、怒らないですよ」  
「いいや、怒る、泣く、死んでやる」  
何の余裕もなくなってしまった俺は禁句まで口にしてしまう。

「あたし、いつまで生きられるのかな」

紗江子の肩が小さく震えだした。

「決まってるだろう、俺がいいって言うまでだ」

「そうになりたい、ジュンが許してくれない限り死ねないあたしで居たいわ」

「じゃあ、そうしてやる」  
「してよ」

俺達の想いは同じだったはずだ。なのに何故、言い争っているように感じるのだろうか。

「するさ、してみせる。あの不味いパワーなんとも、辛い治療もそのためじゃないか。俺は絶対に諦めないぞ。だから、君も諦めるな」

突っ立ったままの自分に気づき、ベッドの端に膝をついて紗江子をふんわりと抱きしめた。

「だつて……」

言葉が続かない。俺の首筋に暖かい滴がこぼれ落ちてくる。俺は、ただ抱きしめるだけしか出来ない自分の無能を嘆き、彼女から未来を奪おうとする病魔に激しい憎悪を抱いていた。

紗江子の一日と俺の寿命の一年と引き換えてもいい。それがダメなら、病巣ウツクをそっくり俺に移植してくれ。悪魔が、ここに現れ、そんな取引を持ちかけてはくれないかと俺は願った。神に祈る時期はとうに過ぎ去っていたように思えた。

所用しよようから戻った病室に、紗江子の姿はなかった。車椅子もないから風呂かな？ この前はいつだったろう　ボンヤリとした頭で、そんなことを考えていた。

仕事を辞め、病室と自宅の行来ゆきだけになっていた俺は、いつか曜日感覚を失くしており、昼夜の区別なく痛みを訴えて目覚める紗江子の介抱に、時間の感覚も奪い取られようとしていた。

タフで鳴らす俺だったが、睡眠不足と心労しんろうで疲弊ひへいしていたことは否いなめない。病状が進むにつれ、病室を出られるのは祐二の居てくれる一時間半ほどとなっており、睡眠は病室のパイプ椅子のみに制限された。

人の心配などしていられる状態でなかったはずの紗江子が、そんな俺を慮おもつて、看護師にでも頼んだのだろう。部屋には折り畳み式の簡易ベッドが運び込まれていた。少し体を休めるだけのつもりで横になった俺は、不覚にも眠りに落ちてしまった。

「採血です」看護師の声に目覚める。戻ったのかな？　そう思い送った視線の先、ベッドの上は空っぽだった。

「紗江子は？」「中尾さんはどちらに？」ほぼ同時に俺と看護師が声を発する。俺は跳ね起きた。腕時計を見ると午後五時を数分回ったところだった。小一時間は眠っていたらしい。

「入浴ではなかったんですか？」

「昨日、済ませたじゃないですか。中尾さんはどちらに？」

同じ質問を繰り返す看護師に「探して下さい」と、一言、言い残し俺は病室を飛び出した。

この、薄らバカめ　自身を責める声に反論の余地はない。正確を期すなら、悠長に言い訳を考えている暇などなかったというのが正しいだろう。俺の頭の中は紗江子の所在を確かめることで埋め尽くされていた。

あんな体で一体どこへ？ 独りでは、ベッドから車椅子こつに移る体力さえなくしていた紗江子だった。

上か？ 下か？ エレベーターの前で立ち止まって考える。屋上の重いスチールドアを思い出した、紗江子にあれが開けられるはずがない。？？のランプが長く点いたままのエレベーターを待ちきれず、俺は階段室へと走った。

眠気は完全に消え去っていた。途中、踊り場で擦れ違った技師と階下を目指して一目散だった俺は危うくぶつかりそうになる。咎める目を向ける若い技師に、すいませんと頭を下げ、俺は一気に一階まで駆け下りた。

外来の待合、売店、一階のトイレと、自分が辿った以外の場所の全てを見て回るが紗江子は見つからない。西へ伸びる回廊へと足を進めた。

突き当たりのドアを開けると、暗くなりかけた屋外、止んでいた雪が、また、ちらちらし始めていた。そこにも紗江子の姿はない。引き返そうと振り返る俺の目に入ったのは？ 霊安室？ の三文字が書かれた扉だった。

まだまだ 誰に語るつもりでもなく発した声が思いの外、大きく回廊に響いた。

俺は二階へと駆け上がり、ナースステーションを挟んで二列ある回廊の端から端までを駆け抜ける。そして、トイレとエレベーターホールの裏側を覗いて、紗江子が居ないと分かると、上階への階段を駆け上がった。

紗江子の病室がある六階に戻った頃には、俺の心臓は口から飛び出しそうになっていた。それでも、彼女を見つけるまでは立ち止まっただけ居られない。

ナースステーションで見つけたかどうかを訊いてみるか このまま屋上階へ向かうかどうか悩んだ末、階段室を出た。

「あのお……」

エレベーターに乗ろうとしていた青年が、俺に声をかけてきた。

給湯室で二、三度、言葉を交わしたことがある、堀の深い顔をした青年だった。入院中の父親の付き添いを家族交代でしていると聞いた。聞いたはずの名前は忘れてしまったが、沖縄っぽい苗字だったことだけは覚えていた。

「何だ？」

行く手を阻まれる格好となった俺の物言いは、喧嘩腰ともとれるような乱暴なものだった。だが、青年は気を悪くした様子もない。

「車椅子の女性を探しているのですか？髪は短い」

「そうだ、知っているのか？」

全身で青年に向き直って、彼の肩を揺すった。

「ええ、僕が洗濯物を取り込んで屋上から戻ろうとした時、ドアを開けられずに困っていたんです。事情を聞いたら、落し物を探しに来たと言われました。具合が悪そうに見えたから、僕も手伝いましょうかと言ったんですが、独りで大丈夫だからと戻ってらっしゃらないんですか？」

「すまん、ありがとう」

青年の問いには答えず、俺は再び階段室に飛び込んだ。？病院の屋上？という言葉から連想するものは、下手クソが歌うライブだけではない。二段飛ばしで階段を駆け上がり、体当たりするような勢いで重いスチールドアを押し開いた。

うつすらと雪が積もりかけた屋上の中程、車椅子が横倒しになっている。

「紗江子」

照明のない屋上の見通しは悪い。病院の裏手は山で、他の建物からの灯りもない。もう一度、大声で紗江子の名を呼びながら車椅子まで駆け寄った。酸素ボンベが架台から転げ落ちていた。

「紗江子」

ドアが閉まる音がした。誰かが来たのかもしれなかったが、今、俺の注意を惹くものは紗江子の安否以外、何も無い。この手摺りを紗江子が乗り越えられるはずがない。そう思いつつも、そこに痕跡

を探してしまう俺だった。

「あの あそこに」

声のする方に目を向けると先ほどの青年が立っていた。彼の持った懐中電灯が、緑化庭園の手前を照らすと何かがキラリと光る。俺は雪で滑る屋上の床に足を取られながら駆け寄り、横たわる小さな塊を抱き起こした。

「紗江　　しっかりしろ」

雪に覆われた彼女の体はすっかり冷たくなってしまっている。額にかかる髪も濡れていた。ただ、僅かに開いた口から漏れる白い息が命の灯火を主張している。紗江子の倒れていた場所に転がっていたのは、音叉だった。屋上ライブの時に置き忘れていたのだろう。さっきの反射はこれだったのか

「先生を呼んできません」

背後で青年の声と駆け出す足音が聞こえた。俺は紗江子を抱きかかえ、階段へと向かう。青年が起こしておいてくれたのだろう。車椅子が正立し、ボンベも架台へと戻されている。紗江子の体をそれにあずけ、酸素のチューブを繋いだ。透明だったチューブが白く曇る。

その時は気づきもしなかったが、重くドアストッパーの着いていないスチールドアは開放されていた。青年の機転だったらしい。屋内へと紗江子の乗る車椅子を押入れた時、ドアに挟み込まれたスリッパが目に入った。

紗江子の手がゆっくりと動いた。俺は彼女の正面に回り、顔を近づける。途切れ途切れの小さな声が聞こえた。

「ごめん……ね　　ゆび……わ、さが……して……たの。ちやん……と、みつげ……」

二度と抜け落ちないためにだろう。俺が贈ったルビーの指輪は、紗江子の中指で輝いていた。

「うん　　でも、もう二度と無茶はしないでくれ」

紗江子を抱いて一気に駆け降りるか　　しかし、そうなると酸素

のチューブを外さねばならない。迷いは一瞬だった。俺は車椅子ごと紗江子を抱え上げ、階段を下り始める。狭い踊り場で体を捻った際、右手に激痛が走ったが構わず階段を下り続けた。

六階のフロアにたどり着いた俺と紗江子を、西尾医師と看護師が出迎える。

「小野木さんっ、その手」

看護師が、そう叫んだ。どこかで挟んだのか。それとも車椅子のホイールにでも巻き込まれたのか、右手の小指は皮一枚で繋がっていただけのようで、流れ出る液体がリノリウムの床に血溜まりを作る。ストレッチャーに乗せられた紗江子が俺を見て口を開く。

「ごめんね。でも、ありがとう」

遠ざかる意識の中、紗栄子がそう言ったように思えた。

別れは突然、訪れた。

「敗血症はいけつしょうじょうのようです、カテーテルを入れ替える際にも充分に注意は払ってるのですが、白血球の数値が低すぎて免疫力めんえきりょくが極端に下がっていたための感染だと思われます。抗菌薬の投与がっべいしょうじょうで合併症は防げると思いますが 先日の無理がたたっているのでしょうか、心臓への負担が大きいようです。予断よたんは許しません、このまま熱が下がらないとなると……」

心電図モニタを見ながら西尾医師が言った。看護師に、あれこれ指示を出し、懸命の処置を施す。短く速い呼吸を繰り返す紗江子に意識はない。

「ご家族 お母さんをお呼びになっただろうでしょう。他に逢わせてあげたい方は居られませんか」

看護師の言葉にも、俺は曖昧あいまいに首を振ることしかできなかった。居合わせた祐二が「俺が」と言っただけで病室を飛び出て行く。

処置の邪魔をするつもりはないが、紗江子に触れていたい。俺が手を離れた途端、彼女が遠くに行ってしまうように思われた。忙しく動き回る医師と看護師の間に体を割り込ませたまま手を握り続け、紗江子が目を開いてくれることを祈る。奇跡か 彼女が目を開いた。微かだが、指先にも力が込められる。

「……」

震える唇に耳を近づけてみるが、声にはなっていない。

「何だい？ 聞こえないよ。辛かったら無理しなくていい。今、熱を下げてもらってるからな」

俺の言葉が紗江子に届いているのかどうかも分からなかったが、まだ終わりにはしない それを病室に居る全員に宣言するかのように声にした。

「あ……りがと」

再び紗栄子が唇を開く。小さな囁きだったが俺には、はつきりと聞き取ることが出来た。彼女の瞳からこめかみに一筋の涙が流れ落ちる。次の瞬間、俺の手を握り返す力が消え、紗江子の瞼が閉じられた。

「礼なんか……いうな」

最後の言葉としては、最高に気の利かない文句だった。

医師が退室し、看護師が紗江子に繋がっていたチューブやケーブルを外し始めても、俺は怖くて心電図に目をやることが出来なかった。戻ってきた祐二が大声で「紗江ちゃん」と叫んだのを、他の世界の出来ごとのように感じていた。視界は涙でぼやけ、看護師が紗江子と俺の手を離れた時も、されるがままにボンヤリとしていた。

まるで眠っているような　そんな表現が相応しいのだろう。部屋から運び出される紗江子の表情は苦悶くもんから開放され、とても安らかなように見えた。しかし、そこに彼女の魂は感じられない。ほんの数分前、俺に、ありがとうと言った紗江子の意識はどこへ消えてしまったのだろう。

俺は立ちあがることも出来なかった。医師の臨終じゆうを告げる言葉にも、看護師の慰めにも返事をする必要さえ、できなかった。祐二が何か言っていたが、顔を上げることすらしなかった。

かつて、これほどの絶望感を味わったことはない。親父が逝った時は葬儀の段取りだんどや遺体の搬送の手配に追われ、哀しみに浸ひたっている余裕すらなかったな、あの時と何が違うのかな　そんなことを考えていた。紗江子の居ない未来を、思考から閉め出すことが出来るなら何でもよかったのだ。

医療機器もベッドも運び出され、テレビの置かれたキャビネットと俺の座る椅子のみが取り残された部屋を出たのは、どのくらい後だったろう。病名を知らされた時同様、夢遊病者のようにフラフラと階段を上がり、屋上への重いスチールドアを開けた。そしてギターの弾き語りを聞かせた緑化庭園まで歩くと膝から崩れ落ちて四つ

ん這いになった。

雪の舞う屋上だったが、寒さも手の冷たさも感じられない。生きたまま内臓をもぎ取られたような気分だった。心が折れるというのは、こんな状態をいうのか、絶望という名の底なし沼にずぶずぶと沈んでゆくような感覚に囚われる。

人が自ら命を絶つ時は、こんなものなのかも知れない。自暴自棄（おごりおごり）になっていた訳ではない。ただただ、空虚（くわく）だった。

精神が肉体の指揮を拒否していた。思い通りに動かない体で苦勞して手摺（てす）りを乗り越えようとしたその時、ジーンズのポケットから何か落ちて乾いた音を立てる。ICレコーダーだった。病室を出た俺に看護師が手渡してきた記憶が蘇る。手に取って再生ボタンを押すと紗江子の声が流れてきた。

「痛みがひどくつて、咳（せき）をすると動けなくなってしまうの。聞きづらかったら、ごめんなさい。あたしはもう長く生きられないように感じます。だから、意識のしっかりしている今のうちに伝えたいことを残しておきます」

耳慣れた、そしてもう二度と聞くことのできない紗江子の声に、ICレコーダーを握った手に力がこもる。

「父に捨てられたあたしです。愛する人が居なくなる哀しみは分かるつもりよ。だから、あんなに深く愛してくれたジュンを哀しませるのが体の痛みよりも辛いです。でも、約束して　あたしの分まで生きてくれるって。あなたにはお母様も祥子ちゃんも由里ちゃんも、そしてたくさんのお友達が居ます。妬（や）げちゃうけど、永遠を誓った人だって居るのでしょ」

枯れ果てたと思った涙が再び溢れ出る。

「ジュンの敬愛するエリック・クラブトンさんの歌をネットで調べました。あなたが心配するから言えなかったけど、右目が、かすんでしまっているの。携帯画面の小さな文字は、読むのに苦勞しちやった。天国へ行ったお子さんに贈った曲だったのね。どうりで、あたしには聞かせてくれなかったはずだわ。『ここは自分の居る

べき場所ではない。強くならなきゃ、しっかりしなきゃ」 そんな歌詞なのでしょう？ だから、あたしを追いかけたりしてはダメ」 激痛と闘いながらなのか、朦朧とする意識を奮い起しながらなのか、その両方だったのかも知れない。途切れ途切れだったり空白が続いたりだったが、俺にはそこに紗江子が居て語りかけてきてくれるように感じられた。

「自惚れちゃったかな。ジュンは強い人だから、そんなことないわよね。でも、どうしてもそれだけを伝えたくて」

自惚れてなんかないさ。君の声がなければ俺はとうにそこから飛び降りていたよ。

「約束を果たせなかったこと、いっぱい迷惑をかけてしまったこと。我儘で困らせたことに、ごめんなさいと言わせて下さい。最後のごめんなさいです、怒らないでね 料理は得意じゃなかったけど、一度だけ作ってあげた朝食を、あなたはとても美味しそうに食べてくれたわね。今それを思い出しました。たった一日だったけど、新婚夫婦みたいな経験が出来て嬉しかったです」

堪え切れずに声を上げて泣いた。誰が聞いてようと構うもんか。「でも、あたしは幸せでした。長くは生きられなかったけど、あんなに充実した時間は、なにもものにも代えがたい経験でした。誰もがあなたと巡り逢うことの出来ない中で、あたしはあなたと出逢い、たくさんの愛と幸せを受け取りました。あなたがよく口にしていた遺伝子が求め合う恋愛、あたしはあなたとそんな関係でいられたのかしら？ あなたの顔、声、温もり、口癖、首の下のほくろ、全て忘れません。生まれて初めてのバッテリーセンターもボーリングも楽しかった。美味しいものもいっぱい食べたわね。チェンジ・ザ・ワールド 素敵でした。あたしが星になっちゃうけど、ベガからあなたを見守ってます。だから、愛に臆病にならないで下さい。傍にいらなくても、ずっとずっとジュンを愛してます」

胸を打つ言葉という表現がある。俺はこの時、全身を打たれていた。

「みなさんに伝えたいことも録音しました。祐ちゃんに渡してあります。聞いてもらえると嬉しいです。お葬式はしないで下さい。忙しいみなさんに悪いわ。お経きやうだって分からないし、難しい名前にされちゃうのは、あたしでなくなるみたいで嫌です。ジュンにとってはいつまでも紗江子のままで居たいから。ジュンのおうちのお墓に入れてもらえるのかな。お父様と坊やに逢えるといいな」  
入れてやるさ　居なくなつて、尚、俺に死を思い留まらせてくれた君なんだ。どんな頼みだつて聞いてやる。

「聞き終わつたら、これは祐ちゃんに返しておいて下さい。大事な商売道具を借りちゃつてごめんなさいつて伝えておいてくれる？もう一度いいいます。あたしはジュンをずっとずっと、ずーっと愛しています」

舞っていた雪が止み、ICレコーダーを握りしめたまま立ち尽くす俺を、月灯りが照らし出す。

生きるよ　紗江子をずっとずっと愛したまま生き続ける。君が見守つてくれるんだもんな、愚おろかな真似は出来ない。

絶えることなく流れ続ける涙でぼやけた視線で、夜空を見上げたそこに、祈りを捧げるべきベガはまだない。君は、どの星になつたんだ？　ペテルギウスが一瞬明るく瞬またたいた。そこか

俺は肩の高さに上げた手を小さく振つた。

俺は紗江子の最期の願いに応えなかった。

葬儀屋と坊主を儲けさせるだけのセレモニーなどするつもりはなかった。義理で手を合わせるだけの弔問客に、眠る紗江子を晒したくはなかった。

ただ、「紗江子さんに別れを告げることの出来なかった人達のため、その場所を提供しておあげなさい。それが、あんたから紗江子さんへの最後の贈り物になる」そう言ったおふくろの、言葉には何かしら俺を衝き動かすものがあり、家族葬という形での葬儀を行うことにした。

香典も受け取らなければ返礼品もない。僧侶も呼ばず戒名もつけない。売上げの上がらない質素なそれは、会場側にとつてはありがたくなかっただろうが、せめて、それだけでも紗江子の遺志を尊重したいと思った。純粹に紗江子の死を悲しんでくれる人だけが参列してくればよかったのだ。

祭壇に手向けられた花や果物の籠に囲まれ、死に化粧を施された紗江子が横たわる。「きれいな顔ね、眠ってるみたい」棺を覗きこんでは、人々が口々に言う。

俺は棺に入れられた紗江子を見なかった。魂の宿る彼女の美しさはこんなもんじゃない、そこに入っているのは紗江子だけど紗江子じゃない。遺影だけをじつと見つめていた。静かすぎる葬儀だった。エリック・クラプトンクロナクルズをBGMに、紗江子の残した声流れ出す。ICレコーダーにマイクをかざす祐二も頬を涙で濡らしていた。

「お母さん、お母さんより先に死んでしまうあたしを許して下さい。あなたが居なければ、あたしはこの世に生まれてこれなかったんですね、ありがとうございました」

「叔母さん、本当にお世話になりました。高校に行かせてもらっ

た御恩は、ずっと忘れません。母を宜しくお願いします」

「祐ちゃん、毎日お見舞いにきてくれてありがとう。早く一人前の探偵さんになってね」

「ジュンのお母様、あたしを受け入れてくれて、ありがとうございます。新しいお母さんが出来たみたいで幸せでした。もっともつと、お話しがしたかった。ジュンの小さかった頃のお話が聞きたかったです」

「祥子ちゃん、由里ちゃん、美味しい物を奢るって約束を果たせずにごめんね。欲しい洋服があれば持つていって下さい。着てくれると嬉しいな」

「大山さん、美味しいコーヒーをお客さんに淹れ続けてください。ジュンのことをいっぱい教えてくれてありがとうございました。大山さんのお陰で、一緒に過ごせた時間よりも長くジュンと居られたように感じる事ができました」

「水野さん、水野さんのお陰でジュンと仲良くなる事ができました。ありがとうございます」

「斎藤さん、かおるちゃん、いつまでも仲良くね」

「ジュンのお友達みなさん、あんな怖い顔をしてても、ジュンはさびしがり屋です。あたしがいなくなった時には、みなさんで支えてあげてください。よろしくお願いします」

「最後になっちゃったけど、ジュンへ。ジュンへのメッセージはもう伝えたわよね。省略しちゃったら怒るか？ もう一度、精一杯の気持を込めて言います。あなたに逢えて、あたしはとても幸せでした。ありがとう。ずっとずっと、ずーっと愛しています」

ベガからずっと見守っている。そう言ってくれた紗江子のためにも二度と泣くまいと誓った俺だったが、それをいとも容易く打ち破る力をもって彼女の言葉が降り注ぐ。紗江子　ごめん。この涙を最後にするから。

祥子の号泣がホールに響き渡った。

遺骨のおさめられた小さな桐の箱を抱いて式場に戻った俺は、紗江子の気配を感じて周囲を見回す。

参列者のなかに見当たらなかった黒羽二重姿の氏家京子が柱の影に隠れるようにして立っていた。

「いらしてたんですか 入ってこられればよかったのに」

加藤頼子も姉に気がついたようだ。

「ねえさん、来てたのね 紗江ちゃん、こんななっちゃって」

再び感情が昂ぶったように、ハラハラと涙を流し始める。病院で母親に告げた、二度と逢わせないという言葉を俺は後悔していた。

質素過ぎる葬儀をなじられでも仕方ないな。俺はそう覚悟をしていた。

無言のまま俺を見つめていた紗江子の母親の目が大粒の涙で潤んだ。

「わたしの我儘で父親をなくし、あんな苦勞までさせた娘よ。今更、優しい母親なんか出来る訳がないでしょうに。ああやって、金の亡者を演じ続けるしかなかった 紗江子に合わす顔なんかないじゃない」

紗江子の母親は、膝をつき、堰を切ったように泣きだす。俺は救われたような気分になった。

紗江子 君は親にすら愛されなかったといったけど、どうやら間違っていたようだぞ。俺は氏家京子に手を貸して立たせる。

「紗江子の部屋に行きましょう。母親である、あなたの許しなくして、彼女のものは何一つ持ち出せません」

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9035u/>

---

ベガへの祈り

2011年8月28日11時29分発行